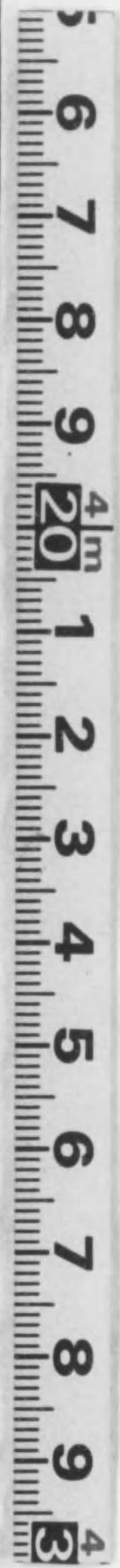


F53-Ma95-36㊦



1200500765108

F53
MA95
36



始



1-3269

1/2

F53

MA95

36



岩波文庫

878

モウバツン短篇集

飾

頸

外七篇

前田晁譯



岩波書店



56p-14

緒言

ギイ・ド・モウバツサン（一八五〇——一八九三）が近代フランスの隨一の短篇作家であることは、今更改めていふにも及ばぬであらう。彼は僅々十年にしか過ぎなかつた文學的生涯の間に、六篇の長篇の外に凡そ二百八十篇の短篇を書いてゐる。實に多産な作家であつたといはなければならぬ。従つて、その取つた題材の如きも、殆ど人生のあらゆる方面にわたつてゐるが、殊に、これを彼の得意な短篇に見る時、よく斯くまでに廣く一切にわたつて、その觀照が行届いたものだと思はせられるほどである。

わたしは嘗てモウバツサンをわが國の西鶴と比較して考へたことがある。兩者共に男女の問題に深く觸れて、生き／＼とこれを活寫したところが似てゐる。又、金錢の問題に強く觸れて、用捨なく人の世の弱點を剔抉したところも似てゐる。けれども、西鶴は要するに風流人であつた爲に、その悟のうちには笑諷を藏して浮世を茶かしたところがあるが、モウバツサンは終に人生に絶望して、氣が狂つて果てただけに、その笑諷のうちには涙が滂沱としてゐる。更に彼が狂氣して行く人間の心理を描いて、悽愴、深刻、人をして凝然とせしめるところなどは、全く西鶴には認めることの出来ない一つの特色である。

この集に收めた短篇は、僅かに數篇にしか過ぎないが、彼の人の世の愛情に對し、物慾に對し、

乃至は更に一層強くして打勝ちがたい人間性のおそろしい本質に對して抱ける笑諷、諷諷、譏諷、嫉惡、絶望等が、いかに、その鋭い洞察と、徹底した批判と、しかも、それらにあたたかな脈搏を與へた情熱と、そして、それを潑刺と生かした鮮かな表現とによつて、ここに活寫されてゐるかを見れば、彼が短篇作家としての偉大さは容易に頷くことが出来るであらう。

願れば、わたしの翻譯生活も可なり長い。殊にモウパッサンの物は、年を隔てて、時に此をし彼をして來た爲に、譯筆の上にも多少の變化があらう。——例へば、この集の卷頭においた『頸飾』の如きは、わたしが早大在學中、今から殆ど三十年近くも前にやつたもので、わたしの翻譯らしい翻譯の最初のものだといつてもいゝものである。——で、今度、これをこの文庫に收めるに就ては、各篇共に再應原作と照合した上、出来るだけ文體なども統一して完璧のものにしよと努めた。(昭和七年十二月八日。)

目次

	次	II
V	頸飾	七
V	歸村	三五
	ホルラ	三九
	愛(獵人日記の三ページ)	八三
	女王オルタンス	九三
	給仕、もう一杯	一〇七
	山小屋	一二一
	二十五フランの金	一四三

頸

飾

美しい愛嬌のある娘が、運命の神が間違ひでもしたやうに、下つばの役人の家などに生れるものだが、彼女もその一人であつた。持参金もなければ遺産を譲られる目當もなく、金持や名の聞えた人などに知られたり、理解されたり、愛されたり、求婚されたりするやうなこともなかつたので、文部省に勤めてゐる薄給の屬官の許に嫁いでいつた。

もとより着飾ることなどは出来なかつたので、質素な服装をしてゐたが、心の中では落ちぶれでもしたやうな氣がして面白くなかつた。實際、女に取つては、地位も階級もあつたものではない、ただ縹緞が好くて、上品で、愛嬌のあるといふことが、血筋や家柄の代りになるものだからである。生れついて美しく、天性が優雅で、氣持が素直でさへあれば、それが即ち唯一の地位で、賤の女から一足飛びに高貴の淑女と肩を並べるやうになることも出来るからである。

彼女は、ありとあらゆる美味に飽いたり、贅澤をほしのままにしたりするやうに自分は生れついてゐるのだと思つてゐたので、絶えず心を苦しめた。住居の佻しいのにも、壁のみじめなものも、椅子のこはれたものにも、布地の類が汚れてゐるのにも心を苦しめた。同じくらゐる世間の女は全く氣もつかぬやうないろんな事にも、彼女は心を苦しめたり癪癪を起したりした。勝手働きをしてゐるブルターニュ生れの小娘の姿を見ると、悲しい諦めや、夢中になつた夢などをまた呼び覺まさせられた。彼女は、東洋風の壁布の懸つたしんとした控の間に丈の高い青銅の燭臺が輝いてゐるさまや、半ズボンを着けた二人の肥つた家従が、燃えしきつてゐる暖爐の重苦しい温氣に眠氣さして、大きな臂掛椅子に眠つてゐるさまなどを夢に描いた。古代絹で裝飾した大きな

サロンや、いくらかかったか分らぬやうな珍らしい物の付いた好ましい家具や、さてはまた、親しい友達や、交際社會の流行兒で、すべての女の羨望の的となつて、目なりともその人の注意を惹きたいと願つてゐるやうな男達と、五時に、會談する爲に作られた、媚びるやうな香のする婦人室やを夢想した。

もう三日も洗はないテーブル掛をかけた丸いテーブルの前に、彼女が晚餐に坐ると、向ひ合つた夫はスウプ皿の蓋を取つて、「あゝ、いゝスウプだ！　こんなにいゝのは今までに見たことがない。」と、さも嬉しげな調子で言つた。その時彼女は、味のいゝ御馳走や、びか／＼輝いてゐる銀器や、古代の人物や魔の森の中に飛び交うてゐる奇鳥などを壁いつばいに描いてある壁布を思ひ浮べたり、立派な皿に盛られた旨い料理や、女に媚びる男の低い聲を、淡紅色をした鱒の肉か、或ひは鶉の翼を食べながら、スフィックスのやうな笑ひを浮べて、聞き入つてゐるさまなどを思ひ浮べた。

彼女は衣裳も寶石も何も持つてゐなかつた。しかもたださういふものだけを好んでゐて、さういふものが一番自分に適してゐると思つてゐた。それほどまでも、彼女は人に喜ばれたり、人から羨まれたり、人を迷はしたり、人に追ひまはされたりしたいと思つてゐた。

彼女は修道院時代の學校友達を一人持つてゐたが、その人は富んでゐたので、今はもう行つて會はうとはしなかつた。歸つた時に、一層苦しい思ひをせなければならぬからである。で、彼女は心痛や、後悔や、絶望や苦惱で、幾日も幾日も泣きくらしした。

ところが、或日の夕方、夫は勝ち誇つたやうな様子をして歸つて來た。手には大きな封筒を持つてゐた。

「そら、」と彼は言つた。「お前に上げるものがあるよ。」

彼女はさつと封を切つて印刷したカードを引出した。それには次の文句があつた。

「文部大臣及びジョルジュ・ラムボノオ夫人は、一月十八日、月曜日夕刻、大臣官邸にロア

ゼル氏并に同夫人の御來臨の光榮を有す。」

夫はきつと喜ぶことと豫期してゐたのに、彼女はいまはしさうに、その招待狀をテーブルの上に投げ出して、呟いた。

「これをわたしにどうしろと仰有るんですか？」

「だつて、お前、わたしはお前が喜ぶことと思つてゐたんだ。お前は外へ出たことがないし、これは實にいゝ機會だからねえ。それを費ふにはずるぶん苦心したんだよ。みんなが行きたがつてゐるので、非常に欲しがられてゐて、それに屬官には幾らも招待狀はくれないんだから、高等官達はみんな來るだらうし……」

彼女はいら／＼したやうな目付をして夫を見てゐたが、たまり兼ねて言つた。

「ちやアあなたは、わたしに何を着て行けと仰有るんです。」

彼はそこまでは考へてゐなかつたので、どもりながら言つた。

「え、芝居へ行く着物は？　あれがとていゝやうに思はれるよ、僕には……」

と見ると、細君が泣いてゐたので、彼は呆氣に取られて言葉を切つた。二條の大きな涙が、兩方の目のかどから口のかどの方へ靜かに落ちた。彼はどもりながら言つた。

「どうしたんだ？ どうしたんだ？」

ところが、一生懸命の思ひで、彼女はやつと自分の悲みに打ち勝つて、濡れた頬を拭きながら、落着いた聲で答へた。

「何でもありません。たゞわたくしは着物がありませんから、この夜會へはまゐれません。どなたでも御同僚の方で、わたくしよりもいゝ支度の出来る奥様のおあんなさる方へ、その招待状は上げて下さいまし。」

彼は全く失望した。でも言葉を續いだ。

「まあ、お待ちよ、マチルド。まあ相當の着物で、外の場合にも着られようツていふのは幾らくらゐるかゝるだらう？ なるべくあつさりしたので。」

彼女は暫くの間考へて、胸算用をして見たり、またどのくらゐならば、つましい屬官から無下に拒まれもせず、びつくりした聲も出されずに、貰へようかといふ金額を思案して見たりした。終に彼女はためらひながら、答へた。

「わたくしもよくは存じませんが、四百フランもあつたら、たいてい間に合はうかと思ひます。」彼はちよつと青くなつた。ちやうどそれだけの金額を貯蓄して置いたからで、彼はそれで鐵砲を買つて、今度の夏はナンテエルの平野で、そこへ雲雀を撃ちに行く友人達と一しよに、ちよつ

とした獵をして日曜を暮らさうとしてゐたのであつた。が、彼は言つた。

「よし。四百フランをお前に上げよう。ぢやア、なるだけ立派な着物をこしらへるやうにして御覽。」

夜會の日は近づいて來た。そしてロアゼル夫人は悲しさうで、不安で、心配らしかつた。しかし、着物は出來てゐた。で、夫は或晩彼女に言つた。

「どうしたんだ？ え、この三日ばかりお前は何か變ぢやないか。」すると、彼女は答へた。

「わたくし、寶玉にも寶石にも、身に着けるものツて何にもありませんから、それが苦になつてなりません。まるで貧乏神見たいですもの。いつその事、あの夜會には行くまいかと思ひますの。」

彼は言つた。

「生花を着けたらいゝぢやないか。今のやうな季節にやア却つてしやれたものだよ。十フランも出せば立派な薔薇が二つや三つは買へるぢやないか。」彼女は承服しなかつた。

「いゝえ。お金持の大勢の女たちの中で、貧乏らしく見えるくらゐ氣の引けることはありません

んもの。』

ところが、夫は叫んだ。

『馬鹿だなあ、お前は！　おやあ、お友達のフォレスチエ夫人のところへ行つて、何か寶玉を貸して貰つたらいいぢやないか。お前とあの人の間柄で、そのくらゐのことが出来んこともあるまい。』

彼女は喜びの聲を擧げた。

『さうでした。わたくし、ちつとも考へつきませんでした。』

次の日、彼女は友達のところへ行つて、困つた仔細を打ち明けた。

フォレスチエ夫人は鏡戸のついた衣服室へ行つて、大きな寶玉箱を取出して、それを持つて来て、明けて、ロアゼル夫人に言つた。

『さ、お選りなさいな。』

彼女は最初幾つかの腕環を見た。次に眞珠の頸飾を見た。次にヴェニス製の十字架の飾や、金や寶石の優れた細工などを見た。鏡の前に立つて着けて見てはためらつて、どれを手離し、どれを返さうかと容易に決心が附かなかつた。口では絶えず訊いてゐた。

『あなた、もつと他のは無くつて？』

『え、有つてよ。御覽なさいな。あなたのお好きなのはあたしには分らないから。』

ふと彼女は、黒い縞子の箱の中に、立派なダイヤモンドの頸飾を見つけた。どうしてもそれが欲

しくなつて、胸はどきどきと高く打ち始めた。両手はそれを持つた時に顫へた。ローブ・モンタ
ントの上から、咽喉にそれを掛けて見て、自分で自分の姿に見惚れてゐた。

やがて彼女は苦しさにためらひながら言ひ出した。

『あなた、これを貸して下さらない、これだけでいいの？』

『え、え、よござんすとも。』

彼女は友達の前へ飛びついて、熱心にキスした。そしてその寶を持つて歸つた。

夜會の日は来た。ロアゼル夫人は大成功だつた。彼女はたれより綺麗で、しとやかで、上品で、
にこ／＼してゐて、心から有頂天になつてゐた。男はみんな彼女に目をつけて、彼女の名前を訊
いたり、紹介されようと力めたりした。内閣の秘書官達はみんな彼女とワルツを踊りたがつた。大
臣の目にまで留つた。

彼女は酔つて夢中で踊つた。美の勝利や、成功の譽れや、人々から受けたあらゆる尊敬、感嘆、
呼び覺まされた欲望、乃至は女の心に取つて申分のない、非常に嬉しい勝利などから作られた幸
福の雲の中に、すべてのことを忘れて快樂に酔つたのだつた。

彼女は朝の四時ごろ歸つた。夫は夜中頃から小さな淋しい客間で他の三人の紳士と一しよに眠
つてゐた。その人達の細君たちもまた快樂に酔つてゐたのだつた。

彼は持つて来ておいた平常着の粗末な上被を、彼女の肩に懸けてやつた。そのみすほらしさが

立派な夜會服とは調和しなかつた。彼女はそれに氣つくと、つと逃れて、今しも高價な毛皮で身を包んでゐる他の女達に見附かるまいとした。

ロアゼルは呼び止めた。

「ま、お待ち、外へ出ると風を引くよ。わたしが行つて馬車を呼んで来るから。」

しかし、彼女はそれには耳を藉さうともしないで、急いで階段を降りた。二人は通りに出たが馬車は一臺も見えなかつた。で、二人は、遠くを通るのを見ては馭者を大聲で呼びかけながら探し始めた。

二人は失望して、寒さに顫へながらセイヌ河の方へ降りて行つた。やつとのことで、二人は河岸へ来た時、舊式な夜稼ぎの馬車を一つ見付けた。それはちやうど、晝間のうちは自分の淺猿しい姿を恥ぢてもあるやうに、日の暮れるまでは決してバリ界限に見られぬものだつた。

それが二人をマルチイル街の住居まで連れて来た。で、二人はまたもや悄然として部屋へ昇つた。彼女に取つてはすべてが終つたのだ。そして夫の方は、十時に役所に出てゐなければならぬことを思つてゐた。

彼女は鏡の前に行くと、肩に懸けてゐた上衣を跳ね退けて、も一度自分の盛粧を自分で見ようとした。ところが、不意に叫びを發した。彼女は頸のまはりに頸飾を持つてゐなかつた！

「もう半ば着物を脱ぎかけてゐた夫は、訊いた。」

「どうしたんだ？」

彼女は狂氣のやうになつて夫の方へ向いた。

「あの——あの——あの、フォレスチエさんの頸飾を失くしてしまつた。」

彼も狂氣のやうになつて突立つた。

「何！——何うして？——そんなことがあるものか！」

で、二人は彼女の着物の襷や、外套の襷や、ポケットの中や、あらゆるところを捜したが、見付からなかつた。

彼は訊いた。

「お前が夜會を出た時には確かにあつたんだね？」

「え、お邸のお玄關で觸つて見たんです。」

「だが、もし街で失くしたんなら、落ちた音を聞く筈だし。これやアきつと馬車の中だ。」

「え、多分さうでせう。あなた、番號を見て置いた？」

「いや、お前は。お前も氣がつかなかつた？」

「え、。」

二人はびくつとして互に顔を見合せた。たうとうロアゼルは着物を着た。

「一遍見て来よう。」と、彼は言つた。「今、通つて来た道をすつかり。見付け出さんとも限らぬから。」

で、彼は出て行つた。彼女はがっかりして寢床へ行く力もなかつたので、夜會服のまゝで椅子

に掛けて、火の氣も無い部屋の中に茫然として待つてゐた。

夫は七時ごろ歸つて來た。何にも見付からなかつた。

彼は警視廳へ行つた。新聞社へ懸賞廣告の依頼に行つた。馬車會社へも行つた——實際、少しでももしやと思ふところがあれば、どこといふことなしに駆けまはつた。

彼女はこの恐ろしい災難の前に氣が違つて行くやうな氣持で一日待ち暮らした。

ロアゼルは夜になつて、窪んだ、蒼白い顔をして歸つて來た。何にも見付からなかつたのだ。

『お前、お友達のところへ手紙を上げて置かなければならんよ。』と彼は言つた。『頸飾の留金を毀したから直しにやりましたつて。さうすればいろ／＼やつて見る猶豫が出来ようから。』

彼女は夫の言ふまゝに書いてやつた。

一週間の後、あらゆる望みの綱は切れ果てた。

そしてロアゼルは、五年も老けたやうになつて、言つた。

『どうしてあの寶玉の價ひをしたものか、考へなければならんよ。』

次の日、二人はそれの入つてゐた箱を持つて、中に記してあつた名前の寶玉商のところへ行つた。寶玉商は幾冊もの帳簿を調べて見た。

『その頸飾の方は、手前共でお賣り申したのではございません。手前共ではただその箱だけ願つたものと見えます。』

そこで二人は、心配やら苦痛やらで病氣のやうになつて、先のと同一頸飾を求めようと、記憶を辿りながら、寶玉商から寶玉商へと尋ねて行つた。

二人はバレーエ・ロワイヤルの一軒の店で、捜してゐたのとそつくりのやうに思はれたダイヤモンドの頸飾を見つけた。直段は四萬フランであつた。三萬六千フランならば買へた。

で、二人は向ふ三日の間は賣らずに置くやうにと寶玉商に頼んだ。そして、もし二月の末までに先のが見付かつた時は、三萬四千フランで買戻して呉れるやうにといふ契約をした。

ロアゼルは父が遺した金を一萬八千フラン持つてゐた。彼はその餘を借りようとした。

彼は甲から一千フラン、乙から五百フラン、ここで五ルイ、そこで三ルイといふやうにして借りた。高利貸は勿論、あらゆる種類の金貨に關係をつけて、證書を作つて、おちぶれるまでの負債をした。彼は果して拂ふことが出来るかどうかを知らずに署名を敢てして、これから後の一生を犠牲にした。そして、なほこの上に来るべき苦痛や、將に落ちて來ようとしてゐる悲惨の暗い影や、あらゆる物質上の缺乏や、あらゆる精神上の苦痛やを受けねばならぬといふ見込などで恐れを抱きながら、寶玉商のところへ行つて、その勘定臺に三萬六千フランを置いて新しい頸飾を買つた。

ロアゼル夫人が頸飾を返した時に、フォレスチエ夫人は冷たい様子をして言つた。

『もつと早く返して下さらなきやア困りますわ。わたくしの方で要らないとも限りませんも

夫人は、もしやと友達が非常に恐れてみたその箱の蓋をあけなかつた。もし品の變つたことを見付けたとしたら、果して何と思つたらう？ 何と言つたであらう？ ロアゼル夫人を泥坊と思ひはしなかつたらうか？

ロアゼル夫人は今こそ貧乏ぐらしの恐ろしいことを知つた。しかも彼女は忽ち勇猛心を振ひ起した。この恐ろしい負債は拂はなければならぬ。彼女はそれを拂はうとした。で、召使には暇をやつた。住居は變へて、屋根部屋を借りた。

彼女は家事の骨の折れることや、勝手働きのいやなことを知るやうになつた。蔷薇色の爪を油の染みた皿や鍋の底で擦りへらしながら、食器を洗つた。汚れたシャツや肌着や布巾などを洗つて、繩にかけて乾しもした。毎朝、芥を街におろした。そして、一段ごとに休んで息を繼いで水を運び上げた。また下等社會の女のやうな風をして、腕に籠をかけて、八百屋へも乾物屋へも肉屋へも行つた。直段の懸引から悪口されることはあつても、その苦しい金を一スウづつなり貯蓄しようとした。

毎月二人は、幾らか拂つたり、書換へたり、日延をしたりせなければならなかつた。夫は夕方、さる商人の勘定書の清書をやつた。そして夜は、一ページ五スウの筆耕を折々やつた。

かくてこの生活が十年間續いた。十年目の終りに、高利の利子から利に利を積んだ借財まで、一切合切返済した。

一 ロアゼル夫人は今はずつかり老けてしまつた。貧乏世帯の世話女房となつた——力は強く岩乘になつて皮膚は荒れた。髪は亂れるし、スカアトは歪むし、手は赤くなつて、床に雑巾掛けをしてゐる時などは高調子に物を言つた。けれども、夫が役所へ行つて留守の時など、時々窓の傍に坐つて、ずつと以前のあの楽しかつた晩のことを、自分が美しくてちやほやされた夜會の時のことを思ひ返した。

もしあの頸飾を失くさなかつたならば、何うなつたらう？ 分るものか？ 分るものか？ ほんとに人の一生くらゐ不思議な變り易いものはない！ ほんとに些細な事がわれ／＼を榮えさせも枯れさせもするものだ！

ところが、或日曜日のことであつた。一週間の氣晴らしをしようとしてジャンゼリゼエへ散歩に行くと、ふと、子供を連れてゐる一人の婦人が目についた。それはフォレスチエ夫人で、やはり若くて美しく愛嬌があつた。

ロアゼル夫人の心は動いた。彼女は言葉をかけようとしたか？ さうさ、無論のことだ。金を拂つてしまつた今こそは、彼女は、それについての一部始終を打明けようとした。構ふものか。彼女は近寄つた。

『今日は、ジャンヌさん。』

一方はこんな上さんから馴々しく呼びかけられたので驚いたが、少しも見覚えがなかつたので、

どもりながら言つた。

「だつて——あなた！——わたくし、存じませんが——お間違ひぢやありませんの。」

「いゝえ、わたくし、マチルド・ロアゼルですわ。」

友達は叫びを發した。

「まあマチルドさん！ お變りなすつたこと！」

「えゝ、わたくし、あなたとお別れしてから、ずゐぶん長い間、苦しい情ない日を送りました

——それが、もとはみんなあなたから起つたことなの！」

「わたくしから！ まあ何うして？」

「あなた覚えていらつしやいますか、大臣さんの夜會で着けるツて、あなたにダイヤモンドの頸飾を貸して頂いたことを？」

「えゝ。それで？」

「あれをわたくし失くしましたの。」

「まあ、何をあなたは仰有るの？ お返しなすつたぢやありませんか。」

「お返ししたのは、そつくり同じですけれど別のですわ。それで、わたくしどもはその拂ひに十年間かゝりましたの。お存じでせうが、何にも無かつたわたくしどもには中々容易なことではありませんでしたわ。でも、やつと濟みましたので、わたくし、とても嬉しうございますの。」

フォレスチエ夫人は立止つた。

「ぢやあ、あなたは、わたくしのの代りにダイヤモンドの頸飾を買つたと仰有るんですの？」

「えゝ。ぢやあ、あなたはお氣が附かなかつたのねえ！ 尤も、非常によく似てゐましたわ。」

かう言つて、彼女はちよつと得意な、子供らしい喜びの色を浮べて微笑した。

フォレスチエ夫人の心は非常に動いて彼女の兩手を取つた。

「まあマチルドさん、お氣の毒なことをしましたわねえ！ わたくしの頸飾はまやかしものでしたわ。やつと五百フラン位の値打しきやないものでしたのにねえ！」

歸

村

海は短い、單調な波で岸を打つてゐる。白いちぎれ雲は、疾い風に追はれて、小鳥のやうに、廣い青空を横切つて飛んで行く。そして村は、大洋の方へだら／＼下りになつてゐる小さな谿の巖積の中で、日に暖まつてゐる。

村の入口に、マルタン・レズスクの家が、ただ一軒、路端に立つてゐる。粗壁の漁師小屋で、藁葺の屋根の上には一八が青々と繁つてゐる。葱や、キャベツや、三つ葉や山人參などのつくつてあるハンケチほどの大きさの菜園畑は戸口の前に方形をなしてゐる。垣根が道に沿うて結つてある。

亭主は漁に出てゐる。そして上さんは、小屋の前で、ばかに大きな蜘蛛の巣のやうに、壁の上に張り渡してある大きな茶色の網の目を繕つてゐる。十四になる娘は菜園畑の入口で、藁椅子に坐つて、うしろの凭りかゝりに背をもたせながら、シャツを、前に繕つたりつぎを當てたりした粗末なシャツをつづくつてゐる。もう一人の、一つ年下の娘は、まだあやすほどにもならぬ小さな赤ん坊を抱いて揺ぶつてゐる。そして二つか三つぐらゐの二人の幼児は、尻を地べたにつけて、鼻と鼻とを突き合せて、覺束ない手付きで庭を造りながら、互ひに顔へ砂を一掴みづつ投げたりしてゐる。

誰も口を利かない。ただ眠らせようとしてゐる赤ん坊だけが、かん高い、脆い、小さな聲で絶えず泣いてゐる。猫が窓敷の上に眠つてゐる。そしてちやうど咲き満ちてゐる丁字の花が、その壁の下で、白い花の美しいクシヨンを作つて、その上に蠅の群がぶん／＼と羽音を立てゝゐる。

入口の傍で縫物をしてゐる娘が、不意に聲を擧げる。

『おツかあ！』

母親が答へる。

『何だよ？』

『あいつ、また来たよ。』

彼女らは朝から不安である。といふのは、一人の男が、乞食のやうな風をした年取つた男が、家のまはりをうそ／＼してゐるからである。彼女らがその男を初めて見たのは、父親が船に乗つて出掛けるのを送りに行つた時であつた。男は家の入口に向ひ合つた溝の縁に腰かけてゐた。そして濱から歸つて来ると、彼女らは男がそこで、ちつと家を眺めてゐるのを見た。

男は病んでひどく難儀してゐるらしかつた。彼は一時間以上も動かかなかつた。が、やがて、患者と思はれたのに氣が付いて、立ち上がると、足を引きずりながら去つた。

ところが幾らも程たないうちに、彼女らは彼がまたのろい疲れた足取りでやつて来るのを見た。そして今度は幾らか離れたところに、彼等を窺はうとでもするやうに、また腰かけた。

母親と娘達とは恐ろしくなつた。殊に母親は臆病の性質であつた上に、亭主のレズスクは、夜にならなければ海より歸りやうがなかつたので、ひどく心配した。

亭主はレズスクと呼ばれ、彼女は、人々がマルタンと言つた。そして人々は彼等をマルタン・レズスクと呼んでゐた。その譯はかうである——彼女は前にマルタンといふ水夫と結婚した。そ

の男は毎年夏になるとテエル・ヌウグへ鱈漁に出掛けて行つた。

結婚してから二年経つて、彼女が一人の小さな娘を持つた上に妊娠六ヶ月であつた時に、夫の乗り込んだヅウ・スウルといふ、デイエブの三本マストの船が、行方不明になつた。

全く何の便りもなかつた。それに乗り込んだ水夫は一人も歸らなかつた。そこで人々は、船も乗組員も一切が失はれたものと考へた。

マルタンの上さんは、ひどい苦勞をして二人の子供を育てながら、十年の間夫の歸りを待つてゐた。すると、彼女がしつかりした、氣立のいい女だつたので、土地の漁師でレズスクといふ、一人の男の兒を持つた鰥夫が彼女に結婚を申込んだ。彼女は彼と結婚した。そしてまた三年の間に二人の子供を生んだ。

彼等は苦しい、つらい生活をしてゐた。パンだけでも高かつたので、肉は家の中で殆んど知られてさへなかつた。で折々、冬の間、幾月もしけが續く時は、パン屋に借りをこしらへた。でも子供たちはよく育つた。人々は言つた。

『えれえ人達だぞよ、マルタン・レズスクらは。マルタンの上さんは働きもんだし、レズスクはまた漁にかけちやア及ぶ者がねえんだからな。』

欄にかけてゐる娘はまた言つた。

『あいつ、わたい達を知つてゐるんだよ。あれやアきつとエブレギイユかオウズボスクの乞食なんだよ。』

けれども母親はそれに誤られなかつた。いや、いや、確かに、この邊のものではなかつた！
彼は杭のやうにおつと動かずに、目を執ねくもマルタン・レズスクの小屋に着けてゐた。マル
タンの上さんは、むつとすると共に、恐ろしさに勵まされて、十能を掴んで門前へ出て行つた。

「何をお前さんは其處でしてゐるんだい？」と彼女は胡散な男に向つて呶鳴つた。

彼は呶れ聲で答へた。

「ねしは休んでゐるのぢや！何かお前さんに悪いことでもしたかい？」

彼女はまた言つた。

「なんでそれぢやア、わしらが家の前で、さうじろく／＼見てゐなざるんだい？」

男はまた答へた。

「わしは誰にも悪い事をしやアしない。それとも路端に休んでゐちやアいけないのかい？」
返す言葉が見付からなかつたので、彼女はまた家へはひつた。

日はしづかに移つた。晝頃になると、男は見えなくなつた。ところが彼はまた五時頃に歸つて
來た。晩には見えなかつた。

レズスクは夜になつてから歸つて來た。みんなは彼にその事を話した。彼はかう括りを付けた。
「それやアのらくら者か碌でなしだ。」

そして彼は氣にも留めずに寢床へ行つた。けれども、上さんのはうは、あのいかにも變な目付
でじろく／＼見てゐた胡散な奴のことを考へてゐた。

夜が明けると、強い風が吹いてゐて、漁師は、迎も海へ出掛けられさうもなかつたので、上さ
んに手傳つて網の繕ひをすることにした。

九時頃に、パンを買ひに行つたマルタンの姉嬢が、たまげた顔をして、駈けて歸つて來て、叫
んだ。

「おツかあ、あいつ、また來たよ！」

母親ははつと思ふと、眞青になつて、亭主に言つた。

「さあ行つて、あいつに言つとくれよ、レズスク、わたし達をあゝじろく／＼見ないやうにツて、
わたしもう、氣が違ひさうだから。」

そこで煉瓦のやうな顔色をした、赤い髭の濃い、青い目の中に黒い瞳の光つてゐる、沖で雨や
風を凌ぐ爲にいつも羊の襟巻で包まれた頸の太い、背の高い漁師のレズスクは、靜かに出て行つ
て胡散な奴に近づいた。

そして二人は話し始めた。

母親と子供達とは心配して顫へながら、遠くから彼等を見てゐた。

不意に、知らぬ男は立ち上がつて、レズスクと一しよに家の方へやつて來た。
マルタンの上さんは、びつくりして、あとじさつた。亭主は彼女に言つた。

「この人にパンを少しとサイダアを一ぱいやんなよ。おととひから何にも食べないんだとよ。」
そして二人は連れ立つて小屋の中へはひつた。後から母親も子供達も續いた。胡散な男は腰を

おろして食べ始めた、みんなの注目の下に頭を垂れながら。

母親は、立つたまゝで、ちつと彼を見詰めてみた。二人の大きなマルタンの娘達は、戸に凭りかゝつて、一人は赤ん坊を抱いたまゝで、穴のあくほど目を男の上に据ゑてみた。そして爐の前の灰の中に坐つてみた二人の幼児もまたこの知らぬ人をよく見ようとでもするやうに、黒い鍋でいたづらをしてゐたのを止めた。

レズスクは椅子に腰をおろしてから彼に訊いた。

「ちやアお前さんは遠くから来たんだね？」

「わしはセツトから来たんだよ。」

「歩いてかね、さういふやうに？」

「さうさ、歩いてさ。一文なしの時にやア外に仕方がないからね。」

「それで、これから何處へ行くんだね？」

「わしはここへ来たんだよ。」

「ちやアお前さん、誰かここに知つたものがあるんだね？」

「まあ、さうだよ。」

二人は黙つた。彼はずぶん飢ゑてはゐたが、でもゆつくりと食べた。そしてパンを一口食べる毎にサイダアを一口飲んだ。彼は衰へた、皺の寄つた、どこもかもからになつたやうな顔をしてゐた。そしてひどい難儀をして来たやうに見えた。

レズスクは出し抜けに彼に訊いた。

「お前さんの名は何といふんだね？」

彼は俯向いまゝで答へた。

「わしの名は、マルタンぢや。」

ぞつとする身震ひが母親の身體を走つた。彼女はもつと傍でこの宿無しを見ようとでもするやうに、一足前へ進んで、彼の眞向うに立つた、腕をぶらりと下げ、口をぼかんと明いたまゝで。誰も何も言はなかつた。レズスクはたうとうまた口を切つた。

「お前さんはこの者かね？」

彼は答へた。

「この者だよ。」

村

そして彼がたうとう頭を挙げると、上さんの目と彼の目とはびつたりと合つて、まるで目で結び付けられでもしたやうに、互ひに混ざり合つたまゝで動かなくなつた。

と彼女は不意に、異つた、低い、顔へ聲で言つた。

「お前さん、お前さんかね？」

彼は徐かに言つた。

「さうぢや、わしぢや。」

彼は身動きもせず、パンを噛み續けた。

レズスクはあわてたよりもびつくりして、吃りながら言った。

『お前さん、マルタンさんかね?』

相手は簡単に言った。

『さうぢや、わしぢや。』

で第二の夫は訊いた。

『ぢやアどこからどうして来なすつた?』

第一の夫は話し出した。

『アフリカの海岸からぢや、わしたちは暗礁に乗り上げたのぢや。わしたち三人だけが、ピカルとワチネルとわしだけが助かったのぢや。そして野蠻人に捕まつて十二年間留められたのぢや。ピカルとワチネルは死んでしまつた。イギリスの旅の人がそこを通りかゝつて、わしを一しよに連れて、セツトまで連れて来てくれたのぢや。で、わしはここにゐる。』

マルタンの上さんは、顔を前掛で蔽うて、しく／＼と泣き出した。

レズスクは言ひ出した。

『一體これやア、わし達はどうすれやアいゝのか?』

マルタンは訊いた。

『お前さんはこの女の御亭主かね?』

レズスクは答へた。

『さうぢや、わしぢや!』

二人は顔を見合つて黙つた。

やがて、マルタンは、彼のまはりに輪をなしてゐる子供達を考へるやうにして見てみたが、頭を傾かせて二人の娘達を指し示した。

『あの二人はわしのぢやね?』

レズスクは言った。

『お前さんのぢや。』

彼は立ち上がらなかつた、接吻しようともしなかつた。彼はただ言った。

『おゝ、大きくなつたなあ!』

レズスクはまた言った。

『一體わし達はどうすれやアいゝのか?』

マルタンも困つて、どうしてよいか知らなかつた。たうとう彼は決心した。

『わしは、お前さんのいゝやうにする。わしはお前さんに迷惑をかけたことはない。この家を見るとき、どつちにしても厄介ぢや。わしには二人の子供がある、お前さんには三人の子供がある、それぞれ自分のものぢや。お袋は、お前さんのものか、わしのものか? わしはお前さんの好きに任せるが、この家は、これはわしのものぢや、親父がわしに遺してくれたんだし、わしはここで生れたんだし、公證人の所に書附もあるんだし。』

上さんはまだ泣いてゐた。小さな嘸り泣きが、前掛の青い切れの中から洩れ聞えた。二人の大きな娘は傍へ近く寄つて、不安さうに父親を見てゐた。

彼は食べてしまつた。今度は彼が言つた。

『一體わし達はどうすれやアいゝのぢや？』

レズスクはふと思ひ付いた。

『司教さんの所へ行くが一番だ。あの方が決めて下さらう。』

マルタンは立ちあがつた。そして彼が妻の方へ近付くと、彼女は嘸り泣きながら彼の胸に身體を投げかけた。

『お前さん！ 歸つたの？ マルタン、おゝマルタン、歸つたの！』

と彼女は、不意に昔の吐息に、はたちの歳と、初めての抱擁とを思ひ出させる記憶の大きな波に動かされて、腕一ぱいに彼を抱いた。

マルタンもまた動かされて、彼女の輕布帽の上に接吻した。爐の中にもゐた二人の子供は、母親の泣くのを聞くと、一しよにわあツと泣き出した。そして赤ん坊もまた、マルタンの二番目の娘の腕の中で、調子外れの笛のやうな鋭い聲で泣き出した。

レズスクは立つて待つてゐた。

『さあ、』と彼は言つた。『行つて決めなれやアならんよ。』

マルタンは妻を放した。そして、彼が二人の娘を見ると、母親は彼女らに言つた。

『おとつさに、せめて接吻なりとおしよ。』

娘達は乾いた目をして、呆れて、いくらか恐れながら、一しよに傍へ寄つた。で彼は一人づつ、兩方の頬の上に、田舎者の大きな軽い接吻をした。と、この知らぬ人が傍に寄つて来るのを見ると、赤ん坊は殆んど引きつけさうなほどに鋭い泣き聲を立てた。

やがて二人の男は一しよに出て行つた。

二人がカフェ・コンメルスの前に差しかゝると、レズスクは訊いた。

『一ぱいやつて行かないか？』

『結構だね、』とマルタンは言つた。

二人ははひつて、まだ空つぽな部屋の中に腰をおろした。

『えゝ！ シコさん、ふたツつ、いゝのをね。マルタンが歸つて来たんだよ、マルタンが、うちの奴のマルタンがさ、おめえよく知つてよう、それ分らなくなつたツウ・スウルのマルタンさ。』
すると、腹の便々とした、赤ら顔の、肥りすぎた居酒屋の亭主は、片手に三つのコップを、片手に樽を持つて出て来て、落付いた調子で訊いた。

『へえ！ マルタンさん、歸つたの？』

マルタンは答へた。

『歸つたよ！……』

ホ

ル

ラ

五月八日 何といふ麗らかな日だらう！ 朝の内は家の前の草原に寝て暮した。上には大きなすずかけの木の枝葉が繁つて、草原は一面にその下蔭になつてゐる。一體わたしはこの國のこのあたりが好きだ。わたしがここで暮すのが好きなのは、深い根で結び付けられてゐるからで、その根といふのは、奥深い、微妙な、人をその祖先が生れて死んだ土地や、考へる事や、食べる物や、食物と同じに風習や、方言や、百姓言葉や、土地の匂ひや、村落や、乃至は空氣などにまで結び付けてゐるものである。

わたしは自分が大きくなつた家愛する。窓からはセイヌ河が見える。道の向う側に在るわたしの花園に沿つて、わたしの家とすれ／＼になつて流れてゐる、ルアンからル・アーヴルのはうへ行く大きい広いセイヌ河は、かなたこなたに往き來り小舟で満たされてゐる。

左の方に當つて向うの低いところにルアンの町が見える。その繁華な町には、青い屋根を並べた上に尖つたゴシック式の塔が方々に聳えてゐる。それは殆ど數へ切れないほどで、雅致のあるのや俗悪なのやが聖堂の尖閣に依つて統御されてゐる。無数の鐘は、そこから麗らかな朝毎に青空に響き渡つて、遙に快い鏗鏘の音を送つて來る。その唐金の音色は、或ひは強く或ひは弱く、そよ風の起つたり止んだりするにつれて聞えて來る。

何といふ心持のよい朝であつたらう！

十一時頃、濃い黒煙を吐きながら、苦しげに喘いでゐる蠅くらゐな大きさの蒸汽船に曳かれた長い一列のボートが、門前を通つた。

イギリスのスクウネル船が二艘、赤い旗を空に靡かして行つたあとへ、立派なブラジルの二本マストの船が来た。それは眞白で、不思議に清く輝いてゐた。わたしはそれにお時儀をしたが、なぜであつたか其譯は知らない。ただその船を見たのが非常に愉快であつただけだ。

五月十二日 この二三日、少し熱があるやうだ、どうも病氣らしい。でないにしても、とにかく元氣がなくていけない。

一體どこからさういふ不思議な力が来て、われ／＼の幸福を失望に變じ、われ／＼の自信を苦惱に變ずるのであるか？ この空氣の中に、この目に見えない空氣の中に、何とも知ることの出来ない力が充ち満ちてゐて、われ／＼はその不思議なものと隣り合つてゐるのでもあらう。眼が覺める時には非常に氣分がよくて、胸の中では歌ひたいやうな氣持がしてゐる。それが何故だらう？ わたしが流に滑り下つて、少し歩いてゐると、不意に、何か悪い事が家で待受けてゐるやうないやな氣分になつて歸つて来る。何故だらう？ 冷たい戰慄がざわ／＼と肌を渡つて、神經を顛倒し、魂を憂鬱にさせたのであるか？ 雲の形や、日の色や、或ひは四圍の事物の色などといふ變り易いものが眼の前を過ぎて、わたしの思想を攪き亂したのであるか？ 誰にそれが分る？ すべてわれ／＼を圍つてゐるもの、われ／＼が見ても認めずにあるもの、觸れても知らずにあるもの、さはつても感じずにあるもの、出會つても明瞭にそれを見分けずにあるものが、われわれに、われ／＼の五體に、及びそれらの器官を通してわれ／＼の觀念やわれ／＼の心そのものに、迅速な、驚くべき、そして解釋することの出来ない影響を與へるのだ。

この目に見えない神祕の奥深いことゝ云つたら！ われ／＼のはかない官能では到底それを測ることが出来ない。われ／＼の眼は、餘りに小さいものや、餘りに大きいものや、餘りに近いものや、餘りに遠いものやは、到底認めることが出来ない。又、星の世界の住民や、一滴の水の中の住民などを見ることが出来ない。耳はまたわれ／＼を欺いて、空氣の顛動を音響として傳へるのである。一體われ／＼の耳は妖精であつて、運動を音響に變ずる奇蹟を行つたり、またその變形に依つて音楽を産み出だし、自然の無言の顛動を歌聲にしたりする。嗅覺とてもその通りで、犬のそれよりも秀つてゐるし、味覺とても同じことで、葡萄酒の年數すら容易に辨別することが出来ない！

おゝ！ 若しわれ／＼が、自分らの爲めに、他の奇蹟を行ふことの出来る他の器官を持つてさへゐたならば、如何に無數の事物をわれ／＼の周圍に見出すことが出来るか知れない！

五月十六日 確かに悪い！ 先月は良かったのだ！ どうも熱がある。恐ろしく熱がある。いやそれどころか、どうやら熱の爲に衰弱して、身體ばかりか精神までもそこなはれたやうだ。絶えずわたしは、今にも何か危険が振りかゝるやうな恐ろしい氣持がしたり、そこまで災難が來てゐるとか、死が近づいてゐるとかいふことを考へて恐れたり、まだ何だか判然とせぬ病氣の徴候が、疑ひもなく、肉の中や血の中に芽ぐんでゐると覺つて憂慮したりする。

五月十八日 少しも眠れなくなつたので、醫者に診て貰つて來た。さうしたら、脈は高く、瞳は開いて、神經は張り切つてゐるが、別段驚くやうな兆候はないと言つた。わたしは灌水浴をす

ると共に、臭剝を服まねばならない。

五月二十五日 何の變化もない！ 實際わたしの調子はよつほど變だ。夕方になると、何とも譯の分らぬ不安な心持が襲つて来る。あだかも、夜がわたしに向つて何か恐ろしい威嚇を藏してでもゐるやうに。で、わたしは食事を急いで済まして、書物を読まうとするが、どうも意味が分らない。のみか、文字すら殆ど見分けることが出来ない。そこで、客間をあちらこちらと歩きまはるのだが、氣がむしやくしやして、いかんともすることの出来ない恐ろしい心持に、睡眠の恐ろしさで自分の寢床の恐ろしさに抑へつけられてゐる。

二時頃、自分の部屋へ行く。入るや否や鍵を二重にかけて栓を挿す。わたしは恐れてゐる……何を？ 今の今までわたしは何物をも恐れてゐなかつたではないか。……わたしは戸棚を明けたり寢床の下を見たりする。そして耳を澄ます……耳を澄ます……何に？ 一體奇態ぢやないか、もと／＼不完全で脆弱な働きをしてゐるわれ／＼の生きてる機械に、ちよつとした故障が起つたり、恐らく血の循環が妨げられるかしたり、幾らか中心神經が刺戟されたり、聊か充血したり、多少の擾亂を招いたりすると、忽ち極めて快活な人を憂鬱な人にし、極めて勇敢な人を臆病者にしてしまふといふのは？ そこでわたしは床に入つて、死刑の執行人を待つ人のやうな心持で眠の催すのを待つのである。眠のやつて来るのを待つてゐる間の恐ろしさと云つたら、動悸は打つ、足は顫へる、身體は夜具の温みの下でふる／＼震へてゐるが、いつか不意に眠に落ちる。ちやうど、藏んだ水の沼へ溺れ死なうとして身を投げる人のやうに。が、わたしは昔のやうに、わたし

を騙すこの不信な眠が、わたしに近づき、わたしを見張つて、わたしの頭を取つて押へ、わたしの眼を塞いで、わたしを滅さうとしてゐるとは思はない。

わたしは眠る——長い間——大抵二三時間も——すると夢を——いや——夢魔がわたしを捉へる。わたしは自分が床の中で眠つてゐるのを感じる——わたしはそれを感じ、それを知つてゐる——そして、また誰かがわたしの傍に近づいて来て、ちつとわたしを見詰め、わたしに手を觸れ、わたしの床の上のほつて来て、胸の上に膝を突き、両手の間にわたしの頸を入れてぐつとそれを絞め付ける——全力を籠めてわたしを絞め殺さうとしてそれを絞めつけるのを感じる。

わたしは跳ねのけようとする。が、われ／＼が悪夢を見る時、いつも麻痺させられるやうに恐ろしく力が無くなつてゐる。で、聲を出さうとする——が、出ない。動かうとする——が、動けない。死力を盡し、息を切らしながら、寢返つて、わたしを壓潰して息の根を止めようとしてゐる奴を投げのけようとする——が出来ない。

と、やがて不意に眼が覺める。へと／＼に弱つて汗でぐつしよりになつてゐる。蠟燭をつけて見ると、わたしは獨りきりである。

で、毎晩起るこの危急の後で、わたしはやつと眠に落ちる。そして朝まで穩かに眠る。

六月二日 容態はますます／＼悪くなつた。一體どうしたと云ふんだ？ 臭剝が何の效能もなければ濯水浴が何うといふ利き目もない。時としては、可なりもう疲れてゐるのに、更に疲れさせようとしてルマールの森へ散歩に行く。初めは、その爽かで軽い柔かな空氣が、草や木の葉の香を

孕んでみて、血管に新らしい生命を滲み込ませ、胸に健かな元氣を與へるであらうと考へてみた。わたしは廣い騎道を歩いて、それからラ・ブイエの方へ、兩側に非常に丈の高い並木が、濃い、緑の、いや殆んど黒い屋根を空とわたしとの間に葺いてある狭い路を通つて曲つて行つた。

と、不意に戦慄が身内を走つた。寒さの戦慄ではなくて苦痛の不思議な戦慄だ。

するとわたしは、森の中にただ一人であるのが、深いさびしさの爲に、わけも無く、馬鹿げて恐ろしく不安になつて、足を早めた。と不意にわたしは跟けられてあるやうに、誰かがわたしの身體にさはるばかりに近くびつたりとくつ付いて、わたしの後から歩いて来るやうに思つた。

で不意に振り向いて見た。わたしは獨りであつた。後にはただまっすぐな廣い騎道が、がらんとして、高く、恐ろしくがらんとしてゐる外には何物も見えなかつた。前の方にもまた、道は遠くで消えてなくなるまで廣がつて、同じやうに恐ろしく見えた。

わたしは眼を寒いだ。なぜか？ それからわたしは一方の踵で、ちやうど獨樂のやうに、非常に早く、くるくるとまはり出した。わたしは倒れさうになつたので目を明いて見た。と、木立はわたしの周圍に踊つてゐるし、大地は波を打つてゐた。で、餘儀なくそこに坐つてしまつた。それから、あゝ！ どこをどうして來たのか、わたしは知らなかつた！ 考へて見ても不思議である！ 不思議な、不思議なことである！ わたしはちつとも知らなかつた。道を右に取つて出掛けて行くと、最初わたしを森の中へ導いた元の並木路に戻つた。

六月三日 恐ろしい夜だつた。二三週間出掛けて來よう。旅行でもしたらきつとまた元の通り

になるだらう。

七月二日 今歸つて來た。すつかり治つたばかりか、至極楽しい旅だつた。わたしはこれまで見たことのなかつたサン・ミシエル山に行つてゐた。

誰でもわたしと同じやうに、日の暮れ方にアダランシュに着いたならば、その壯觀に撲たれるだらう！ 町は小高い丘の上に位してゐて、その町外れに公園がある。わたしはそこまで行つた時に思はず驚嘆の叫びを發した。渺々とした大きな濠が、わたしの前に目のとどく限り廣がつて、それを抱いた二つの丘のはては杳かに烟霧に蔽はれて見えなくなつてゐる。そしてこの大きな黄色な濠の眞中に、曇りのない黄金色の空を戴いて陰暗な尖つた異様な小山が砂地の眞中に高まつてゐた。ちやうど太陽が没したばかりで、餘光がまだ燃えてゐる水平線の上にその奇怪な岩の輪廓が聳えてゐて、絶頂には繪のやうな記念碑が立つてゐた。

夜の明け方にわたしはそこへ行つた。潮は前の晩と同じやうに退いてゐたので、だん／＼近づいて行くと、ふと自分の前に驚くべき大伽藍の立つてゐるのを見た。三四時間歩いてからわたしは巨大な岩山に達した。そこには小さな町がその大きな寺院の勢力の下に築いてゐた。わたしは峻しい狭い町を登つて、神の爲に建てられたこの世における最も驚くべきゴシック風の殿堂の中にはひつた。その大きさは一つの町くらゐもあつて、澤山の低い部屋が丸天井の屋根の下に埋められたやうになつてゐたり、澤山の高い廊下が花車な柱に支へられてゐたりした。わたしはこの巨大な花園の寶殿にはひつた。見かけは一片のレエスくらゐの軽さであつて、塔や、螺旋形の梯

子段でのぼつて行くほつそりとした鐘樓などで蔽はれてゐる。それらはみんな獅頭羊身龍尾の怪物や、鬼や、幻怪な動物や、異形な花などを着けた不思議な頭を高く上げて、晝は青々とした空に、夜は眞暗な空に、精巧に刻まれたアアチで結び付けられてゐる。

絶頂に達した時にわたしは附いて来た坊さんに云つた。

「かういふところにお住ひになつて、どんなにかあなたは結構ですわねえ！」

すると彼は答へた。

「風が強くてましてねえ。」

と、それからわたし達は満ちて来る潮が、砂地の上にどつとあけては鋼の胸甲でそれを蔽うて行くのを眺めながら話し始めた。

坊さんはわたしにいろ／＼の話をした。その土地の古い物語や、荒唐無稽な昔噺や。

その中の一つが烈しくわたしの心を撲つた。この人々は、この小山に住んでゐる人々は、夜、砂地を歩いて行く話と、また二匹の山羊が、一匹は強い聲で、一匹は弱い聲で咩くのを聞くと言つてゐる。信じない者は、それは海鳥の啼き聲が、時には山羊の咩くのに似たり、時には人間の哀しむ聲に聞えたりするのに過ぎぬと言つてゐるが、歸りが後れて夜になつた漁師達は、彼等が曾て見たこともない外套を頭から被つた年寄の羊飼が、潮の差し引きする間に、世界を遠く離れたこの小さな町を圍つてゐる砂地をさまようて行くのに出會つたと誓を立て、言つてゐる。その羊飼が先きに立つて歩いて行く後から、男の顔をした牝山羊と、女の顔をした牝山羊と、二

匹とも長い毛の眞白なのが、絶えずしゃべりながら、變な言葉で諍ひながら、かと思ふと不意にしゃべるのを止めて、精一ぱいに咩きながら附いて行く。

「あなたはそれを信じますか？」と、わたしは坊さんに訊いた。

「さあ、分りませんな。」と、坊さんは答へたので、わたしは言葉を續けた。

「もし此世界に、われ／＼以外に何者かがあるとしたら、どうしてこんなに長い間われ／＼がそれを知らずにゐたんでせう？ あなたが御覽にならなかつたのは何故でせう？ わたしが見なかつたのは何うしてでせう？」

彼は答へた。

「しかし、われ／＼は存在してゐるものゝ十萬分の一も見てゐるでせうか？ 御覽なさい。そこに、今、自然界で一番力の強い風が吹いてゐます。それは、人を倒したり、建物を覆したり、樹木を根こぎにもすれば、海原を擧げて水の山ともします。絶壁を崩したり、大きな船舶を暗礁に打ちあげもします。殺しもしれば嘯きもする。嘆きもすれば吼えもする。しかし、あなたはそれを御覽になつたことがありますか？ 御覽になることが出来ますか？ けれども風はやつぱり存在してゐますよ。」

わたしはこの單純な推論の前に黙してゐた。あの男は哲學者か、でなければ、恐らくは馬鹿であつたのだ。わたしは彼の言葉を承認することは出来なかつたが、口を噤んでゐた。彼の言つたことは、しば／＼わたしの思想の中にも往來したことだつた。

七月三日 よく眠れなかつた。きつと、ここには何か熱を起さす力があるんだ。馭者もわたしと全く同じ容態で苦しんでゐる。きのふ歸つて来た時、妙に蒼ざめてゐるのが目についたから訊いて見た。

「ジャン、お前はどうしたんだ？」

「どうもちつとも體むことが出来ませんで、晝も夜もめちやくちやになつてしまひました。旦那様がお立ちになつてからといふもの、わたしは魔法を掛けられたのでございます。」

尤も、他の召使共はみんな無事であるが、わたしは自分がまた糶りはしなからうかと思ふと、ひどく恐ろしい。

七月四日 確かにまた糶つたのだ。以前の夢魔がまた歸つて来た。ゆうべ、わたしは、誰かがわたしの上へ凭れかゝつて、その口をわたしの口の上において、唇の間から生命を吸ひ取つてゐたやうな気がした。さうだ、蛭がいつもするやうな鹽梅に、わたしの喉からそれを吸ひ取つてゐた。やがて飽くほど吸つて彼は起き上つた。で、わたしは目覺めたが、さんざん疲れて、壓潰されて、力も何もなくなつて動くことも出来なかつた。もしこんなことが三四日も續かうものなら、是非また出掛けねばならぬだらう。

七月五日 おれは理性を失つたのかな？ 昨夜起つたことは、今考へてさへ頭がふら／＼するほど變妙だぞ！

毎日夕方になるとするやうに、わたしは戸に錠を下した。ところで喉が渴いてゐたから、水をコップに半分ほど飲んだ。そして偶然壇に目を遣つて、まだ其日の栓の所まで水の入つてゐるのを見た。

そこで床に就いて、例の恐ろしい眠に入つたが、二時間ばかりも經つと更に一層恐ろしい目に遭つて目が覺めた。

想像して見給へ。ぐつすと眠つてゐる人が今殺されつゝあるのだ。目が覺めて見ると、胸にはナイフが突き通され、喉では斷末魔の聲がごろ／＼鳴つてゐる。全身血に染つてもう呼吸は出来ず、將に死なうとしてゐるのだが、何の事やら譯はちつとも分らない——さういふ様を。

やつと、正氣に復つて見ると、喉がまた渴いてゐたので、蠟燭に火をつけて、壇を載せて置いたテニブルのはりへ行つた。それを持ち上げてコップへ注いだ。が、何も出て来なかつた。壇は空だつた！ まるきり空だつた！ 最初わたしは全くその譯が分らなかつたが、ふと恐ろしい感情に捉はれて、思はずそこに坐らざるを得なかつた！ いや寧ろ椅子の中に倒れざるを得なかつた！ やがてわたしは跳ね返るやうに立ち上つて身邊を見まはした。と、驚きと恐れとに壓迫されて、透き通るガラス壇の前にまた坐つた！ わたしはちつと目を壇に据ゑてその謎を解かうとした！ わたしの手は顫へた！ では誰かが水を飲んだのか？ が誰か？ おれか？ 疑ふまでもなくおれか？ おれでなくて誰だ！ 果してさうだとすればおれは夢遊病に罹つてゐたんだ！ 何も知らずに、奇怪な三重の生活を営んでゐたんだ。すると茲に疑問が起る。それは、われわれの身體の中に二個の生物が宿つてゐるのであるかどうか——それとも、不思議な、知ること

出来ず、目にも見えない生物が、時折、われ／＼の精神が麻痺してゐる時、われ／＼の囚はれた肉體に生氣を與へて、われ／＼自身のやうに、われ／＼自身以上にそれを動かすのであるかどうかと云ふことだ。

おゝ！ 誰がこの恐ろしい苦悶を理解することが出来よう？ 誰が、精神の健全な、目の十分に覺め切つた、氣の確かな男が眠つてゐた間に邊の水がガラスを通して消え去つたのを恐怖の目に見入つてゐる心持を理解することが出来ようぞ！ わたしはまた床に入るのが恐ろしくて、夜が明け放れてしまふまでおツとしてゐた。

七月六日 わたしは氣が狂ひさうだ。昨夜、また邊の中の水が、すっかり飲まれてしまつた！ いや、わたしがそれを飲んでしまつた！

しかし、果して自分だらうか！ 果して自分だらうか？ でなくて誰だ？ 誰だ？ おゝ！ 神よ！ わたしは氣が狂つたのか？ 誰か助けてくれるものはないか？

七月十日 今まで不思議な實驗をやつて見た。

おれは確かに氣が違つてゐる！ しかし！

六日の晩、床に入る前に、わたしは葡萄酒と、牛乳と、水と、パンと、そして苺とをテエブルの上に置いた。その水をみんなと牛乳を少し、誰かが飲んだ——わたしは飲んだ——が、葡萄酒にも、パンにも、苺にも手は着けてなかつた。

七日の晩、わたしは同じ實驗を繰返して同じ結果を得た。

八日の晩は水と牛乳とを抜きにしたら、何にも手は着けてなかつた。

最後に九日の晩は、水と牛乳だけをテエブルの上に置いて、特に邊は白モスリンで包み、栓は固く結むすへた。そして唇や、鬚や、両手やには鉛筆をこすりつけておいて床に入つた。

深い眠りに落ちたと思ふと、忽ちまた恐ろしい目に遭つて目が覺めた。わたしは少しも動きはしなかつたし、敷布にも汚れがついてゐなかつた。で急いでテエブルの傍へ行つた。見ると、邊を包んだモスリンはそつくりそのまゝであつたので、わたしは恐怖で顫へながら糸を解いた。水は残らず飲まれてゐた！ 牛乳もやはりさうだつた！ あゝ！ 大いなる神よ！

わたしは早速パリに向つて出發しよう。

七月十二日 パリ。わたしは屹度この二三日の間、氣が顛倒してゐたに違ひない！ 屹度衰弱した想像の玩弄物となつてゐたに違ひない！ でなければ、實際夢遊病に罹つてゐるのか、もしくは、存在してゐることは知られてゐても、これまで説明されなかつた力——例へば催眠の暗示——といふやうなものに支配されてゐたのだ。とにかく、わたしの精神状態は狂氣に近かつたのだが、パリで過した二十四時間はわたしを正氣に復さしめるに十分であつた。

昨日は歩きまはつたり、二三の人を訪ねたりして、新しい生き生きした空氣を心の中に吸ひ込んでから、フランセイ座で一夜を送つた。演ぜられたのは小ヂユマの作で、その光彩に富んだ力ある劇を見たら、すっかり氣分がなほつてしまつた。確かに孤獨は活動する智能に取つては危険である。われわれは考へたり話したりすることの出来る人々を自己の周圍に要するのだ。長い

間ただ一人であると、妄想がその虚に乗じて来る。

わたしはせい／＼した氣持で大通りをホテルに歸つて来た。群集の押し合ふ間を通りながら、前週末の恐怖や疑念やを考へると、自分で自分を冷笑せずにはゐられなかつた。なぜかと云ふに、わたしは信じたからだ、いやさ、目に見えぬ生物がわたしの家の屋根の下に住んでゐると信じたからだ。いかにわれわれの理智は弱いか。ちよつと合點の行かぬ事實に出會ふと、忽ち恐れたり平衡を失つたりしてしまふ。

「譯が分らぬのは原因を見出だすことが出来ないからだ」と云つて問題を棄て、置けばいゝのに、何かと云ふとちきに恐ろしい神祕や超自然力やを想像する。

七月十四日 共和祭。わたしは町を歩きまはつた。すると爆竹や旗などがわたしを子供のやうに喜ばした。けれども、政府の命令で定められた日を喜ぶといふのは頗る愚なことである。一體人民と云ふ奴は、愚かな羊の群のやうに、或時はちツと辛抱してゐるかと思へば、或時は兇猛な謀叛をする。「樂め」と云へば樂む。「進んで隣人と戦へ」と云へば進んで戦ふ。「皇帝に投票せよ」と云へば皇帝に投票するし、更に「共和政に投票せよ」と云へば共和政に投票する。

それを指揮する奴がまた愚物である。尤も、彼等は人間に従ふ代りに主義に従つてゐるのであるが、それがまた馬鹿々々しい、無益な、誤つたものに過ぎない。しかもそれに従ふのは、それらが主義である、言ひかへれば、この世における確實で不易な思想であるといふだけのことなのだ、しかし、一體この世の中には、一つも確實なものなどは無いのである。光も幻影であれば

昔も欺騙である。

七月十六日 わたしは昨日、まつたく譯のわからない事を見た。

わたしは従妹のサブレエ夫人の家で食事をしてゐた。従妹の夫はリモージュにある第七十六獵兵隊の大佐である。その席に二人の若い婦人がゐたが、その一人が結婚してゐたのはドクトル・パランといふ醫者であつて、彼は神経病と、催眠術及び暗示の實驗が目下示しつゝある異常な現象との研究に、一身を委ねてゐるといふことだつた。

彼は可なり詳しく、イギリスの科學者や、ナンシイに在る醫學校の醫者達に依つて得られたといふ幾多の結果を語つた。

彼の擧げた事實は如何にも不思議に思はれたので、わたしは全然信ずることが出来ぬと言つた。「われ／＼は今」と彼は云つた。「自然界の最も重大な秘密の一つを發見しようとしてゐる。

と言ふわたしの意味は、この地球上での最も重大な秘密の一つといふことで、かの星の世界において、勿論また、別な種類の重大な秘密がありませう。人間は考へるやうになつて以來、又その考へを話したり書いたりすることが出来るやうになつて以來、常に、その粗雑な不完全な官能では、到底到り識ることの出来ない神祕に近づいてゐることを自分で感じてゐまして、そしてその器官の無力なのをば知識の働きで補はうと力めてゐます。で、その知識がまだ初歩の程度に止まつてゐた間は、この目に見えない精靈との交通は、恐ろしいものでありながらも、要するに平凡な形を取つてゐました。超自然に對する俗衆の信仰にしろ、生靈や、妖精や、地神や、幽霊な

どの傳説にしろ、みんなそこから起つて来たのです。神話さへもわたしはそこから起つて来たものだと言ひたい。なぜかといふに、われ／＼の抱いてゐる造物主の觀念は、それが如何なる宗教から来たものにして、確かに極めて平凡な、極めて愚劣な、到底頷くことの出来ないやうな作りものであつて、等しくみんなかつて恐ろしがつた人間の頭から生れて来たものであるからです。凡そ何物と雖、かのヴァルテエルが、「若し神が彼自身の姿に象つて人間を造つたとすれば、人間は確かにまた神を造り返したのだ」と言つた言葉より眞實なものはありません。

『ところが、この百年ばかり前から、人々は新しい或物の豫覺を得たやうに思はれるのです。五年来、われわれは實に驚くべき結果に到達しました。』

従妹もまた全く信じなかつたので、笑つた。すると、ドクトル・バランは言つた。

『ではあなたを眠らして御覽に入れませうか？』

『ええ、どうぞ。』

従妹が安樂椅子に坐ると、ドクトルはちつと彼女を見詰め始めて、さながら魅さうとでもするかのやうであつた。と、わたしは不意に多少の不安を感じた。心臓は早く打つて、喉は塞がるやうな氣持がした。サブレエ夫人の目は次第に重たくなり、口は引きつり、胸は高まつて來るのが見えた。

十分立つと眠つてしまつた。

『あの人のうしろへお出でなさい。』と、醫者はわたしに言つた。で、わたしは従妹のうしろに席を移した。醫者は一枚の名刺を従妹の手に持たして、そして言つた。

『これは鏡ですよ。何がその中にお見えになりますか？』

『従兄が見えます。』と彼女は答へた。

『何をしてお出でになりますか？』

『鏡をひねつて居ります。』

『今は？』

『ポケットから寫眞を出して居ります。』

『どなたの寫眞ですか？』

『自分の。』

全くその通りであつた。寫眞といふのは、その日の夕方、旅館でわたしの受取つたものである。『どういふ姿に寫つてゐますか？』

『手に帽子を持つて立つて居ります。』

従妹はこれらの事柄をその名刺の中に、一片の白い厚紙の中に、あたかも鏡の中に寫つてゐるものゝごとくに見たのであつた。

若い婦人達は恐ろしくなつて聲を上げた。

『もう澤山ですよ！ もう、もう澤山！』

しかし醫者は命令した。

「あなたは明朝八時にお起きなさい。そして従兄さんを旅館に訪ねて五千フランのお金を貸してお貰ひなさい。それはあなたの旦那様があなたに請求されたもので、今度の旅に上る時にくれいと仰有るでせう。」

さうしておいて醫者は彼女を覺ました。

わたしは旅館に歸る途すがら、この不思議な實驗をいろ／＼と考へて、果ては疑をさへ抱いた。尤も従妹のことは子供の時から自分の妹のやうによく知つてゐたから、勿論一點の疑すら抉むべき餘地はなかつたが、しかし醫者のはうには何かのごまかしがあつたかも知れない。ひよつとすると、彼は手に鏡を隠してゐて、名刺と一しよにそれを眠つてゐる若い婦人に見せたのではなかつたらうか？ 専門の魔術師はこれとはちがつた法で不思議なことをやる。

かうして、わたしは歸つて床に就いた。

そして今朝八時半頃、給仕に起された。彼は言つた。

「旦那様、サブレエ夫人が直にお目に懸りたいとのことでございます。」

で、わたしは急いで着物を着換へて従妹に會つた。

従妹は氣が落ちつかぬと云つた風で、目を床に落して坐つてゐたが、ヴェエルも取らずに言つた。

「わたくし、あなたに大変なお願があつて參つたのでございますよ。」

「何だね？」

「お話ししたくはないんですけど、でも何うしても、しなければなりませんの。わたくし、是非共五千フランのお金がなければなりませんの。」

「へえ、君が？」

「ええ、わたくし、と申すよりは宅が、是非入用だからと言つて參つたのですの。」

わたしは呆氣に取られて頓には言葉が出なかつた。従妹がドクトル・パランと言ひ合せて、わたしを本當に遊んでゐるのではなからうか、前から仕組んであつた狂言を巧みに演じてゐるのではなからうか、とわたしは胸の中で自問した。

が、氣を付けておつと彼女を見詰めた時に、わたしの疑は消えた。従妹は悲しさに身體の震へるほどにこの事をつらく思つてゐたので、喉では確かに咽び泣きをしてゐた。

わたしは従妹の頗る有福なのを知つてゐたから、かう言つた。

「へえ！ 君の旦那さんは五千フランのお金が自分の自由にならんのかい？ まあ、考へて御覽。確かにわたしに借りるやうにツて言つて寄越したのかい？」

従妹は暫くの間ためらつて、記憶を辿つて見ようと力めるやうであつたが、やがてかう答へた。

「ええ——ええ、それはもう確かなんですの。」

「手紙で言つて來たのかい？」

従妹はまたためらつて考へ込んだ。で、わたしには考へ出さうと苦しみ抜いてゐる事が分つた。彼女は何事も知つてゐなかつた。ただ五千フランの金を夫の爲にわたしから借りねばならぬとい

ふことだけを知つてゐた。で、彼女は嘘を吐いた。

『え、手紙で言つて來ましたの。』

『いつ？ きのふはちつともそんな話が無かつたぢやないか。』

『けさ夢つたんですの。』

『それを見せて呉れないか？』

『いゝえ。いえ……いえ……それには内輪の事が、……他の人には見せられないやうな事が、いろ／＼書いてありましたの。ですからもう焼いてしまひましたわ。』

『ちやア借金でもしたんだね？』

従妹はまたためらつたが、やがて口の中で言つた。

『わたくし、存じませんの。』

そこでわたしは構はずに言つた。

『今、さあと云つて、わたしは五千フランなんて持つてゐないよ。』

彼女は苦しげな泣き聲を立てた。

『本當に！ 本當に！ お願ひですから、どうか御都合なすつて下さいまし。』

従妹は興奮して、わたしに祈りでもしようとするものゝやうに兩手を堅く握り合せた！ わたしはその聲の調子の變つたのを聞いた。従妹は自分の受けたどうともすることの出来ない命令に惱まされたり支配されたりして、咽びつ泣きつした。

『本當に！ 本當に！ お願ひですから——わたしがどんなに困つてゐますか、お察し下さつて——是非けふ要るんですから。』

わたしは可哀相になつた。

『ちやア後程までにどうとか都合して見よう。きつと間違ひなく。』

『あゝ！ 難有う！ 難有う！ それで助かりますわ。』

わたしは言葉を續けた。『君は、ゆうべ、君の家であつたことを覚えてゐるかい？』

『えゝ。』

『ドクトル・バランが君を眠らしたことを覚えてゐるかい？』

『えゝ。』

『ほウ！ それやアいゝ鹽梅だ。その時ドクトルがね、君に今朝わたしを訪ねて、五千フランのお金を借りろと命じたんだよ。君は今その暗示に従つてゐるんだぜ。』

従妹は暫くの間考へてゐたが、やがて答へた。

『だつて、お金の要るのは宅なんですもの——』

まる一時間、わたしは従妹に信じさせようといろ／＼に話して見たが、遂にむだだつた。で、従妹が歸つて行くと、わたしは醫者の家へ行つた。彼はちやうど出掛けようとしてゐるところだつた。で、微笑を含みながらわたしの言ふことに耳を澄ましてゐたが、しまひに、かう言つた。

『まだあなたは信じませんか？』

『いや、信じざるを得なくなりました。』

『ではお供しませう、従妹さんのお家へ。』

従妹はすっかり疲れ果てた身體を、すでに寝椅子に寄せて休めてゐた。醫者は彼女の脈搏を數へながら、その目の前に片手を上げたまゝで、暫くの間ちつと彼女を見詰めてゐた。と彼女は、この如何ともすることの出来ぬ磁力の下にだん／＼とその目を閉ちてしまつた。従妹が全く眠つた時に醫者は云つた。

『あなたの旦那様はもう五千フランのお金が必要なくなりました！ だからあなたはそのお金を貸してくれるやうに従兄さんに頼んだことを忘れなければなりません。で、もし従兄さんがその事をお話しになつても、あなたにはそれが分らんでせう。』

そこで醫者は彼女の目を覺ました。で、わたしは紙入を出して云つた。

『けさ君の頼んだものを持つて来たよ。』

ところが従妹の驚きは非常なもので、わたしは固持することさへ出来ないくらゐであつた。けれども、とにかく、わたしはその事情を思ひ起させようとして見たが、彼女は烈しくそれを打消して、わたしが彼女を遊んででもゐるものゝやうに思つたので、しまひには随分けしきばんで来た。

さて！ わたしは今歸つて来たんだ。食事をする氣にもなれなかつたのは、この實驗がわたしの心を全くひつくり返してしまつたからだ。

七月十九日 多くの人にわたしはこの事を話したが、みんなわたしを嘲笑つた。わたしはもう何を考へていゝか分らない。利口な人は言ふ。どうかなあ？

七月二十一日 ブウジヴァルで食事をしてから、漕手の舞踏會で一夜を暮した。確かにあらゆる事物は場所と周圍とに依るものである。蛙島で超自然を信ずるのは愚の骨頂であらう。しかし、サン・ミシヤル山の絶頂か、もしくは印度に於いてだと、われ／＼は周圍の威力に壓迫されて恐ろしくなる。來週は家へ歸らう。

七月三十日 きのふ家に歸つて来た。萬事都合よく運んでゐる。

八月二日 何も變つたことはない。好い天氣である。わたしは毎日セイヌ河の洋々と流れて行くのを眺めて暮してゐる。

八月四日 召使共の間に喧嘩が始まつた。ヨツプが、夜、戸棚でこはれるとみんなが言つてゐる。下男は料理女に罪をきせる。料理女はお針に罪をきせる。お針は他の二人に罪をきせる。果して誰が罪人か？ 教へることの出来るのは利口な奴だ。

八月六日 今度は氣が違つてゐやしない。確かに見た——見た——見たぞ！——もう疑ふことは出来ない——確かにそれを見たんだぞ！ わたしは爪の中まで寒氣がした。骨の髄まで恐ろしくなつた——見たんだ！

二時、日の照つてゐる最中に、わたしは薔薇の木の園の中を——咲きかけてゐる秋薔薇の小徑を歩いてゐた。

で、わたしが立ち止つて、立派な三輪の花を着けた「戦場の勇士」といふのを見ようとしたり、わたしは、すぐそばでその薔薇の一本の莖が、まるで目に見えぬ手がそれを曲げでもしたやうにわたしの方へ曲つて、やがて、その手がむしりでもしたやうに折れたのを見つけた！ すると花は、手が口の方へそれを持って行くやうな工合に曲線を描きながら獨りでに擧つて、暫くの間、ちつと、澄み切つた空氣の中に恐ろしい赤い點がぼつりと一つ、動きもせず、わたしの目から三歩の先きにぶらさがつた。

夢中になつて、わたしはそれを取らうと躍りかゝつた！ と、何物も見えなかつた。それは消え失せてゐた。すると、自分に對する兇猛な憤怒が胸を刺して起つた。なぜかと云ふと、こんな幻想を持つことは、道理の分つた人には健全と云へないからである。

しかし、果してそれは幻想だつたか？ わたしはその莖を見ようと振り向いて、すぐにそれを、元のまゝに枝の上に残つてゐる他の二輪の薔薇の間に、今折られたばかりのまゝで灌木の上にあるのを見た。

そこで、わたしは少からず混亂した心を抱いて家に歸つた。なぜかと云ふに、今こそわたしは、晝と夜とが順番に来ることの確實なやうに、わたしのそばに目に見えぬ何者が存在してゐることを確實にしたからである。それは牛乳や水を飲んで生きてゐて、物體に觸れたり、それを取つ

たり、その位置を變へたりすることが出来るのだから、よしんば感覺には觸れぬにせよ、形のあつたもので、わたしと同じやうにこの屋根の下に住んでゐるのだ——

八月七日 安眠した。きやつは邊の水をすつかり飲み干したが、わたしの睡眠を妨げはしなかつた。

わたしは氣が狂つてゐるのではないか知ら。今も日に照らされながら河ばたを歩いてゐると、自分の理性に就いての疑が起つた。これまで起つたやうな疑ではなくて、精密な完全な疑であつた。わたしは氣の狂つた人を見たこともあれば、又、一點を除くの外は、人生のいかなる事に當つてもよく譯が分つて、氣が確かで、聰明でさへもあつたそれらの人を知つてもゐた。彼等は何事についても明晰に、容易に、深遠に語る事が出来たが、ふと、その思想が、幻想といふ暗礁にふれると、微塵に粉碎せられ、所謂「狂氣」と呼ばれる暴れ狂ふ波と濃霧と風雨との充たされた、恐ろしい狂ひ立つた大海に撒き散らされ、覆没させられてしまふ。

わたしは、自分で自分の容體を知つてゐると意識してゐないならば、又、この上もなく完全な正氣でそれを測りそれを分析することが出来ないならば、確かにわたしは氣が狂つて、全く氣が狂つてゐると考へねばならないだらう。實際わたしは、正氣でありながら、幻想の下に働いてゐるのであらう。屹度まだ世に知られない錯亂が、今日の生理學者が精密に研究し定義しようとしてゐる錯亂の一つが、わたしの頭腦の中を起つて、わたしの精神や、わたしの觀念の秩序及び論理などの中に、奥深い淵を作つたに違ひない。これと同じ現象がしばしば夢の中を起つて、そし

て到底有るまじと思はれる幻の境を通して、何等の驚きをも起さずにわれ／＼を導いて行くのは何故かと云ふに、われ／＼の確かめる装置と統一の官能とが眠つてゐる時、想像の能力が眼覺めて働いてゐるからである。それとも大脳の鍵盤の目に見えぬ鍵の一つが、わたしの身體で麻痺してゐたといふやうなことがあるのであらうか？ 或人々はふとした出来事の爲に、物の名や、動詞や、數や、或ひは日附をすら忘れてしまふことがある。思想のあらゆる通路の位置は、目下完成してゐたとしたところで、或幻想の非實在を統一する能力が、今麻痺してゐるのであらうといふ事實に就いて、何の驚くことがそこにあるのであらうか？

わたしは河の端を歩きながらすべてそれらのことを考へた。太陽は河の上にきら／＼と輝いて、地上を楽しくしてゐたが、同時にまたわたしの心を充たすに、人生に對する愛や、その飛び方の輕快なのがいづもわたしの目に喜ばしく感ぜられる燕に對する愛や、その風に戦くさら／＼と云ふ音がわたしの耳に快い岸邊の草木に對する愛やを以てした。

ところが、何とも解釋の出来ない不快な感情が次第にわたしを捉へた。わたしにはそれが、或まだ人に知られない力があつてわたしを麻痺させ、引き留め、先きへ行くのを妨げて呼び返してゐるものゝやうに思はれた。わたしはちやうど可愛い病人を家に置いて來た時に、そしてその病人の容體が一層悪いといふことを蟲の知らせで知る時に、心を抑へつけるやうな、歸らうといふ痛ましい心持を感じたのであつた。

で、わたしは自分では歸りたくなかつたが、何か悪い報知が、手紙か電報かがわたしを待受け

てゐるであらうと確かに感じながら歸つて來た。ところが何事もなかつたので、わたしはいつもの奇怪な幻想を見たよりは更に一層驚かされて、不安になつた。

八月八日 ゆうべは恐ろしい晩だつた。きやつはもう出て來はしないけれど、わたしはきやつが始終わたしの傍にゐて、わたしを見張り、わたしに目をつけ、わたしの心を讀んで、わたしを支配してゐるやうに感じられるので、かやうにきやつが自身で身を隠してゐる時の方が、超自然の現象で、間斷なく目に見えぬ存在を示してゐた時よりは一層恐ろしい氣がされる。

けれども、わたしは眠つた。

八月九日 無事。だが、わたしは恐ろしい。

八月十日 無事。だが、あしたは何が起るだらうか？

八月十一日 やはり無事。わたしは身に差迫つてゐるこの恐怖と、心にこれらの考へを抱いて家に留まつてゐることは出來ない。どこかへ出掛けよう。

八月十二日 夜十時。けふは一日出掛けようとしてゐて出掛けられなかつた。わたしはこの單純で容易な自由の行動——外出すること、——馬車に乗つてルアンまで——と飛ばしすること、——それを實行したかつたのだが、出來なかつた。なぜだ？

八月十三日 人が病氣に罹ると、肉體のばねはこはれ、氣力は失せ、筋はゆるみ、骨は肉のやうに柔らかとなり、肉は水のやうに流れるらしい。わたしはこれと同じことを、不思議な、苦しい状態で、精神の上に経験してゐるのである。今はもう力も、勇氣も、自制の心も、乃至は自分

の意志を自分で動かす力すらなくなつた。何事かをしようとする力は全く失はれて、ただ何者が動かすまゝにわたしは従つてゐるのである。

八月十四日 おれはもうだめだ！ 誰かがおれの魂に憑いてそれを支配してゐる！ 誰かがおれのすべての行爲、すべての舉動、すべての思想を命令してゐる。おれはもう自分の主人ではなくて、ただ自分のする事を、奴隷のやうに戦々兢兢として傍觀してゐるに過ぎない。おれは出掛けたいんだが、だめだ。きやつが出掛けることを好まないのだから、おれはちつときやつがおれを坐らして置く臂掛椅子に、ふるへながら氣も錯亂して留まつてゐるのだ。おれはただ、おれがやつぱり自分の主人であると思ひたいばかりに、自分で立つて身を起さうとして見るが、だめだ！ おれは目釘で椅子に留められてゐるので、椅子はまた床に、おれがどんな力を出してもびくともしないやうな工合に固着してゐる。

ところが不意に、おれはどうでも、どうでも庭の端へ行つて、苺を摘んで食はねばならなくなつた——で、おれはそこへ行つた。そして苺を摘んで食つた！ おゝ！ 神よ！ 神よ！ 果して神はましますか？ ましまさばわたくしを助けて下さい！ わたくしを救つて下さい！ わたくしを護つて下さい！ 許して下さい！ 憐んで下さい！ 恵んで下さい！ わたくしを救つて下さい！ おゝ！ 何といふ苦痛！ 何といふ苛責！ 何といふ恐怖！

八月十五日 確かにこれが、先達て従妹が五千フランの金をわたしの所へ借りに来た時に捉はれて支配されてゐた状態だ。従妹は、その身の中に、もう一つの魂、寄生して主となつた魂のや

うに入り込んで来た奇怪な意志の力に支配されてゐたんだ。世界が終りに近づいて来たのではないか？

しかし、誰だ、きやつは？ この目に見えずにわたしを支配してゐる奴は、この知ることの出来ない奴は、この超自然界の漂泊者は？

果して、目に見えぬ者が存在してゐる！ それなら、どうして世界の開闢以來、今おれの身に現はれてゐるやうな方法で、彼はその身を現はさなかつたのか？ おれは今自分の家で起つてゐるやうな事柄を、かつて讀んだことがなかつた。おゝ！ 若しわたしが家を去れさへしたならば、出掛けて逃げられさへしたならば、そして再び歸らないでさへ濟むならば、わたしはきつと助かるのだが、だめだ。

八月十六日 わたしはけふ二時間の間、ちやうど牢獄の戸が偶然に明くのを見つける囚人のやうに、逃げ出さうとしてゐた。と不意にわたしは自由になつて、きやつは遠くへ行つたやうな氣がしたので、出来るだけ早く馬を着けさせて、ルアンまで駆けさせた。おゝ！ 駈者に向つて、
「ルアンまでやれ！」と云ふことの出来たのがどんなに嬉しかつたらう！

圖書館の前で手綱を控へさせて、わたしは掛の者に、ヘルマン・ヘレスタウス博士の古今の未知の住民に關する著書を貸してくれるやうにと求めた。

そこで、わたしは馬車に乗りながら、「停車場へ！」と言はうとしたところが、その言葉の代りにわたしは叫んだ——言つたのではなくて、叫んだのだ——あたりの通行人がみんな振返つたほ

どに大きな聲で、「うちへ！」と、わたしは恐ろしさの餘り、思はず馬車の座蒲團の上に尻餅をついた。きやつがおれを見付け出してまた捉まへてしまつたのだ。

八月十七日 おゝ！ 何といふ晩だらう！ 何といふ晩だらう！ けれどもまた喜ばねばならぬやうにも思はれる。わたしは朝の一時まで讀んだ！ 哲學及び神譜學の博士ヘレスタウスは、人間の周圍をうろついたり、或ひは人間が夢に見たりする、それらすべての目に見えぬ生物の歴史と顯現とを書いてゐる。彼は彼等の起原、彼等の領域、彼等の勢力等を述べてゐるが、しかし、その一つだもわたしに憑いてゐる奴に似てはゐない。一體人間は、彼が思想を持つて以來、この世界に於ける人類の繼承者として、自分よりは力の強い、新しい生物が出現するといふ前兆を得て恐怖の心を抱いてゐるので、その近づくの感じて、目に見られぬものゝ本體を豫言することが出来ようないから、恐怖の餘り、漠然とした妖怪や、隠れた生物の全種族を、その恐怖の心から生み出したのであらう。

で、朝の一時まで讀書してから、わたしは明け放した窓の傍へ坐つて、額と思想とを靜かな夜の空気に冷さうとした。

至極愉快で温かな夜だつた！ どんなにわたしは以前にかういふ夜を楽しんだであらう！

月は無かつた。澤山の星がきら／＼とその光を暗い空に投げてゐた。誰があゝの星の世界に住んでゐるだらうか？ どんな形のものが、どんな生物が、どんな動物があすこにゐるだらうか？

あゝの遠い世界の思想家である者達は、われ／＼よりも以上のことを知つてゐるだらうか？ 何か

われ／＼よりも以上のことを爲し得るだらうか？ 何かわれ／＼が見ないものを見るだらうか？ 彼等のどれかが、いつか虚空を渡つて、ちやうど、昔、ノルマン人が自分等よりも弱い國民を征服しようとして来たやうに、この地球を征服しに現はれて來はしないだらうか？

われ／＼は實に弱く、無力で、無智で、小さいものである——一滴の水中に融けて回轉してゐるこの微塵のやうな泥の上に住んでゐるわれ／＼は。

冷たい夜の空氣の中でこんなことを夢想しながら、わたしは眼に落ちた。

そして四五十分間ばかりも眠つた時に、ふと、何とも名狀することの出来ない混亂した不思議な感覺の爲に覺まされて、身動きもせず目を開いた。最初は何物も目に着かなかつたが、やがて、ふと机の上に開いたまゝで置いた書物のページが、獨りではぐれて行つたやうに思はれた。勿論そよとの風も窓からは吹き込まなかつたので、わたしはきよツとして目を据ゑてゐた。と四分間ばかりも経つと、わたしは見た、見た——確かに自分のこの眼でしかと見た——次のページがまた獨りでにあがつて、まるで指がそれをはぐつたやうな工合に別のページの上に落ちたのを。わたしの臂掛椅子はからだつた。いや、からに見えたが、しかし、わたしはそこにきやつが、きやつがゐる、わたしの席に坐つて讀書してゐるのを知つた。で、猛烈に躍りかゝつて、怒つた猛獸が鬣を引裂かるとする時のやうに躍りかゝつてきやつを取つて押へ、首を絞めて殺してくれようと部屋を横切つた！ とろろが、わたしがまだそこに達せぬ前に、わたしの椅子は誰かが逃げ出しでもしたやうに引繰り返つた。テェブルは揺れ、ランプは落ちて消えてしまひ、窓には

たと縮つた。ちやうど泥棒が両手にぐつと扉を握つて闇の中へ逃げ出した時のやうに。

かくしてきやつは逃げ失せた。怖かつたんだ！ きやつ、おれが怖かつたんだ！

すれば明日か明後日は——いつかきやつを取つて押へて、大地に壓潰してくれることが出来るだらう！ 犬でさへ場合に依ると主人を噛んで殺すことがあるではないか？

八月十八日 まる一日考へてみた。おゝ！ さうだ、おれはきやつに服従しよう。きやつの衝動に従ひ、きやつのすべての望を満たし、身を卑くして、卑怯者となつてしまはう。きやつは強者である。が、いつかはきやつの弱る時も来るだらう。

八月十九日 分つた、分つた、すつかり分つた！ わたしは今『科學界評論』で次の記事を讀んだ。

『珍らしい報告がリオ・デ・ジャネイロから来た。狂氣——中世紀の頃、ヨーロッパ人を襲うた傳染性の狂氣に比せらるべき狂氣の傳染病が、目下サン・ポオロ州に猖獗を極めてゐる。で、住民はこれを恐れて、家を去り、村を棄て、土地を放棄して逃げ惑ひながら、自分らはまるで人の形した家畜のやうに、自分らの眠つてゐる間に生命を食ひ、また水と牛乳とを飲んで、他の滋養物には手だに觸れないらしい一種の吸血鬼の爲に、觸れはするが目には見えない生物の爲に、追ひやられ、取り憑かれ、自由にされてゐるのだと口走るといふ。

『で、教授ドン・ベドロ・アンリイケは數名の醫學者を率ゐて、現場でこの驚くべき狂氣の原因及び病態を研究し、且つその狂氣せる人民を正氣に復さしめるに最も適當であると思はれる方

法を皇帝に奏すべき爲にサン・ポオロ州に出張した。

さうだ！ さうだ！ 今こそ思ひ出す、去る五月八日、三本マストの美しいブラジルの船が、セイメ河を廻りつゝあつた時に、わたしの窓の前を通つたことを！ わたしはそれがいかにも綺麗で、白くて、晴れ／＼してゐると思つた！ あの船にそいつが乗つて、そこから、その一族が發生したところから来てゐたんだ。そしておれを見たんだ！ おれの家がやつぱり白かつたものだから、急に船から飛びあがつて上陸したんだ。さうだ！ しまつたことをしたなあ！

今こそ知つた、豫知することも出来る。人間の時代が終つたのだ。

きやつが来たのである。きやつとは、不安を感じた坊さん達が調伏したり、魔法使が闇の晩に、その現はれる姿を見はしなかつたが呼び出したり、この世の假の主人の想像力が、地神、幽霊、神魔、妖精、悪魔などといふ恐ろしい形や上品の形を與へたりしたものである。かういふ粗雑な概念は、昔の人の恐怖心から工夫し出されたのだが、後の一層開化した人達は、更に一層正しい形をきやつに與へた。メスマルがきやつを豫知したので、十年以前に醫者達はその魔力の性質を、きやつが自分でそれを働かさぬ以前にさへ正確に發見した。この新領主の武器や神祕な意志の力やを取つて、彼等は奴隸となつた人間の魂の上に應用した。奪魂術、催眠術、暗示などと呼んでゐるのは即ちそれだ。が、おれが何を知つてゐよう？ おれはこの恐ろしい力を麗白小僧のやうにおもちやにしてゐる人々を見たんだ！ われ／＼は禍なる哉——人間は禍なる哉！ きやつが来たんだ。や——や——何とか名前を自分で言つてゐる——や——おれにその名を喚いてゐるや

うだが、はつきりと聞えない——や——さうだ——きやつがそれを喚いてゐる——耳を澄してゐるんだが——だめだ——もう一べん——それを——ホルラ——聞えたぞ——ホルラだ——それがきやつだ——ホルラだ——きやつが来たんだ！——

あゝ！ 禿鷹は鳩を食つた。狼は小羊を食つた。獅子は尖つた角のある水牛を食つた。人間は矢や槍や火薬などで獅子を殺したが、ホルラは人間が牛馬を扱ふやうに人間を扱つて、ただその意志の力だけで、きやつの所有物とも、奴隷とも、食物ともするだらう。われ／＼は禍なる哉！

しかし、動物だつて時にはおのれを征服してゐる人間に叛いて殺すこともある。おれもまたさうしたい——することも出来るだらう——が、それには先づきやつを知り、きやつに觸れ、きやつを見なければならぬ！ が、學者達の言ふところに依れば、動物の目はわれ／＼人間のと違つてゐるから、われ／＼がする通りに見分けはしないといふことだ。して見れば、おれの目もまた、おれを壓迫してゐるこの新來者を見分けることが出来まい。

なせだ？ おゝ！ 今こそおれはサン・ミシエル山の坊さんの言葉を思ひ出す。「われ／＼は存在してゐるもの十萬分の一をも見ることが出来ますか？ お聞きなさい。そこに、今、自然界で一番力の強い風が吹いてゐます。それは、人を倒したり、建物を覆したり、樹木を根こぎにもすれば、海原を擧げて水の山ともします。絶壁を崩したり、大きな船舶を暗礁にうちつけもします。殺しもすれば嘯きもする。嘆きもすれば吼えもする。しかしあなたはそれを御覽になつた

事がありますか？ 御覽になる事が出来ますか？ けれども風はやつぱり存在してゐますよ！」
 そこでおれはつくづくと考へた。おれの目は弱くて、不完全で、よしんば固い形態のものでも、それが硝子のやうに透明のものだと見分けられないではないか？ もし裏に水銀の張つてない硝子が行く手を塞いでゐるものなら、おれはきつと、室内に飛び込んだ鳥が窓硝子に頭を打ちつけるやうに、それに突き當るに違ひない。のみならず、百千の事物が人間を欺いて横道に逸れさせる。して見れば、光で透き通つてゐる新物體を人間が認めることが出来ぬといふのは、何も驚くべきことではないではないか？

新生物！ なせいけないのか？ 来ることはしかときまつてゐたんだ！ なせわれ／＼が最後のものでなければならぬのだ？ でもわれ／＼は、われ／＼の前に造られた他のすべてのもののやうにそれを見分けられない！ その理由は外でもない。その本性がわれ／＼のよりも一層完全で、その形態がわれ／＼のよりも一層微妙に完全に出来てゐるからである。われ／＼の出来はいかにもかほそい不器用な細工なんだ。身體が背負はされてゐる器官といへば、いつも疲れたり、纏れ切つた捲髪のやうに引張られたりしてゐて、動物や植物のやうに、空氣、草木、肉類などといふものからやつと營養分を取つて生きてゐる。動物的な機械で、ちぎりに病氣に罹つたり、片輪になつたり、朽ち果てたりしてしまふ。こはれ易く、狂ひ易く、單純な癖に中心を外れ、工夫を凝らしてありながら出来が悪く、粗末な癖に細工の細かい機械であつて、一口に言へば、聰明にも偉大にもなり得ようといふ生物の輪廓だ。

われ／＼は牡蠣から人間に至るまで、この世の中では實に僅かな、或ものでしかない。なぜ、順々に出現したものを、あらゆる異つた種類のものから別にすると、いふ時代が一度び完了すれば、もう一つあつてはならないのだ？

なぜもう一つ無いんだ？ なぜまた巨大な、見事な、その地方全體を靄郁と響らすやうな花を持つた樹木が無いんだ？ なぜ地水火風の外に他の元素が無いんだ？ 萬物をはぐくむ親と云つては、ただこの四大、四大ばかりか！ 何といふ哀れなことだ！ なぜそこに四十も、四百も、四千もあつてはならないのだ！ 事々物々のいかに哀れで、いかに賤しく淺猿しいことぞ——しぶ／＼興へられたり、下手に工夫されたり、拙く造られたりしてあることぞ！ あゝ！ 象や海馬が、何で優美だ！ そして駱駝が、何で優雅だ！

しかし蝶は、諸君も飛ぶ花だつて言ふだらう！ わたしはこの世界の百倍も大きからうと思はれる蝶を夢に見ることがある。が、その翼の形や、美しさや、色彩や、運動やを口に言ひ表はすことは出来ない。けれども、わたしはそれが——それが星から星へ羽搏つて飛ぶ時、その飛行の調和した輕やかな呼吸で星の世界を爽かにしたり響らしたりするのを見る！ すると、その人民は、有頂點になつてその過ぎて行くのを見詰めてゐる！……

これは一體どうしたんだ！ きやつだな、ホルラの奴がおれに憑いて、こんな馬鹿げたことを考へさせてゐるんだな！ きやつがおれの中にあるんだ！ おれの魂にならうとしてゐるんだ！

よし、きやつを殺してくれよう！

八月二十日 きやつを殺してくれよう。おれはきやつを見た！ ゆうべ、おれはテーブルに向つて、非常に熱心に書くやうなふりをしてゐた。おれはきやつがおれのまはりを、おれのちぎ近くを、多分きやつに觸れ、きやつを捕へることが出来ようかと思はれるほどの近くを、こそ／＼歩きまはるだらうといふことをよく知つてゐた。そこで……そこでおれは必死にならうと思つた。手や、膝や、胸や、額や、齒やで、きやつを絞め殺し、押し潰し、噛み碎き、微塵に引裂いてくれようと思つた。

で、おれは激し切つた神經をちつと抑へてきやつを見張つてゐた。

おれは二つのランプと八本の蠟燭とに火を點けて爐の上の棚に置いた。まるで、この明りできやつを見出さねばならぬかのやうに。

寢臺が、柱の付いた古い櫛の木の寢臺が、おれに向き合つてゐた。右の方には爐があつた。左の方の戸は、きやつをおびき込む爲に、暫くの間明け放つて置いてから、氣を附けて閉めて置いた。うしろには、可なり高い衣服棚があつて、それには鏡が箴め込んであつた。鏡は、毎日鞆を刺つたり着物を着たりする時の役にも立てば、また、おれがその前を通る度に、頭のてつべんから足の爪先まで自分で映して見たりする習慣でもあつた。

で、おれは、きやつがまたおれを見張つてゐたから、一番騙してくれようと思つて書いてゐるふりをしてゐた。と不意に、きやつがおれの肩越しに讀んでゐたのを、いや、おれの耳に殆ど觸

れるばかりのところを、確かにそれと気が付いた。

で、いきなり両手をぐつと攔けて、殆ど倒れんばかりに疾く振り向いて立上つた。や……眞晝間のやうに明るかつたが、おれの妻は鏡の中に見えなかつた……それはからつぽで、澄み切つて、奥深くつて、光に満ちてゐた！ が、おれの妻はそれに映つてゐなかつた……しかもおれは、おれはそれに向つてゐたんだ！ おれは大きな、澄み切つた鏡を上から下まで見た。そして、ぐらつく目を据ゑてちつとそれを見守つた。が、敢て進まうとはしなかつた。身動きをしようとしなかつた。確かにきやつがそこにゐて、その人目にかゝらぬ身體がおれの映象を吸ひ取つてしまつたのだが、今またおれを逃げようとしてゐることを知つてゐたからだ。

どんなにわたしは恐れたらう！ さうしてゐるうちに、不意に鏡の奥の霧の中に、宛然たる霧の中に、水のヴ・エルを通して自分の妻が朦朧と見え始めた。そして、この水は左から右の方へおもむろに流れつゝあつて、刻一刻ごとわたしを遮つたものは遂にはつきりした形を取るやうには見えなかつたが、しかし一種の不透明な透明體で、それが次第に明かになるやうだつた。たうとうわたしは、完全に自分を認めることが出来た。毎日自分で自分を眺める時の通りに。おれはきやつを見た！ で、その恐ろしかつたことがまだ身内に残つてゐて、今もなほ身震ひする。

八月二十一日 どうしたらきやつを殺すことが出来ようか？ 捕まへることも出来ないのに。

毒殺しようか？ しかし、きやつはおれが毒を水に混ぜるのを見やがるだらう。それに一體われわれの毒が、實質のないきやつに何等かの効果を持つたらうか。だめ……だめ……だめ……だめの皮に極つてゐる。すれば？ すれば？

八月二十二日 わたしはルアンから鍛冶屋を呼び寄せて、彼に、パリの特別な旅館などが、泥棒を恐れて、地階の窓に用ゐてゐるやうな鐵の扉を、わたしの部屋へ作るやうにと吩咐けた。で、彼は今、同様な戸を一枚、それと一しよに作らうとしてゐる。おれは自分で臆病者にしてのけたが、何の、そんなことを構ふものか！

九月十日 ルアン、大陸ホテル。やつつけた。やつつけた——けれども、きやつは果して死んだらうか！ おれの心は、見たものですつかり顛倒してゐる。

えよと、昨日、鍛冶屋が鐵の扉と戸とを附けたので、わたしは眞夜中まで、だん／＼寒くなるのもかまはずに、すつかり明け放して置いた。

ふとわたしは、きやつがそこにゐたのに感付いた。と、喜びが、狂氣のやうな喜びが胸に漲つた。わたしはそつと立上つて、きやつに何事も推察させまい爲に、暫くの間に左に行つたり來たりした。それから、わたしは編上靴を脱いで、何気なしにスリッパを穿いた。それから、鐵の扉をみんな閉めて、落ちついた足取で戸の方に戻つて來ると、戸を二重鍵で閉めた。それから窓のはうに歸つて、窓に海老錠をかけて鍵をポケットの中にしまつた。

ふとわたしは、きやつがわたしの周囲を小止みなく動きまはつてゐること、今度はきやつのほうが恐ろしくなつて、わたしに、戸をあけさせようとしてゐることとに気が付いた。わたしは危く負けようとしたが、でも、許さうとはしなかつた。けれども、背を戸につけたまゝで、わたしはそれを半分だけ、ちやうど、あとじさりに自分が出て行くことが出来るだけ明けた。すると、わたしは背がずるぶん高いので頭が鴨居にとどいた。わたしはきやつが逃げることに出来なかつたことを確めた上で、きやつを一人きり、全くただ一人きり締め込んでくれた。何といふ合せだ！ 確かにきやつを捕へたのだ。そこでわたしは梯子段を駆け降つて寢間の下になつてゐる客間にはひつた。わたしは二つのランプを取つて、その石油をみんな絨緞や、家具や、そこらちゅうやに振り撒いた。それから火をそれに點けて置いて逃げ出したが、入口の大戸にも氣を付けて二重に錠を卸した。

わたしは外に出て、庭の端にある桂の木の叢の中に身を潜めた。どんなにそれが長かつたらう！ どんなにそれが長かつたらう！ 一切のものは眞暗で、沈黙で、不動で、そよとの風もなければ一つの星だに見えなかつた。ただ重たい雲の塊が、人はそれを見ることが出来なかつたが、しかしわたしの靈魂をそれが、おゝ！ 非常に重たく壓してゐた。

わたしは自分の家をちつと見詰めて待つてゐた。どんなにそれが長かつたらう！ わたしはもう火が獨りでに消えたのか、でなければ、きやつがそれを消したのか、と思ひ始めた時に、下の窓の一つが猛烈な焔の下に破裂して、そして、長い、柔らかな、撫でるやうな赤くて黄色い焔が

白壁を這ひ上つて、屋根の高さまでそれを詠めた。光は木立や、枝や、葉などの中を走つた。そして恐怖の戦慄がまたそれらのものに満ちわたつた！ 鳥は目覺め、犬は吠え出し、まるで夜が明けんとしてゐる時のやうに見えた！ 見る見る外の二つの窓が微塵に飛び散つて、家の下部は一面に恐ろしい嵐となつた。ところが、ふと悲鳴が、恐ろしい、金切り聲の、斷腸の悲鳴が、女の悲鳴が夜を劈いて響き渡つた！ そして屋根部屋の二つの窓が開かれた！ おれは召使達を忘れてゐたんだ！ おれは恐怖に打たれた顔と狂氣のやうに振つてゐる彼等の腕とを見た！

すると、おれはもう恐怖に堪へられなくなつて、村のはうへ駆け出した。「助けてくれえ！ 助けてくれえ！ 火事だ！ 火事だ！」と叫びながら。で、もうその場に向つて駆け来て来る人々に出會つたので、おれはまた彼等と共に見返した。

この時、家はたまたま恐ろしい、そして壯麗な火葬の燃木、國中を照らす異形な燃木たるに過ぎなかつた。で、そこでは幾人かの人間が焼けつくあつた。そこでは、きやつもまた、きやつ、きやつ、おれの囚人、新生物、新領主、ホルラの奴もまた焼けつくあつた！

不意に屋根全體が壁の間に落ちて、焔の山が空に上つた。見ると、その爐の上に開いたすべての窓からは、焔が炎々と噴き出してゐた。で、わたしは、きやつがそこで、その爐の中で死んでゐたと考へた。

死んだらうか？ はてな？ きやつの身體は？ あの透明なきやつは、われ／＼を殺すと同じ方法で滅すことは出来ないのではなかつたか？

萬一きやつが死ななかつたとすれば？ 恐らくは獨り時のみがこの目に見えない、恐るべき生物の上に力を持つてゐるんだ。なぜ、この透明な、認めることの出来ない身體も、この靈魂に屬してゐる身體もまた禍や疾病や不時の破滅などを恐れなければならぬとしなければならぬのか？

不時の破滅？ 人間のすべての恐怖はそれから生じて来る！ が、人間の後に來たホルラだ。毎日、いかなる時でも、いかなる瞬間でも、いかなる出來事に依つてでも、死ねる人間の後に來たきやつだ！ きやつはきやつ自身の正當な時が來なければ、即ち、きやつの存在の極限に觸れた時が來なければ死にやうなかつたのだ！

いや——いや——それに就いて疑ふべき餘地はない——きやつは死ななかつた。すれば——すれば——おれが死なねばならないのだな！

愛（獵人日記の三ペトジ）

わたしは今、或新聞の雑報の中で愛の悲劇を讀んだ。男が女を殺して自分も死んだといふから、男はきつと女を愛してゐたに違ひない。その男が何人であらうと、その女が何人であらうと、そんなことは構つたことでない。わたしにはただその愛だけが關係がある。と云つたところで、それがわたしを感動させるからとか、吃驚させるからとか、乃至は、あはれを催させるからとか、わたしを考へに沈ませるからとか云ふのではない。ただそれがわたしの心に、青年時代の記憶——それは獵に出た時、天の眞中に方つて、ちやうど初期のキリスト教徒に十字架が顯はれたごとく、愛がわたしに顯はれたといふ不思議な記憶を喚起したからである。

一體わたしは、生れつき本能も感覺もすべて上古の人のやうで、僅に文明人の議論やら感情やらで和げられてゐた。わたしは獵が非常に好きで、かの傷ついた鳥の血汐が、その羽の上やわたしの手の上などにぼた／＼と滴れるのを見ると、殆ど鼓動が止つてしまふかと思ふほどに胸が躍る。

その年は、秋の末ごろに、急に氣候が寒くなつたので、わたしは從兄のカルル・ド・ローギユから、一しよに、夜の明け方に沼池へ鴨を撃ちに行かないかと誘はれた。

從兄は快活な四十男で、髪の毛が赤く、肥り肉で髯が生えてゐた。生得の氣立が良い上に、普通の境涯をも楽しく暮らして行くといふフランス人に特有な、機智に富んだ、愛嬌のある半野人とでもいふやうな田舎紳士で、流れに沿うてゐる廣い谷間に建てられたなかば百姓家、なかば別荘風の家に住んでゐた。その左右の丘には、舊領主の森がこんもりと茂つてゐた。そこには雲を

も凌ぐ大木がまだ残つてゐて、フランスのその地方では稀に見出だされるやうな好獵地であつた。時折は鷹もそこで撃てた。また、人家の込んだ地方へは滅多に來ない渡り鳥も、これらの幾百年も年古りた枝の間にはきつと留つた。それはまるで、彼等の短い夜の宿りの爲に、昔の森の一隅がそこに残されてあると思つてゐるものゝやうに見えた。

谷間には廣い秣場があつて、水は溝で灌がれ、區劃は籬で作られてゐた。そして、遠くからその水を引いて來た川は、廣々とした沼に注いでゐた。その沼は、わたしが今まで見た獵場の内の最もすぐれたもので、從兄はそれをまるで公園でもあるかのやうに心に懸けて看守した。一面に生ひ茂つた葦が沼を生き／＼とさせ、ざわめきの音を立てゝゐる間に、狭い通路が出來てゐて、そこを、底の平たい小舟を棹で推しやるやうにして漕いで行くと、死んだやうな水の上を音も立てずにゆら／＼と亘つて、葦を掃つて先へ進んだ。すると、魚はすばやく雜草の中に隠れ、野禽は水に潜つて、その尖つた黒い頸は忽ち見えなくなつてしまふ。

一體わたしは水が非常に好きである。けれども、海は餘りに茫漠としてゐるのみならず、頗る變化に富んでゐて取りとまりがないといふところがある。川はいかにも美しいが、日となく夜となく流れて止まない。殊に沼は、世に知られない水棲動物が棲んでゐて、氣味のわるいことがある。が沼は地球の上に全く獨立した世界であつて、この別世界は、それ自身の生命と、その定つた住民と旅客とを有し、その聲、その音、殊にその神祕を有してゐる。しかも時あつてまた、世に沼ほど騒擾な、不安な、凄愴な思ひをさせるものはない。なぜ、かゝる凄愴な氣が、水で覆は

れたこれらの低地の上に漂つてゐるのであらう？ 葦がさら／＼と捉へどころもない音を立てるからか、怪しい燐火が燃えるからか、しいんとした夜の間に、底ひも知れぬ沈黙がそこらを鎖すからか、或ひは怪しい烟霧が、細帷子のやうに葦の上にかゝるからか、それともまた、ふだんは軽く靜かに、時としては人の世の大砲よりも、天の雷鳴よりも恐ろしいほどに、人目には觸れもせで水や泥をぶく／＼とはね飛ばすのが、人にそれらの沼を、いつも夢想してゐる國——思ひも依らぬ危険な祕密を藏してゐる國ではないかと思はせるからか。

否々、その餘の或物がそこから發してゐるのだ。他のもつと深遠な、もつと嚴肅な神祕、恐らくは創造そのものゝ神祕が、これらの濃霧の裡に漂うてゐるのだ！ なぜかといふに、昔、生命の萌芽が初めて生ひ出でて動き出し、顫動を始めたのは、太陽の熱の下に、乾き果てずして重苦しく凝んだ濕地の中の濁つた水からではなかつたか？

わたしは夕方從兄の家に着いた。それは石にもひびの入らざるやうな、ひどく寒むる日であつた。大廣間に入ると、傍棚にも、壁にも、天井にも、剣製にした鷹、蒼鷺、梟、みみづく、のすり、雄鷹、秃鷹などが、釘付けにされた枝の上に或ひは翼を擴げ、或ひは翼を休めて、一面に留つてゐた。從兄は海豹の皮で作つたジャケットを着て、まるで、寒國から來た不思議な動物のやうな姿をしてゐたが、食事をしながら、その晩の爲に置いて置いた色々の準備について語つた。

その話に依ると、わたし達は朝の三時半に出懸けて、四時半頃には、從兄が豫て見張りの場所

として選んで置いたところへ着いてみなければならぬ。そこには氷の塊で出来た小屋があつて、その中でわたし達は、夜明け前の恐ろしい風——その風の寒さといつたら、鋸で肉を引き裂くやうな、ナイフの刃で切るやうな、毒針で突き刺すやうな、釘拔で振り曲げるやうな、さては火で焼くやうな、その恐ろしい風をいくらか驚けるのだといふ。

従兄は両手を擦りながら

『こんな寒さツて無いことだ。晩の六時だといふのに、もう零下十二度だよ。』と言つた。

食事が済むと、わたしはすぐに臥床に入つて、火のとかくと燃えしきつてゐる爐の傍で眠つた。

三時に従兄はわたしを起した。で、わたしは羊の毛皮を着た。従兄のカルルは熊の毛皮で覆はれてゐた。そこでわたし達は、湯傷するやうな熱いコーヒーを二杯と、香の高いブランデーを幾杯か呷つてから、一人の従者と、ブロンデオンにビエロオといふ二匹の犬を連れて出掛けた。

一足外に出ると、その瞬間から、わたしは寒さが骨の髄まで染み渡るのを覺えた。それは大地が凍て、死んだやうに見える夜であつた。凍つた空氣は双逆ふやうに身體にさはつて、チク／＼と痛みを起す。風はそよりとも吹かず、空氣はぢつと動きもせず激んで、木や草や蟲や小鳥までを噛み、刺し、枯らし、死なしめる。小鳥は枝から固い地上に落ちて、寒さに抱きしめられて硬ばつてしまふ。

終りの四分の一に虧け残つて、ぐつと一方に傾いた月は、蒼白く疲れたやうに中空に懸つてゐ

た。もう西へ沈む力さへもなさうに弱り果てた上に、空の嚴しい寒氣に捉はれて麻痺させられたので、よんどころなく高いところに残つてゐるやうに見えた。そして、下界を照らす潤ひのない悲しげな光は、毎月、月が復活の終りに方つて、われ／＼に與ふるその消えさうな蒼白い光であつた。

カルルとわたしは並んで行つた。背を猫背に曲げて、両手をポケットに入れて、銃は脇の下に抱へてゐた。わたし達の長靴は、凍つた川をも滑らずに歩けるやうに毛で包んであつたので、何の音も立てなかつた。わたしは犬のいきが白い蒸氣となるのを見た。

わたし達はちぎに沼の端に着いた。そして、その低い森の間に通じてゐる枯葦の小徑の中へ分け入つた。

肘がその長いリボンのやうな葉にさはると、さら／＼といふ軽い音がうしろに起つた。すると、わたしは、かつて覺えなかつたやうな、この沼が惹き起した力強い不思議に襲はれた。が、それもだんだん歩いて行つて、から／＼になつた葦の茂りの中へ入ると、烈しい寒さの爲に何時か消えてなくなつた。

ふと、小徑の曲り角で、わたしは身を寄せる爲に建てたといふ例の氷小屋を認めた。わたしは入つて行つた。渡り鳥が目覚めるまでには、まだ殆ど小一時間も待たねばならなかつたので、わたしは粗ラシャで身を包んで温まらうとした。

そこで仰向けに寝轉んで恰好の悪い月を眺めた。月は、この極地に見るやうな家のぼんやりと

透き通る壁を通して、四つの襷端を有するやうに見えた。

ところが、凍り詰めた沼の寒さや、壁の冷たさや、大氣の寒さが恐ろしく身に染みて来て、果ては咳嗽さへ出始めた。

すると、従兄のカルルは心配し出した。

「けふの獵がもし當らなかつた日にはさんざんだ。君が風邪なんか引いては困るよ。さあ一つ火を焚かう。」

かう言つて、彼は従者に命じて葦を刈らせた。

わたし達はそれを小屋の中央に積み重ねた。燔拔の穴は屋根の真中であつた。そして、赤い焰が清く透き通つてゐる壁面をのぼつて行くと、四壁はおもむろに、氣の付かぬほどづつ溶け始めて、まるで、氷の石壁が汗ばんだやうになつた。

カルルはそれまで外にゐたが、

「ちよつと来て見給へ！」とわたしを呼んだ。

小屋から出て見ると、驚いた。圓錐形をなした小屋は、火を心にした大きなダイヤモンドが、凍つた沼の上に不意に出来たやうに見えた。そして、内には二つの幻のやうな影がゐた。それは火の傍に暖まつてゐる二匹の犬の影であつた。

その時、奇態な鳴き聲が、狂ひ立つたやうな鳴き聲が、路に迷うてゐるものゝやうな鳴き聲が頭の上を渡つた。火影はそれが野禽であることを示した。

凡そ何物といへども、冬の日の曙光がまだ地平線上に現はれぬ前に、姿を見せもせず、迅速に遙かに遠い薄暗い空を駆けて行く生の第一聲ほど人の心を動かすものはあるまい。この凍つた曉には、鳥の翼に運ばれて行く叫び聲が、この世の靈の太息であるかのやうに思はれる！

「火を消せ。もう夜が明けるぜ。」とカルルが言つた。

いかにも空は白み始めてゐた。見ると、鴨の群が空に長い、早い點をなして、すぐにまた消え去つた。

忽ち一條の光錠が夜を劈いて走つた。カルルが發砲したのだ。二匹の犬は駈け出した。

それからといふもの、殆ど一分毎に、従兄とわたしとがかはるがはる、飛び立つ群の影が葦の上に見はれるや否や急いで撃つた。ピエロオとブロンジョンとは喘ぎながら楽しんで馳せ廻つて、血汐の滴る鳥を持ち歸つた。中にはまだ目をあいてゐて、われ／＼を見詰めてゐるものもあつた。

夜があけはなれた。それは空の青々とした麗かな日であつた。太陽が谷間の奥に姿を現はしたので、わたし達は歸らうかと思つてゐる時、頭を伸ばし、翼を揚げた二羽の鳥が、頭の上を急いですりつと飛んだ。いきなりわたしが發砲すると、その一羽がついわたしの足許に落ちて来た。

それは銀色な胸をした小鴨であつた。と其時、頭の上の青空で、わたしは鳥の聲を聞いた。それは切々と繰返す斷腸の哀音であつた。見ると、残つた一羽が、幸に生命を助かつた小さな動物が、わたしの手の中に保たれてゐる友の死骸をちつと眺めながら、われ／＼の頭の上の青空をぐるぐるまはつてゐるのであつた。

カルルは膝を折り敷き、銃を肩に當て、熱心にそれを狙ひながら、鴨が彈着の内に來るのを待つてゐた。

『君が雌を撃つたものだから、雄が離れやしない。』と彼は言つた。

實際雄は離れなかつた。絶えずわれ／＼の頭の上をまはりながらその鳴き聲を續けてゐた。世に苦惱の呻きは多いが、この佗しげな愁訴ほどに、——この空中で友を失うた哀れな鳥の怨むやうな、咎めるやうな鳴き聲ほどに、わたしの心を傷ましめたものはなかつた。

折々、狙ひを定めてゐる銃におどかさされては飛び上つて、たゞ獨り空のかなたへ飛び去つてしまひさうに見えることもあつたが、その決心はなか／＼付き兼ねると見えて、すぐにまた雌を慕つて歸つて來た。

『それを下に置いて見給へ。』とカルルはわたしに言つた。『ちきに先生やつて來るから。』すると、果して彼は、その動物の愛情に、わたしが撃つた他の動物に對する愛情に溺らされて、自身の危急には氣が付かずにおれ／＼に近づいて來た。

カルルは發砲した。それはちやうど、吊して置いた鳥の糸を誰かが切つたかのやうであつた。

わたしは落ちて來る黒い物を見た。そして、葦の中へばさりと落ちる音を聞いた。と、ピエロオがそれをわたしに持つて來た。

わたしは彼等を——彼等はもう冷たくなつてゐた——一つの獲物袋に入れた。そして、その晩バリに歸つた。

女王オルタンス

アルジャンツイエでは、彼女は女王オルタンスと呼ばれてゐたが、その譯は誰も知らなかつた。多分、士官が指揮するやうな口調で物を言つたからか、でなければ、背が高く、骨ぶとで、堂々としてゐたからか、でなければ、多分、鶏や犬や猫だの、金絲雀や鸚鵡だのといふ、老嬢達の心にいとほしがられるやうな家畜や家禽の群に君臨してゐたからであつたらう。彼女は決してさういふ寵愛物を甘やかもしなければ、また喉を鳴らしてゐる猫の天鷲絨のやうな毛皮の上に、女の口からいかにも自然に注がれるやうに見えるあのやさしい慈愛の言葉をしやべりもしなかつた。いや、その家畜や家禽を王者のやうに支配した。即ち、君臨した。

彼女は純然たる老嬢であつた。聲はあらく、身體つきはかさ／＼してゐて、その魂までが硬ばつたやうに見える老嬢の一人であつた。彼女は反駁をも口答へをも許さなければ、ぐづぐづしたり、そゝつかしかつたりすることをも、無精をも疲勞をも用捨しなかつた。誰もかつて彼女がこぼしたり、後悔したり、何人かを羨んだりしたのを聞いたことがなかつた。「人にはそれ／＼その人の運がある。」と彼女はいつでも言つて、かたく宿命を信じてゐた。彼女は決して教會へ行かなかつた。坊さんを嫌ひ、神をも殆ど信じないで、宗教に關したすべてのことをば、『泣く兒にお乳』と呼んでゐた。

往來に接してゐる小さな前庭を持つた小さな家に住んで來た三十年の間に、彼女はたゞ女中達が二十一歳になるや否や、すげなく彼女らをかへた外には少しもその生活のさまを變へなかつた。その犬や猫や鳥などが年を取つてか不慮の出來事かで死んだ時にも、彼女はかつて涙もこぼさ

ず、留息一つせず彼等を取りかへた。そしてその死んだ動物共をば花壇の何處かに小さな鋤で葬つて、そして平氣でその上から土を踏みつけた。

彼女はその町に幾人かの知合を、夫が毎日パリへ出て行く勤人の家族の知合を持つてゐた。折々彼等と共に晩の茶を飲むやうにと招かれた。彼女はいつもさういふ席で眠つてしまつて、歸る時間が来ると呼び起されねばならなかつた。が、晝でも夜でも何物をも恐れてゐなかつたので、決して人に送らせなどしなかつた。子供は好きでないらしかつた。

彼女は男の仕事を自分で何でもやつて日を送つてゐた。大工もすれば、庭いぢりもすれば、木を鋸で挽きもすれば斧で割りもした。必要があれば左官の仕事までも自分でやつて、自分の古びた家を繕つたりした。

彼女は年に二回逢ひに来る親類を持つてゐた。シンム、コロンベルとの二家族で、彼女の二人の姉妹が、一人は藥草商へ、もう一人は小金を持つて暮らしてゐる男へかたづいてゐたのであつた。シンム家には一人も子がなかつたが、コロンベル家にはアンリ、ポウリン、ジョゼフの三人あつた。アンリは二十、ポウリンは十七歳、そしてジョゼフは、母親がもう身持になぞなることはあるまいと思はれた頃になつて生れて来たので、たつた三つであつた。

が、何等特別な愛の繼もこの老嬢と親類との間にはなかつた。

千八百八十二年の春、女王オルタンスは俄に病氣になつた。近所の者達が醫者を迎へて来たが、彼女はてんで診せようともしなかつた。また坊さんが其處へ姿を見せると、彼女は半分裸で床か

ら脱けて、家の外へ追ひ出した。

小婢は、泣く／＼彼女の爲めに煎薬をこしらへてゐた。

が、寝ついた三日後には、容態がいかにもひどく見えはじめたので、隣の桶屋は、無理にもその家にはひらうとしてゐた醫者の意見を聞いて、二軒の親類の者を呼び寄せてやらなくてはならぬと思つた。

彼等は同じ列車で朝の十時頃に來た。コロンベル夫婦は幼いジョゼフを連れてゐた。

庭の入口まで來た時に、先づ第一に彼等が見たのは壁際の椅子に泣きながら腰かけてゐる小婢であつた。

夫は戸口の筵の上に燃えるやうな日ざしを浴びて寝こんでゐた。そして二匹の猫は二つの窓の窓敷の上に乗るで死んだものゝやうに身體を伸ばして、目は瞑り、足と尾とは擡げてゐた。

こ、こ、こと啼く一羽の大きな牝鶏は、黄色い、綿のやうに輕いうぶ毛をつけたひよつこの一隊を庭の中で遊ばしてゐた。そして壁にかゝつてゐる、はこべに蔽はれた大きな籠には、暖かな春の朝の日影のなかで、がや／＼と囀り立てる小鳥の群がはひつてゐた。

もう一つの、別荘の形をした小さな籠には、二羽の相思鳥が、靜かに横木の上に肩を並べて留つてゐた。

丸々と肥えて、息を切らしてゐたシンム氏は、いつでも人を、男でも女でも自分の前から押しのけながら、何處へでもまつさきにはひつて行くのが癖だつたが、訊いた。

『おい、セレスト、たいへん容態はよくないのかい、え?』

小婢は涙の中から震へた聲で言った。

『もうわたくしはお分りになりません。お醫者さまも駄目だつて仰有います。』
彼等は互ひに顔を見合せた。

シム夫人とコロンベル夫人とは矢庭に物も言はずに抱き合つた。二人はいつでも髪をなだらかに伸ばしてゐたのと、爐のやうに燃え光つてゐるカシミアの赤い肩掛をしてゐたのとで、非常によく似てゐた。

シムは、青黄色く瘦せた、胃弱が持病な上にひどい跛をも引く義弟の方へ向いて、重くるしい口調で言った。

『是非もない事だ! が、ちやうどわれ／＼は間に合つた!』

しかし誰も地階の、死にかけてゐる女の寢間へはひつて行かうとするものはなかつた。シムさへもしりごみした。却つてコロンベルの方が勇氣を振り起して、まるで船の櫂みたいにあちらこちらへゆら／＼しながら、敷石の上に杖の金環を鳴り響かせつゝ眞先にはひつて行つた。

二人の女が次ぎに進んで、シム氏は殿りをした。

幼いジョゼフは外に残つて、うつとりと犬に見とれてゐた。

一道の日光が寢臺のまん中を横きつて、ちやうど、びり／＼と震へながら、絶えず開いたり閉ぢたりしてゐた兩方の手をいやにぎら／＼と照らしてゐた。指はまるで心でもあるやうに、その

運動の一つ一つが何かはつきりとした意義を持つてでもゐるやうに、何かの意味を傳へてもするやうに、何か指導する精神に従つてでもゐるやうに、働いてゐた。身體の他の部分は夜具の下で動かすにゐた。骨立つた顔にも震へは少しも見えなかつた。日は閉ぢたままでゐた。

親類の者達は、半圓形に横がつて、痙攣的に波打つてゐる彼女の切なげな胸の邊を黙つておつと見つめはじめた。小婢は彼等のあとから、泣きながらはひつて來てゐた。

たうとうシムが訊いた。

『それで、お醫者さんは何と言はれるんだつて?』

小婢はとぎれ／＼に言った。

『靜かにしておけ、かうなつては、もうどうしやうもない、と仰有つてです。』

ところが、不意に老嬢の唇が動きはじめた。唇は無音の言葉を、死んで行く女の頭の中に秘められてゐた言葉を話してゐるやうに見えた。と同時にその手の不思議な運動はますます烈しくなつた。

と俄に彼女は小さな、細い聲で、彼女自身の聲とはまるきし違つた——何處か遠くの方から、恐らくは今までかつて開かれたことのなかつた心の底から、出て來るやうに見えた聲で話しはじめた。

シムは、あまりの痛ましさにその場にゐられなくなつて、足を爪立てて出て行つた。コロンベルは彼の脚が疲れて來たので、腰をおろした。

二人の女は立つたままでゐた。

女王オルタンスは今では非常に早くしやべつてゐたが、誰にも何の事やら一言も分らなかつた。彼女は名前を、澤山の名前を呼びつゞけながら、さもなつかしげに架空の人物に話しかけた。

「フィリップや、ここへお出で、さ、おかあさんにキスして！ お前はおかあさんを愛してくるの、え？ ローズや、わたしが留守の間妹を見てゐておくれ！ どんなことがあつても獨りでおいではいけないよ、分つたかえ？ そして氣をつけて、マツチにさはつちやいけないよ！」

ちよつと彼女は黙つてゐたが、やがて一層高い聲で、誰かを呼びでもするやうに、「アンリエット！」と言つた。そして少し待つた後で、彼女は續けた。「おとうさんに社へお出かけになる前にわたしがお話ししたいことがあるつて申しあげておくれ。」と急に、「あなた、わたし今日は氣分がよくありませんの。お歸りが遅くならないやうにして頂戴。わたしが病氣だつて社長さんに仰有いよ。わたしが寝てゐる時に子供達ばかりにしておくのがどんなにあふないかあなたも御存じでせう。お夕飯にはお米のプチングをあげようと思つてゐますの。子供達はあれが大好きなんです。クレエルは喜ばないでせうか？」

と彼女は笑ひはじめた、彼女自身の笑ひとはまるきし違つた若々しい、賑かな笑ひを。「ちよつと御覽なさいよ、ジャンを、なんて顔でせう！ ジヤムをべつたりつけたんですよ、汚い小僧さんだね。ほら！ 御覽なさいつてば、あなた、をかした手ぢやありませんか？」
旅疲れのした脚を絶えずもぞもぞしながら、コロンベルは呟いた。

「病人は夫や子供達のある夢を見てゐる。——いよ／＼もうおしまひだ。」
きよとんと呆氣に取られて、二人の姉妹は身動きもしなかつた。

「いかゞでせう、お帽子や肩掛をお取りになつては、——と小婢が言つた。「どうぞお居間の方へいらつしやいませ。」

姉妹はたうとう一語も言はずにその部屋を出た。コロンベルも靴を引ながら二人の後を追つて、そして死にかけてゐる女が獨りまたもやあとに残された。

戶外用の品々を脱ぎ去つてから、二人の女はやつと腰をおろした。その時、一匹の猫が窓から起きあがつて、伸びをして、部屋の中へ飛び込んで、やがてシンム夫人の膝にのぼると、夫人はそれを撫ではじめた。

彼等の耳には、長い一生の間、彼女が正しく待ち暮らしてゐた生活をいまはの際に生きてゐる、何もかもが今はもうその身に終らうとしてゐる瞬間にさへなほ且つその夢の中に住んでゐる、死にかけてゐる女の聲が聞近に聞えてゐた。

シンムは、庭で、幼いジョゼフや犬と遊びながら、ちやうど達者な男が一日田舎へ出かけた時のやうに、すつかりいゝ氣持になつて、うちの中で死にかけてゐる女のことなどは全く考へずにあつた。

ところが不意に彼はうちの中へはひつて行つて、小婢に言つた。

「おい／＼、お前、おれ達の晝飯の支度をしてくれないか。奥さん方は、何を召しあがる？」

彼等はずまに香草の添へられたオムレットと、一片のヒレ肉に新らしいじやが霧を添へたものと、それからチーズと、一ぱいのコーヒーとにきめた。

そしてコロンベル夫人が財布をポケットに捜しかけると、シンムはそれを止めて、そして小婢の方へ向いて、言つた。

『お前の手許にお金があるだらう？』

『はい、ございます。』と彼女は答へた。

『いくらある？』

『十五フラン。』

『それで澤山だ。急いでやつてくれよ、おれは腹がへりはじめた。』

シンム夫人は、一面に日光を浴びてゐる蔓草や、向ひの屋根の上の二羽の睦しい鳩やを窓から眺めながら、痛ましげな聲で言つた。

『こんな悲しい事で来なければならぬなんて情ないことだ。けふあたり田舎へ行つたらどんなにか楽しからうに。』

妹は返辭はしないで、溜息をした。そしてコロンベルは、歩くといふ考へだけで不安になつて、咳いた。『脚が、いま／＼しいほど痛みくさる。』

幼いジョゼフと夫とは、一方が喜んで叫ぶと一方はやけに吠えて、恐ろしい騒ぎを立ててゐた。彼等は三つの花壇のまはりでかくれんぼをしたり、氣違ひのやうになつて互ひに追ひかけ合つた。

りしてゐた。

死にかけてゐる女はしきりに自分の子供達を呼びつゞけて、順々にみんなに話したり、想像で、着物を着せたり、接吻したり、読み方を教へてやつたりしてゐた。

『さあ、シモンや、言つて御覽、A、B、C、D。いゝえ、それぢやいけない。かうなの、それら！ D、D、D、D、分つたの？ ぢや、もう一度……』

『あんな事をこんな時に言ふのはめづらしい。』とシンムが言つた。と、コロンベル夫人が訊いた。

『そばへ行つてゐなくちやいけないでせうか？』

しかしシンムはすぐにそれを思ひ止らせた。

『行つてゐれば何になります？ どうしてやりやうもないでせう。それならやつぱりこつちにゐたはうがいい。』

誰も固執しなかつた。シンム夫人は、相思鳥と呼ばれてゐる緑色の鳥の番ひの方へ注意を轉じながら、其の鳥達のめづらしいまごころを褒めちぎつて、そしてさういふ感心な鳥達の例にならばうともしない男達を罵つた。シンムは笑ひ出して、ちらりと妻の方を見ると、おどけた調子で、

『トラ、ラ、ラ、トラ、ラ、ラ、ラ。』と、あだかも自分のまごころだけは十分に分つて貰ひたいとでもいふやうに口吟んだ。

コロンベルは、俄に胃が痛んで來たので、地面を杖で打ちはじめた。

もう一匹の猫がその時尻尾を立ててはひつて来た。

みんなが食卓に着いたのは彼是一時頃であつた。

いきなり葡萄酒を味つて見たコロンベルは、最上のボルドオ以外のものは飲むなど言はれてゐたので、小婢を呼び返した。

『おい、おい、これよりもつといゝのが穴蔵にありはしないか？』

『はい、ございます。上等のが。あなた方がおいでの時に召しあがるやうにとつておいたのが。』

『ちや、そいつを三本ばかり持つて来てくれ。』

その葡萄酒を飲んで見ると、すてきであつた。それは醸造の點ですぐれてみたばかりか、十五年間も穴蔵にあつた品だつた。

『こいつあ病人に持つて来いの酒だ、』とシンムは叫んだ。

コロンベルは、このボルドオを無闇に自分の物にしたくなつて、もう一度小婢に訊いた。

『おい、あとにどのくらゐ残つてゐる？』

『まだ、まるでそつくら残つとります！ うちの方はちつともあがりませんでしたもの。下積になつとります。』

と、義兄の方へ向いてコロンベルは言つた。

『シンム、この葡萄酒はわたしが引き取りますよ、いゝでせう、その代り何でもあなたにあげ

ます。こいつは全くわたしの胃に合つてますもの。』

牝雞がその時ひよつこの一隊を率ゐてはひつて来た。二人の女はパン屑を投げてやつて興がつてゐた。

幼いジョゼフと犬とは、十分に食つたので、庭で遊ぶやうにと追ひやられた。

女王オルタンスはまだ話しつゞけてゐたが、今は聲が小さくなつて言葉はもはやはつきりしなかつた。

コーヒーを飲んでしまつてから、みんなは病人の様子を見に行つた。彼女は落ちついてゐるやうに見えた。

みんなはまた外へ出て、庭へ圓く陣取つて、晝飯をこなさうとした。

と不意に、犬が全速力を出して椅子のまはりをぐるぐるとまはりはじめた。口には何か啣へてゐた。子供はやけにそれを追ひかけた。と、やがて兩方ともにうちの中へ見えなくなつた。

シンムは日に腹をさらしながら眠つてしまつた。

死にかけてゐる女がまた大聲でしゃべりはじめた。と思ふと、突然彼女はきやつと叫んだ。

二人の女とコロンベルとはどうした事かとあわてて見にはひつて行つた。シンムは、目を覺ましたけれど、身動きもしなかつた。彼はさういふ事を見るのは好まなかつた。

女王オルタンスは起きあがつて、目ばかり光らしてゐた。犬は、幼いジョゼフに追ひつめられて、寢臺へ跳びあがると、死にかけてゐる女の上を飛び越えて、そして、枕のうしろに體を構へ

て、ぎら／＼する目で遊び相手をねめつけながら、すわと言はば飛び出してもう一と勝負やらうとしてゐた。彼はその齒の間に女主人の上靴の片つぽを啣へてゐたが、それは一時間もその餘もおもちやにしてゐたので、齒ですつかりぼろ／＼になつてゐた。

子供は、突然自分の前に起きあがつた女の姿に驚かされて、寢臺に向つて立ちすくんでゐた。牝雞もまたはひつて來たが、その物首に驚かされて、とある椅子に舞ひあがると、痛ましげな聲をあげて、椅子の四つの脚のまはりにおちけて固まりながらびよ／＼と啼いてゐるひよこ達を呼んでゐた。

女王オルタンスは悲しげな聲で叫んだ。

「いや、いや。わたしは死にたくない、死にたくない！ わたしは死ねません。誰が子供達を育てます？ 誰が世話をしたり、可愛がつたりしてやります？ いや、いや、わたしは死ねません、わたしは死な……」

と彼女は仰向けに倒れた。全くこときれたのだつた。

犬は、ひどくいきり立つて、部屋の中をぐる／＼駆けまはりはじめた。

コロネルは窓の所へ走つて行つて、義兄を呼んだ。

「早く、早く。病人が今息を引いたやうです。」

とシムムは立ちあがつて、そして、観念して、部屋へはひりながら吠いた。

「そいつあ思つたよりも早かつた。」

給仕、もう一杯

なぜわたしが、特にその晩、とあるカフェへはひつたのか？ それはわたしにも分らない。それはひどく寒い晩だった。細かい雨が水煙のやうにふはくしながら、ガスの火先を透明な狭霧の中につつんで、店先の小暗い歩道をびか／＼させたり、柔かな泥や通行人のよごれた足やを見せたりしてゐた。

わたしは別段どこへ行かうともしてゐなかつた。ただふら／＼と食後の散歩をしてゐただつた。わたしはリヨン銀行や、ビビエヌ街や、他の街をも幾つか通つた。と、ふと大きなカフェが、半分以上も人のはひつてゐる大きなカフェが目についた。わたしは中へはひつて行つた、これといふ何の當てもなく。咽喉も少しも渴いてゐなかつた。

ぐるつと一目でわたしはさう込み合つてゐないやうな場所を捜した。そして年寄のやうに見えた一人の男のそばへ行つて腰をおろした。その男は石炭のやうに黒くなつた半ベニイの土のパイプを吹かしてゐた。彼の前のテーブルの上には七八枚の臺皿が重なつてゐて、彼が既に飲んだコップの數を示してゐた。と、一目でわたしは彼が『常連』の一人であるのを、朝、戸が開かれるや否ややつて来て、夜、締められようとする時にやつと歸つて行くあゝいふ手合の一人であるのを、知つた。彼はきたならしく、頭のまん中まで禿げあがつてゐたが、同時に長い白髪がフロックコートの襟のあたりにもちや／＼してゐた。着物は、ひどく大き過ぎて、彼が大きなお中をしてゐた時に作られたものゝやうに見えた。誰にもすぐに、この人のズボンがズボン吊で吊られてゐなかつたことと、従つてこの人は十歩と歩かぬうちに立ちどまつて、ズボンを引きあげて

工合を直さなければならなかつたことが分つた。彼はチョッキを着てゐたらうか？ その靴と靴が包んでゐる足とのことを思つただけでわたしはぞつとした。擦りきれたカフスはそのはしが彼の爪と同じく黒かつた。

わたしが彼のそばに腰をおろすや否や、この變な男は落ちついた聲でわたしに言つた。

『どうしておいでです、この頃は？』

わたしはぐいと彼の方へ向いておつとその顔を見た。と、彼はつゞけた。

『君は、僕が分りませんか？』

『ええ、分りません。』

『デ・バルレエですよ。』

わたしは茫然とした。それはジャン・デ・バルレエ伯といふ、わたしの古い學校友達だつた。

わたしは彼の手を握つたが、呆れて言ふことが何にも見つからなかつた。で、やつとの事で、吃りながら言ひ出した。

『で君は、君はどうしておいでです？』

彼は靜かに答へた。

『僕？ 僕は好きなやうにしてゐます。』

そして彼は黙つてしまつた。わたしは友達らしくしたいと思つて、かう言つた。

『で、今は何をなすつてゐます？』

『何をしてゐるか、御覽の通りさ、』と、彼は澄まして答へた。

わたしは顔が赤くなるのを覺えた。わたしは言ひ返した。

『しかし毎日？』

『毎日同じです、』と彼の答は、煙草の煙のぶうといふ濃い一と吹きと共に來た。

彼はそこで大理石のテーブルの上を銅貨でこつ／＼と叩いて、給仕の注意を呼んで、そして叫んだ。

『給仕、もう二杯。』

と、遠くの方で、或聲が繰返した。

『ビール二杯、四杯でなく。』

と、他の聲が、なほ一層遠くの方で、叫んだ。

『はい、二杯、ここにおきますよ。』

と、間もなく白いエプロンを着けた男がビールを二杯持つて出て來て、泡立つてゐるのをテーブルの上においた。と、泡は縁から溢れて土間へ落ちた。

デ・バルレエはきゆうつと一と息にそのコップをあけてテーブルの上に置き返しながら、口髭の先きについたビールの雫をすすつた。それから彼は訊いた。

『何か新しいことがありますか？』

『何にも新しいことなんか知りません、これつて話すに足るやうなことは、實際、』とわたし

はどもつた。「しかし僕には古くなつたつてこともありません。僕は商人ですから。」

と、落ちついた調子で彼は言つた。

「なるほど。……で、商賣が面白いんですか？」

「いや、しかしそれはどういふ意味ですか？ 君にしたつて何かしなければなりません！」

「といふと、どういふ意味ですか？」

「僕はたゞ、君は時をどうして過されるかつていふだけなんです！」

「僕が何かをすれば何になります。僕は、全く何にもしません。御覽の通り、何にもしません。人間はお金が一文もない時になつてはじめて働きに行かねばならない譯が分るんです。第一働いたつて何になりますか？ 君は君自身の爲に働くんですか、人の爲に働くんですか？ 君自身の爲に働くんなら、君はそれを自分の樂みになさるんで、それはよろしい。が、もし人の爲に働くんなら、結局恩を仇で返されるに過ぎませんよ。」

と、彼はパイプを頬髯の中へ押し込みながら、また呼んだ。

「給仕、もう一杯。どうもひどく渴いてかう呼ばずにはゐられません。いつもこんなぢやありませんか。そこで、僕は何にもしません。一切を成行に任して、そして年を取つてゐます。死ぬ時にも僕は何にも悔いることがないでせう。もしあつても、僕はこのカフエ以外の事は、何にも思ひ出さないやうにします。僕には妻も、子供も、悲しみも、何にもありません。人間としてこんないゝ事がありますか。」

彼はそこで、持つて來られたコップをあけて、舌なめずりをして、そしてまたパイプを取つた。わたしは呆れて彼を見てゐた。わたしは訊いた。

「しかし君は元からそんなぢやなかつたでせう？」

「さう言はれるとなんです、學校を出てからはずつとです。」

「それはしかし、人間の正しい生活ぢやありませんね、實に恐ろしいこつです。とは言つても、本當は何かをなすつたんでせう、何かを愛したんでせう、お友達はお持ちでせう。」

「いゝや。僕は正午に起きて、ここへ來て、晝飯を食べて、ビールを飲みます。それから晩までそのまゝ残つてゐて、夕飯を食べて、ビールを飲みます。そして夜中の一時頃に、自分の寢床へ歸つて行きます、ここがしまつちまふので。このしまつちまふのが何より僕には情ないんですよ。左様、この十年間に、僕は六年間をこのこの椅子で暮らしました。そしてあとの四年間をいつも同じ自分の寢床で暮らしました。僕は時々この常連と話します。」

「しかしバリへ來られた時、最初には何をなさいました？」

「カフエ・ド・メヂシへ敬意を表しましたよ。」

「その次ぎには？」

「その次ぎ？ 水を渡つて此處へ來ました。」

「なぜ、そんな面倒なことまでなされたんです？」

「どうしてです？ 誰だつてあのラテン區に一生涯はゐられませんかよ。學生達がむやみと騒ぎ

ますもの。しかし僕はもう動きませんよ。給仕、もう一杯。」

わたしはその時彼がわたしをからかつてゐるのだと思ひはじめたので、つゞけて言った。

「もういゝ加減で、打ち明けたらどうです。君は何か大きな悲みに出會つたのでせう、失戀でせう、きつと！ 君がひどい不幸な目に遭はれた方だつてことは一と目で分りますよ。一體君はおいくつです？」

「僕は三十ですが、少くとも四十五ぐらゐに見えます。」

わたしはまともに彼の顔を見た。その皺の寄つた恰好が、おまけになげやりにされてゐたので、まるで老人のやうな感じを與へた。頭のとつべんには、長い毛が五六本薄ぎたない皮膚からまつすぐに立つてゐた。睫毛は長く、口髭は太く、頬髯は濃かつた。と、ふとわたしは一種の幻を見た、なぜかは知らぬが、臭い水の——その頭につけられたやうな氣のする臭い水の——一ぱいに充ちた水盤の幻を。わたしは彼に言つた。

「實際、君は年よりふけて見えます。確かに何か大きな失望を経験されたに違ひない。」
彼は答へた。

「そんなことはありませんよ。僕がふけてゐるのは空氣を吸はないからです。カフェの空氣くらゐ人間の命をそこなふものはありませんからね。」

わたしはそれを信ずることが出来なかつた。

「でも君は、きつと結婚はされたでせう？ 澤山戀でもしなきやア君のやうにそんなに禿げる

筈がありません。」

彼は頭を掉つて、そのとつべんから垂れてゐたうしろの方の少しの毛を靡かせた。

「いや、僕はずつと童貞を守つて來ました。」

そして目を、わたし達の頭の上に釣りさげられてあるシャンデリアの方へあげながら、彼は言つた。

「もし僕が禿げてゐるなら、それはガスのせみです。ガスは髪の毛の敵ですからね。給仕、もう一杯。君も咽喉がかわきはしませんか？」

「いや、ありがたう。しかし君は確かに變つてゐる。一體いつから君はそんな氣になつたんです？ 君の生活は尋常ぢやありません、自然ぢやありません。何かその底にある。」

「さうです、これは僕の子供の時分からはじまつてゐるんです。僕はごく若かつた時にひどい打撃を受けました。それが僕の生活を暗黒にしてみましたので、これは死ぬまで續くでせう。」

「どうしてまたそんな事になつたのです？」

「君はそれを知りたいと思ふ？ さう、ちや、お話ししよう。君は僕が大きくなつた城のことは、勿論、覚えておいででせう？ 學校が休みの間五六ヶ月も來てゐられたことがあるんだから。君は大きな邸のまん中にあつた、あの大きな鼠色の建物を覚えてゐませう、櫛の長い竝木が四方に向つて開いてゐたのも！ 君は僕の父と母とを覚えてゐませう、二人共に儀式張つた、まじめな、厳格な人でした。」

「僕は母を崇拜してゐました。父には氣をおいてゐましたが、しかし二人を尊敬してゐました。二人の前では誰も彼もみんなおじぎするのをいつも見てゐましたから。あの地方では、二人は伯爵の殿さま、伯爵の奥さまでした。そしてあたりの者は、タンヌマアル家のものも、ラブレット家のものも、ブレンヌビル家のものも、二人に對して極度の遠慮をしてゐました。」

「僕はその時十三で、その年頃の誰でものやうに、幸福で、あらゆるものに満足して、嬉しく楽しく日を送つてゐました。」

「さう、あれは九月の末で、高等學校へはひる数日前のことでしたが、僕は邸の中の蜘蛛手の路をそちこちと歩きながら、樹にのぼつたり枝にぶらさがつたりしてゐるうちに、ふと父と母とが或竝木路を横ぎつて、一緒に歩いてゐるのを見ました。」

「僕はそれを昨日のことのやうに思ひ出します。それは風のひどい日でした。木といふ木は吹きしきる烈風の下に撓つて、叫びを——鈍い、が深い叫びを——發するやうに見えました。早くいふと森全體が烈風の下に唸つてゐました。」

「日が暮れかけて、繁みの中は暗くなりました。風と枝との激動に僕はすっかり興奮させられ、まるで阿呆のやうにはねまはつたり、狼の眞似をして哮えたりしてゐました。」

「が、兩親を見つけるや否や、僕はこつそりと二人の方へ、枝の下を這つて行きました。本當の狼が出て来たやうにして、二人をびつくりさせようと思つたのです。ところが不意に恐ろしくなつて、僕は二人から五六歩の所で足を止めました。父が何かひどく怒つて、嗚鳴つてゐました。」

「貴様の母親は馬鹿だ。のみならず、問題は貴様の母親でなくつて、貴様なんだ。わしはどうでも金があるんで、貴様にこれに署名せいと言つてゐるんだ。」

「母はきつぱりとした聲で答へました。」

「わたくしは署名いたしません。それはジャンの財産です。わたくしはあの子の爲にそれを守ります。あなたに、知らぬ女達と共につかはせはいたしません。あなたはあなた御自身の財産をお持ちぢやありませんか。」

「と父は、激怒して、くるつと身をかはすと母の喉を掴んで、そしてそのあいてゐる方の手で母の顔をまともに打ちはじめました。」

「母の帽子は飛び、髪はばらばらになつてうしろに垂れました。母は打撃を避けようと試みましたが、のがれることは出来ませんでした。父は、まるで狂人のやうに、むやみと打ちに打ちました。母は地上に轉がつて、兩手で顔を覆ひました。と父は、その上にもまだ打たうとして母を仰向けにすると、顔を覆うてゐた手を取りのけました。」

「僕は、君、世界が減びるのではないか、永遠の法則が變つたのではないか、と思ひました。僕は、人が超自然の物の前で、救ふことの出来ない災難の前で抱くやうな、おしつぶされるやうな恐れを覺えました。僕の幼い頭はぐらぐらして、ふはつとしました。僕は精一ぱいの聲をあげて泣き出しました。なぜかは知らず、恐ろしく、悲しくなつて、あわてうろたへてしまつたのです。父は僕の聲を聞くと、ぐるつと振り向いて、そして、僕を見ると、まるで飛びつきでもする

やうにしました。僕は父が僕を殺さうとするのだと思つたので、いきなり、狩り出された動物のやうに逃げ出して、一目散に森を目がけて駆け込みました。

「僕は多分一時間くらゐ走つたでせう、いや、恐らくは二時間くらゐだつたかも知れません。いつか眞暗になつてみました。僕は厚く生えてゐる草の上にぶつ倒れて、へと／＼になつて、意氣地なくそこに横はつたまゝ、たゞもう恐ろしさと、子供の心を永久に裂いてしまふやうな悲みとに身をまかしてゐました。そのうちに寒くなつて来ました。腹もへつて来ました。たうとう夜が明けました。けれども、僕は起きようとも、歩かうとも、家へ歸らうとも、また命を助からうとも思ひませんでした。二度と見たくなかつた父と逢ふのを恐れたのです。

「もし番兵が僕を見つけて無理に連れ歸らなかつたら、多分僕は苦しんで、餓ゑて、木の根で死んでしまつたでせう。

「僕はいつもと同じ様子をしてゐる両親を見ました。母親だけが僕に言ひました。

「『どんなにあなたはわたしを心配させたでせう、いけない坊ちゃんです、ね、わたしは夜ぢゆうちつとも眠りませんでしたよ。』

「僕は返辭はしないで、泣き出しました。父は一語も發しませんでした。

「それから八日後に僕は高等學校へはひりました。

「ね、君、これで僕の話はおしまひです。僕は物の裏面を、悪い方面を見てしまつたので、その日からといふもの、善い方面を認めることが出来なくなつたのです。どんな事が僕の心に起つ

たのか、どんな不思議な現象が僕の考へを歪めたのか、僕は知りません。が僕には、今はもう何事に對する趣味も、何物に對する望みも、何人に對する愛も、何事に對する欲望も、何の野心も、何の希望もありません。僕にはいつでも哀れた母が地上に、竝木路に横はつて、父がそれを虐待してゐる姿が目に見えて來ます。母はその後數年にして死にました。父は今もなほ生きてゐますが、以來僕は見たことがありません。給仕、もう一杯。」

給仕がビールを持つて來ると彼は一と息にそれを飲んだ。ところが、パイプをまた取り上げようとした時に、震へてゐたので、彼はそれをこはした。と彼は烈しい身振をした。

「畜生！ これこそ本當に悲みだ、本當の悲みだ。おれが一と月持つて、こんなにつやつやと光つてゐたのに！」

と彼は、今や煙と酒客とで一ぱいになつた廣い部屋を突つきつて行きながら、叫んだ。

給仕、もう一杯——と新らしいパイプ。」

山
小
屋

高アルプ州には、小さな木造の宿屋が、白い峰々を横断してゐる岩勝ちの裸な谷間の氷山の下に幾らも建てられてあるが、それらと同じやうに、シエワレンバッハの宿屋はゲンミイ山を越えようとする旅人に取つての避難所となつてゐる。

それは年に六ヶ月間開かれて、ジャン・ハウゼルの一家が住んでゐる。雪が降りはじめて谷を埋め、ロオエックへの下り道が通れなくなりさうになると、父親は、母親と娘と三人の息子とを連れて山を降つて、家は、年老いた道案内のガスバルド・ハリに、若い道案内のウルリッヒ・クンジとサムといふ大きな山育ちの犬とを附けて留守番をさせる。

二人の男と犬とは、目に入るものといつてはただ、きら／＼と照り輝く峰々に取り囲まれたパルムホルン山の廣大な白い傾斜の外には何物もない雪の牢獄の中に、春が来るまで残つてゐる。雪は周圍に降り積つて、小屋を包み、押しつけ、押しつぶし、屋根に積つて、窓に達し、入口を閉ざす。で、彼等は閉ぢ込められ、押し塞がれ、埋められてゐる。

冬が近づくにつれて、下りがだん／＼危険になり始めたので、ハウゼルの一家はいよいよロオエックへ歸るべき日となつた。

荷を着けた三頭の驢馬が、三人の息子に牽かれて最初に出發した。次ぎに母親のジャンヌ・ハウゼルと娘のルイゼとが第四の驢馬に乗つて出掛けた。

父親はその後から、下りの峠口まで家族を送りに立つた留守番の二人と連れ立つた。

一行は先づ小さな湖水の縁を通つた。それは宿屋の前に掛がつてゐる一團の岩の大きな空洞の底のはうで、今は一面に氷が張り詰めてゐた。一行は次に敷布のやうにざら／＼した谷間に入つた。両側には雪に覆はれた峰々が聳え立つてゐた。

太陽の光線は白く輝いてゐるこの小さな凍つた荒地にきら／＼と射して、冷たい眩しい焰でそれを照らしてゐた。生きた物といつては何一つこの小山の海の中に見えなかつた。この限りなき寂寥を動かすものは一物も無く、奥深い沈黙を擾す物音は何もなかつた。

脊の高い、足の長いスキス人である若い道案内のウルリッヒ・クンジは、次第に親父のハウゼルや年寄のガスバルド・ハリを後に残して、二人の女を乗せて行く驢馬に追付かうとした。

娘は彼の近づいて来るのを愁はしげな眼を擧げて呼ぼうとでもするやうに眺めてゐた。彼女は年の若い、髪の毛の明色な田舎娘であつた。その乳白の頬や蒼白い髪の毛は、長く氷の中に住んでゐたので其色を失つたやうに見えた。

ウルリッヒは娘を乗せて行く動物に追付くと、手を鞞こぶしの上に置いてその歩みを緩めた。母親のハウゼルは口を切つて、冬の間、彼の氣を付けねばならぬもろ／＼の事を細かに數へて話し出した。年寄のハリは、すでに十四冬もシユワレンバッハの宿屋で雪の中に暮らしたのだが、ウルリッヒがそこで送らうとする多はこれが初めてであつた。

ウルリッヒ・クンジはちつと耳を澄して聽いてはゐたが、解つてゐるらしくはなかつた。眼は絶えず娘のはうを見てゐた。始終、「はい、はい、」と答へてゐたが、考へは全く別の事に向いて

ゐると見えて、その沈んだ顔付は少しも動かなかつた。

彼等はドオブ湖に着いた。その廣い、凍つた湖の面はまつたひらに谷の口まで續いてゐた。右の方には、ウイルドストルウベル山の上を高く流れてゐるレエメルン氷河の大きな堆石の側に、ドオベンホルン山の黒い頂が更に高く聳えて見えた。

で、彼等がロオエックへの降り口になつてゐるゲンミイ山の頸部に近づいた時に、突然グレイのアルプスの大きな地平線が、ロオヌ河の廣い、深い谷を隔て、目に入った。

麓の方には、平たいのや、尖つたのや、不揃ひな一群の白い山の峰が日に輝いてゐた。それは、頂が二つになつてゐるミスチャベル山や、ウェイスホルンの大群山や、どツしりとしたブルネッダホルン山や、人殺しと云はれるモン・セルワンの高く聳えた恐ろしい尖塔や、恐ろしい妖婦にも比すべきダン・ブランシュなどであつた。

やがて下の方に、恐ろしい深淵の底のやうなところに、ロオエックが見えた。人家はまるで、一方はゲンミイ山の麓につづき、一方は下の方のロオヌの谷に開いてゐる大きな裂目の中に撒き散らされた砂粒のやうに見えた。

驢馬は路の下り口に留つた。うねりくねつて、間断なく折れたり戻つたりしてゐる不思議な驚くべき路は、峻しい山腹を縫つて、殆ど目に入らぬほどに小さな麓の村まで續いてゐる。女達は雪の上に飛び降りた。

二人の老人も一しよになつた。

「さあよ。」と父親のハウゼルは言った。「お別れだぞよ。ちやア來年まで達者でゐろよ。」

年寄のハりは答へた。

「ちやア來年まで。」

そして、二人は互に抱き合つた。次に、母親のハウゼルの番になつて、彼女はその頬を向けた。で娘もまたその通りにした。

ウルリッヒ・クンジの番になつた時に、彼はルイゼの耳に囁いた。

「山の人たちの事を忘れてはいけませんよ。」

で、彼女は答へた。

「え。」

低い聲だつたので、彼はその言葉を聞きはしなかつたが、その意味だけは察した。

「さあよ。左様ならだぞよ。」とジャン・ハウゼルは繰返した。「煩はぬやうにしろよ。」

そこで彼は二人の女の先に立つて下り始めた。

三人の妻は路の最初の曲り角でちきに見えなくなつた。

で、二人の男はシュワレンバッハの宿屋のはうへ歸りかけた。

二人は肩を並べて、話しもせず静かに歩いた。これで終つたのだ。これから四五ヶ月の間は

二人きりになるのである。

暫くすると、ガスバルド・ハりは去年の冬籠の時の事を話し出した。去年はミカエル・カノル

と一しよだつたが、彼はもう餘りに年が寄つたので、どんなことが長い冬籠の間に起らぬとも限らぬから今年には止めた。しかし、別段退屈するやうなことはなかつた。ただ大事なことは、初めにその覺悟をしてゐること、さうさへすれば、しまひには氣を紛らす事や、勝負事や、時間を潰す手段なぞがいろ／＼と見付けられる。

ウルリッヒ・クンジは目を俯向けて地上を見ながら聞いてゐたが、胸の中ではゲンミイの九折坂を通つて村の方へくだつて行つた人達のことを思つてゐた。

二人はちきに宿屋の見えるところへ來た。宿屋はやつと目についたくらゐに小さくて、雪の大波の裾の一つの黒點としか見えなかつた。

二人が戸を明けた時に、大きな捲毛の犬のサムは、二人の周圍をはねまはつた。

「さあ、さあ、」と年寄のガスバルドは言った。「もう女がゐねえから、おれたちは自分で飯の支度をしなけれやアならねえ。さあよ。じやがいの皮を剥いてくれろ。」

そして二人は木で造つた床几に腰を掛けて、パンをスウプに入れ始めた。

あくる朝は大變長いやうにクンジには思はれた。年寄のハりは爐傍で煙草をふかして唾を吐いてゐたが、若者は窓から、雪に覆はれた向ひの山を眺めてゐた。

午後になると、彼は外に出て、また昨日の道を歩きながら、二人の女を乗せて行つた驪馬の足跡を捜した。そしてゲンミイ山の頸部に着くと、斷崖に腹這ひになつてロオエックの方を眺めた。岩石の凹みにある村は、そのちき近くまでは白い大きな塊が來てゐたが、しかし、その村を守

る松林に支へられて、まだ雪に埋められてはゐなかつた。彼のゐる地點からは、低い人家がまるで大きな牧場の敷石のやうに見えた。

ハウゼルの娘は今、それらの灰色の家の一つに居るのである。どれだらうか？ ウルリッヒ・クンジのゐるところは餘りに遠く離れてゐたので、それらの家を別々に見分けることは出来なかつた。どんなに彼は、行けるところまで降りて行きたかつたことであらう！

ところが、太陽がウイルドストルウベル山の高い頂のうしろに没したので、若者は小屋に歸つた。年寄のハリはやはり煙草をふかしてゐたが、仲間の歸つて來たのを見ると、かるたをやらうと言ひ出した。二人はテーブルの兩側に向ひ合ひに坐つた。

彼等はプリスクといふ單純な勝負事をやつてから、夕飯を食べて床に入つた。

それから數日の間は、雪は降らなかつたが、初めの日のやうに晴れ渡つて寒かつた。年寄のガスバルドは、午後は毎日、鷲やその他の珍らしい鳥などが、それらの凍り切つた高地に來るのを見張つてゐたが、ウルリッヒはきまつてゲンミイ山の頸部へ村を眺めに行つた。夕方になると、二人はかるたや双六やドミノなどをやつた。そして、その勝負に興味を添へる爲に、僅ばかりの金を賭けて勝つたり負けたりした。

或朝、先きに起きたハリは仲間を呼んだ。深い、軽い、動いてゐる白い水煙の雲が、音もなく彼等の上や周圍に落ちて、次第に暗い濃い泡の覆ひで彼等を埋めてゐた。これが四日四晩續いた。そこで、戸や窓を自在に明くやうにしたり、道を掘つたり、この凍つた粉の上に足場を切つたり

しなければならなかつた。十二時間も氷結したので、雪は堆石の花崗石のやうに堅くなつてゐた。二人は囚人のやうに暮らしてゐて、敢て外へ出ようとはしなかつた。二人は仕事を分擔して規則正しくやつてゐた。ウルリッヒ・クンジは磨きものや洗ひものや、それから、すべて掃除に關することを受持つた。彼はまた薪をも割つた。ガスバルド・ハリは煮焚をしたり火の世話をしたりした。そして、このきまりきつた單調な仕事は、かるたや双六の長い勝負で時々破られた。が、二人は決して喧嘩をしなかつた。いつも靜かで穩かであつた。決して氣短になつたり機嫌を損ねたりもしなければ、また荒い言葉を使ふことすらなかつた。それは、この山の上で冬を過ごすといふことに對して何事も辛抱したからであつた。

時々、年寄のガスバルドはライフル銃を取つて羚羊を追つかけた。そして偶には射殺すこともあつた。すると、シユワレンバッハの宿屋では御馳走があつて、二人は新らしい肉で盛んな酒盛をした。

或朝、彼はいつものやうに出て行つた。外の寒暖計は氷點以下十八度を示してゐた。太陽はまだ昇らなかつたので、鐵師はウイルドストルウベル山の近くで動物の油斷してゐるところを襲はうと思つた。

一人きりになつたウルリッヒは、十時になるまで床の中にゐた。一體彼は眠がりのほうであつたが、いつもは、年寄の道案内が元氣がよくて、早起きなので、そのゐる前ではこんなにしうとはしなかつたのであつた。

彼は、これもまた晝も夜も爐の前に寝てばかり暮らしてゐるサムと一しよに、暇取つて朝飯を食へた。ところが、いかにも元氣が無くて、果ては獨りであるのが恐ろしいやうな氣がして來た。そして、毎日やるかるたの勝負を、ちやうど押へることの出來ない習慣の力で支配されてゐる人のやうに、どうでもかうでもやりたくなつた。

で、四時に歸る筈の仲間を迎へに出掛けた。

雪は深い谷をすつかり平らにし、割目を満たし、二つの湖水の形を全く塗り潰してしまひ、すべての岩を覆うてゐたので、高い頂と頂との間には、ただ大きな、白い、かつきりとした、凍つた面が閃々と輝いてゐる外には何もなかつた。

三週間の間ウルリッヒは村のはうを見おろす崖際に行かなかつたので、ワイルドストルウベル山へ行く傾斜を登る前に、先づそこへ行かうと思つた。ロオエックも今は雪に覆はれて、人家はまるで白い外套でも着たものゝごとく殆ど見分けることが出來なかつた。

右の方へ曲つて、ウルリッヒはレエメルン氷河に達した。彼は金具のついた杖を岩のやうに堅い雪に打ち込み打ち込み、山に住む人の大またな歩き振りで進んで行つた。その大きな白い擴がりの上に鋭い目を放つて、はるかに、小さく動いてゐる黒點を求めながら。

彼は氷河の端れに達した時に立止つて、老人が果してこの道へ來たか何うかと考へてから、急いだ不安な足取りで堆石の上を歩きはじめた。

日は暮れかゝつて來た。雪は蒼藍色を着け、乾いた、凍つた風はその結晶した面を荒い疾風と

なつて吹いた。ウルリッヒは、耳を貫くやうな顛へ聲を長くあげて呼んだ。その聲は山々の眠つてゐる死のやうな沈黙の中を走つて、宛も海の波濤の上の鳥の叫び聲のやうに、氷結した泡沫の奥深い不動な波濤の上を遠くまで擴がつて行つた。そして消え失せたが、彼に答へるものは何もなかつた。

彼はまた歩き出した。日はもう山の頂の向うに沈んで、その頂はまだ空からの反射で紫色をしてゐたが、谷の深いあたりは次第に灰色になつて來た。と彼は不意に恐ろしくなつた。沈黙、寒氣、寂寥、山々の冬の死といふやうなものが彼に取り憑いて、血の循環を止めて凍らし、四肢を硬ばらし、氷結して動かぬ物と化せしめてしまふやうに思はれたので、急いで住居のはうへ走り出した。彼は思つた。老人は自分の留守の間に歸つたであらう。多分別の道を取つたので、今頃はきつと、死んだ羚羊を足元に置いて、火にあたつてゐるであらうと。

彼はちぎりに宿屋の見えるところへ來たが、煙はのぼつてゐなかつた。ウルリッヒは一層急いで走つた。戸を明けると、いきなり嬉しげに飛び付いたサムには出會つたが、ガスバルド・ハリは歸つてゐなかつた。

タンジはぎよツとして急にあたりを見まはした。ちやうど、隅に隠れてゐる仲間を見付けることが出來るとでも思つたやうに。やがて、彼は火をつけてスウプをこしらへ、老人の歸つて來るのを今か今かと待つてゐた。

絶えず、もしやガスバルドが見えはせぬかと思つて外に出ても見た。今はもう夜となつた。ど

んよりとした山上の夜と、青白い夜と、鉛色の夜となつた。黄色た薄暗い新月は將に山の頂の向うに沈まんとして、かすかに地平線の端れでこの夜を照らしてゐた。

そこで若者は内に入つて手足を暖めながら、有り得べき様々な出来事を胸の中に描いて見た。ガスバルドは脚を挫いたのではあるまいか。割日の中に落ちたのではあるまいか。踏み外して踝を狂はしたのではあるまいか。多分雪の上に倒れてゐて、寒さに襲はれて身が硬ばつて行くところから、心の苦しさに堪へ切れないで、このしんとした夜中にもなほ力限りの聲を振りしぼつて助けを求めてゐるのであらう。

しかし、どこか？ この山は頗る廣漠としてゐて、高低があつて、殊にこの季節には危険の場所が多いので、その茫漠とした場所では一人の人を見付けるには、十人か二十人の道案内が、各方面に手を分けて一週間も歩きまはらなければならぬであらう。

けれども、ウルリッヒ・クンジは、もし朝の一時になつてもガスバルドが歸らなかつたならば、サムを連れて出掛けようと思つた。

そして彼は支度をした。

彼は二日分の食料を囊に入れ、攀登鐵を取出し、長い、細い、強い繩を腰の周圍に巻き付けて、さらに、金具の附いた杖や、氷に足場を切りつけるに必要な斧などが揃つてゐるかをも見て置いた。そこで、彼は待つた。火は爐に燃え、大きな火は輝く焔を浴びて薪をかいてゐた。そして時計はその響く木の函の中で、心臓の鼓動のやうに規則正しくかち／＼と鳴つてゐた。

彼は遠くの物音にも油断なく耳を澄して待つた。そして、微風が屋根や壁などに當る毎に顛へた。

十二時が打つと彼は身震ひした。で、恐ろしくなつて顛へてたまらないので、出掛ける前に熱いコーヒを飲まうと思つて湯を沸かした。

時計が一時を打つと立上つてサムを起し、戸を明けて、ウイルドストルウベル山の方へ向つて出掛けた。五時間の間、彼は登つた。攀登鐵で岩を攀ちたり、氷に足場を切りつけたりして、絶えず先きへ先きへと進んだ。そして時々、餘り嶮岨で犬に登れぬところなどは、傾斜の下の方には止まつてゐるのを繩で引張り上げたりした。六時頃、年寄のガスバルドがしば／＼羚羊を追うて来た頂の一つに達した。

彼は太陽の昇るのを待つた。

空は次第に上の方が白んで来た。と不意に、不思議な光がどこからとも知れず湧き出して来て、彼のまはりの數里に涉つて廣がつてゐる渺々たる海原のやうな蒼白い山々の頂を不意にばツと照らした。この漠然とした光は、空間に擴がる爲に雪の中から發して来たかのやうに見えた。次第に、一番高い、一番遠くの頂が柔らかな、肉のやうな蒼褐色を見せて、赤い太陽がどツしりとした巨人のやうなベルニイズ・アルプスのうしろから現はれた。

ウルリッヒ・クンジはまた出掛けた。獵師のやうに、何かの跡はないかと屈んで捜した。そして、犬には「爺さんを捜せ、よ、捜せ！」と言ひ言ひ歩きまはつた。

今度は山をくだつて行つた。深いところには特に氣を配つた。絶えず、高い、あとを引張つた叫び聲を擧げて呼びもしたが、それはおきに消えてしまつて、あとは寂とした廣漠に返つた。そこで、耳を地につけておつと聞き澄した。彼は聲音を聞き得たやうに思つたので、驅け出したがらまた叫んだ。が、もう何も聞えはしなかつたので、身は疲れ、望は失せて坐つてしまつた。眞晝に近くなつて、朝飯を食べた。そして、自分と同じやうに疲れてゐるサムにもまた食ふ物をやつた。

かくてまた搜索を始めた。

夕方になつても彼はなほ歩いてゐた。山の上をもう三十マイル以上も歩いたのであつた。家へ歸るには餘りに遠くもあるし、それに、この上身を曳きずつて行くには餘りに疲れてもゐたので、彼は雪に穴を掘つて、犬と一しよにその中に蹲まつて、持つて来た毛布を上を掛けた。人間と犬とは並んで横になつて、互に暖め合はうとしたが、それでも寒さは骨の髓まで通つた。

ウルリッヒは殆んど眠らなかつた。心は幻に附きまとはれ、手足は寒さに顫へてゐた。

夜が明けかゝつた時に彼は起き出でた。脚は鐵の棒のやうに硬く、元氣は失くなつて泣きたいほどだつた。そしてどき／＼してゐる心臓は、何か物音を聞いたやうに思ふと烈しく打つのであつた。

不意に彼は、自分もまたこの茫漠とした寂寥の中で、凍えて死なうとしてゐるのではないかと思つた。この死の恐怖が彼の氣力を恢復して、彼に新らしい元氣を與へた。

彼は宿屋の方へ向つて、轉んだり起きたりしながらおりて行つた。少しおくれて、サムは三本脚で跛をひき／＼ついて來た。

彼等がシエワレンバツハに着いた時は午後の四時を過ぎてゐた。家はからだつた。若者は火をおこして、何かを少し食べると寢てしまつた。もうさんさんに疲れ果てて、この上何事も考へられなかつたのである。

彼は長い間、實に長い間眠つた。それは何物も打ち勝つことの出來ない眠りであつた。ところが、不意に、『ウルリッヒ』と呼んだ聲音が、叫びが、名前が彼を深い眠りから呼び起して床の中に坐らせた。夢を見たのではなかつたか？ それは不安な心を抱いてゐる人々の夢を積るあの怪しい聲の一つではなかつたか？ 否、彼が聞いた震へた叫び聲はまだ反響しつゝある——それは耳から入つて身體の中に留まり——筋ばつた指の尖までも入つて行つた。確かに誰かが叫んだのだ。『ウルリッヒ！』と呼んだのだ。誰かがそこに、家の近くにゐたのだ。それに就いて何の疑ふ餘地もなかつた。で、彼は戸を明けて、『誰だ、ガスバルドぢやないか！』と咽喉一ぱいの方を籠めて叫んだ。

しかし何の答へも、何の呟きも、何の呻きも、何もなかつた。外は眞暗で雪が青白く見えた。風が吹き出した。その氷のやうな風は岩をひび入らしたり、荒涼としたそれらの高地に生きたものを一つも残さなかつたりするものである。それが不意に烈しく吹き出して來た。沙漠の燃えるやうな風よりも一層乾いてゐて一層命をそこなふものだつた。ウルリッヒはまた叫んだ。『ガ

「スバルド！ ガスバルド！ ガスバルド！」

そしてまた暫く待つて見た。すべてのものは山の上にしんとしてゐた！ すると、彼は恐怖で顫へて家の中へ飛び込んだ。戸を締めて栓を挿すと、全身を顫はしながら椅子に腰を落した。それは、仲間が最後の息を引取らうとした瞬間に彼を呼んだと確かに感じたからである。

彼がそれを確かに感じたのは人が自分の生きてゐることを確かに感じたか、また、物を食べる時にその味ひを確かに感じたか、如くであつた。年寄のガスバルド・ハリは二日三晩の間、どこかで、穴の中か、人跡のまだ到らぬ深い谷か、とにかくその眞白なのは地の下の眞暗なのよりも一層氣味の悪いところで死にさうになつてゐた。二日三晩の間死にさうになつてゐて、ちやうど今、仲間の事を思ひながら息を引取つた。その魂が肉體を離れるとすぐに、ウルリッヒが眠つてゐる宿屋に飛んで来て、死人の霊が持つてゐる、生きてゐる人々と通ふ恐ろしい神祕な力で彼を呼んだのだ。その際の無い魂が眠つてゐる人の疲れ果てた魂に向つて叫んだのだ。それは最後の暇乞か、でなければ、十分に氣を付けて捜さなかつたのを責め呪つたのであつた。

で、ウルリッヒは魂がそこに、おき傍に、壁の向うに、今締めた戸の向うにゐるやうな氣がした。それはちやうど夜の鳥が、明りのついた窓を翼で掠めて行くやうに、ふわりふわりとさまよつてゐるやうであつた。で、若者は夢中になつて、恐ろしさの餘り叫び出さうとした。彼は逃げ出したいと思つたが、しかし外へは敢て出なかつた。敢て出なかつた。これから先きも決して出まいと思つた。それは、老案内人の身體が見つけ出されて墓場の聖い土に葬られないうちは、そ

の亡霊が、晝も夜も、宿屋の周圍に留まつてゐるであらうから。

夜が明けると、太陽がまたきらくと輝いて來たので、クンジは多少の勇氣を恢復した。彼は自分の食事をととのへ、犬にも食ふ物をやつた。そして雪の上に倒れてゐる爺さんのことを考へては胸を傷めながら、椅子の上におつと身動きもせずゐた。

やがて、夜がまた山々を包むと、新しい恐怖が彼を襲うた。彼は一本の蠟燭の焰で微かに照らされてゐる暗い厨の中を行つたり來たりしてゐた。前夜の恐ろしい叫び聲が、また外の恐ろしい沈黙を破りはせぬかとちつと耳を澄しながら、端から端へと大股に歩いてゐた。彼は今まで嘗て何人もただ一人であつた事になかつたやうに、ただ一人であつた自分をつくづく不幸な身と感じた！ この荒涼とした雪の高原にただ一人！ 人の住んでゐる土地や、人間の住家や、かの忙しい、騒がしい、胸の躍る生活などから五千フィートも離れた上にただ一人！ 凍つた空にただ一人！ 考へて來ると、氣も狂はしくなつて、どこへでも構はずに逃げ出したくなり、一思ひに絶壁に身を投げるやうにしてロオエックへ落ちて行きたくなつたりした。が、彼は思ひ切つて戸を明け、ことすらしなかつた。今一人の死んだ男が、獨りでそこに留まるやうにさせられまいと、彼の行く手を塞ぐであらうと思つたからである。

眞夜中近くになると、彼は歩き疲れて、悲しいやら恐ろしいやらでも疲れ果て、椅子に腰を掛けたままとくくと眠つた。彼は自分の寢床を、人が幽霊の出る場所を怖がるやうに怖がつてゐたのである。

ところが不意に、前夜と同じきい／＼といふ叫び聲が鋭く彼の耳を貫いた。で、ウルリッヒは両手を擡げてその亡霊を追拂はうとした。と忽ち、椅子と共にうしろへ引繰り返つた。

サムはこの物音に目を覺まして、おびえた犬が咆えるやうに咆え始めた。そしてどこから危険が来たのかを見出さうとするやうに家の中をぐる／＼歩きまはつた。戸口まで行くと、彼はその下に鼻をつけて烈しく嗅ぎまはしながら、手を逆立て、尾を硬くして、怒つて唸り立てた。

クンジは恐ろしくなつて起き上ると、椅子の脚を握つて、『入つて来るんぢやない。入つて来るんぢやない。入つて来ると殺すぞ。』と叫んだ。すると犬はこの嚇かしに勵まされて、主人の聲を物ともしないやうなその目に見えぬ敵に向つて怒つて咆えた。

が、次第に靜かになつて戻つて来ると、火の前に長々と身を伸ばした。が、まだ安心しきらないで、頭を擧げて齒の間で唸つてゐた。

ウルリッヒもまた正氣に復つたが、彼は恐怖で元氣の衰へたことを感じたので、立つて行つて脇棚からブランディの樽を取つて續けさまにがぶりがぶりと五六ばい飲んだ。頭がぼんやりして勇氣は恢復し、熱病のやうな灼熱が血管を通つて走つた。

その次の日は殆んど何にも食はずに酒ばかり飲んだ。さうして五六日の間は酔つた獸のやうになつて暮らした。彼はガスバルド・ハリのことを思ひ出すと直ぐにまた飲み始めた。そして泥酔して床の上に倒れるまで飲みつづけた。そしてそこにそのまゝうつむけになつて、死んだやうに酔つて、手足は痺れたまゝで、床に顔を付けて鼻をかきながら倒れてゐた。けれども、この氣を

狂はせるやうな、燃えるやうな飲料がやつと消化してしまつたと思ふと、忽ちまた『ウルリッヒ』と呼ぶ同じ叫び聲が、頭腦を貫通する弾丸のやうに彼を呼び覺した。で、彼はまだひよろひよろしながら、倒れまいとするやうに両手を擡げて起き上ると、サムに助けを求めた。すると、主人と同じく氣が狂つて行くやうに見えた犬は、戸口に飛んで行つて、それを爪で引掻いたり長い白い齒で噛んだりした。一方ではまた、若者が首を仰向けて頭を空にし、まるで冷たい水かなぞのやうにがぶ／＼とブランディを飲んで、思想や、物狂はしい恐怖や記憶やをやがてまた眠らせようとした。

三週間の間に、彼は貯へて置いた強い火酒をみんな飲み盡した。ところが、彼が絶えず酔つてゐたのはただ恐怖を鎮めたばかりだつたので、酔つてそれを鎮めることが出来なくなつたと思ふと、忽ちまた恐怖は今までより一層烈しくなつた。彼の強迫観念は、泥酔の一ヶ月で強くされたり、全くの孤獨で絶えず度を増したりして、錐のやうに鋭く彼を突き刺した。今や彼は檻に入れられた野獸のやうに家の中を歩きまはつて、時々耳を戸に附けて奴がそこにゐはしないかと聞き澄したり、壁越しに戦を挑んだりした。

やがて、疲れ果て、まどろんだかと思ふと、忽ち彼はいつもの聲を聞いて飛びあかつた。

たうとう或晩、臆病者が極端まで追ひ詰められた時にするやうに、彼は戸口へ飛び出してそれを明けた。そして自分を呼んでゐる奴を見て靜かにさせようとした。

ところが、骨まで凍らせるやうな冷たい風がさつと彼の顔に吹き付けた。で、サムが飛び出し

たのには気が附かず、彼はちぎまた戸を締めて栓を挿した。そこで、寒さに顫へながら、火に薪を足して暖まらうとその前に坐つた。ところが不意に彼は飛び上がった。誰かが壁を掴きながら叫んでゐたからである。

死物狂ひになつて彼は、「うせろ！」と叫んで見たが、答へたものはただ長い悲しげな啼き聲ばかりであつた。

そこで、残つてゐたすべての正氣も、全くの恐ろしさから彼を見捨てた。彼は、「うせろ！」とまた繰返して、どこかに隠れる隙はないかと思はした。外ではまた他の奴が、やはり啼きながら、そして壁に身をこすりつけながら家をまはつて歩いた。ウルリッヒは皿や鉢や食料品などで一ぱいになつてゐる櫛の脇棚の傍へ行つた。そしてそれを人間業とは思へぬ力で持上げると、堡障でも造らうとするやうに戸口へ引きずつて行つた。次には、臥褥や、藥褥や、椅子や、その他一切の家具を積み上げて、人が敵に襲はれた時にするやうに窓をみんな塞いでしまつた。

ところが、外の奴は、今度は長い、哀れな、悲しげな唸り聲を發したので、若者はそれに同じ唸り聲で答へた。

かくして數日數夜、互に咆えることを止めずに過ぎた。一方は絶えず家の周圍をまはつて、爪で壁を、まるで破壊しようとしてゐるかと思はれるほど強く抓いた。すると内ではまた外の者のすべての動作につれて、身を屈めたり、耳を壁に附けたり、訴へるすべての聲に恐ろしい叫び聲で答へたりした。ところが、或晩ウルリッヒはふと何物をも聞かなかつた。で、彼は坐ると、非

常に疲れてゐたので、すぐに眠つてしまつた。

朝になつて目が覺めたが、その時はもう、ちやうど彼の頭が重い眠りの間に空虚にされたもののやうに、何の考へもなければ、起つたことについての何の記憶もなかつた。ただ彼は腹がすいてゐたので物を食べた。

冬が過ぎて、ゲンミイ山の山越えがまた出来るやうになつたので、ハウゼルの一家は宿屋に歸らうと出立した。

彼等が峠の頂まで着くと、女達は驪馬に乗つて、おきにまた逢へようといふ二人の男のことを話し合つた。

實は、もう二三日前から道が通れるやうになつたのに、長い冬籠りの間のことを話しに誰も山を降りて来なかつたのを彼等は不審に思つてゐた。

が、たうとう彼等は宿屋を見た。まだ雪に覆はれて蒲團のやうな姿をしてゐた。戸も窓も締めてはあつたが、細々とした煙が屋根からのぼつてゐたので、親父のハウゼルは安心した。

ところが戸口まで近づいて行つた時に、彼はその傍に横たはつてゐる大きな骸骨を、驚のためにさん／＼に啄き裂かれた動物の骸骨を見た。

一同は近く寄つてそれを見た。

「これはきつとサムだよ。」と、母親が言つた。それから彼女は叫んだ。「おうい！ ガスバル

ドや！」

家の中から叫び聲が彼女に答へた。何かの獣が發したとしか思へぬやうな鋭い叫び聲だつた。「おうい！ ガスバルドや！」と親父のハウゼルが繰返した。と、彼等はまた初めと同じ叫び聲を聞いた。

そこで、父親と二人の息子の三人の男は、戸を明けようとしたが、なか／＼明かなかつた。で、からつぽの牛小屋から梁を取つて破城槌の代りとして、それを一同が全力を籠めて戸に打ち付けた。木は音を立てて毀れ板は木葉微塵に飛び散つた。その時、家は高い聲で震へ渡つた。と、内には、顛覆してゐる脇棚の向うに、一人の男が突ツ立つてゐた。髪は肩まで垂れ、髯は胸まで伸び、眼はきら／＼と光つて身體はぼろに包まれてゐた。

一同は彼を誰とも分らなかつたが、ルイゼ・ハウゼルが聲を上げて、「お母さん、ウルリッヒだよ。」と言つた。で、母親も、髪は白くなつてゐるが、ウルリッヒに違ひないと言つた。

彼はみんなが傍へ寄つて、身體に手を掛けても、人のする儘に任してゐたが、何を尋ねても答へなかつた。で、餘儀なくロオエックへ連れ歸つて醫者に診せると、氣が狂つてゐたのであつた。爺さんが何うなつたかは遂に誰も知ることが出来なかつた。

娘のハウゼルは、その夏身體が次第に衰弱して殆ど死にさうになつた。醫者はそれを山上の空氣の寒いせゐだと言つた。

二十五フランの金

おゝ！ 確かに、パギー親爺は、そのひよろ長い、蜘蛛みたいな脚と小さな胴と、長い腕とてつべんに煽みたいな赤い毛のびろ／＼生えた尖つた頭をしてゐて、頗る剽軽に見えた。

彼は道化役者で、生れながらに百姓の道化役者で、手先の藝當をしたり、笑はせたり、役を、と言つても百姓の伴で、自分も百姓であつただけに、殆ど讀むことが出来なかつたので、簡単な役を演じたりする爲に生れて來たのだつた。さうだ！ 神さまが確かに他の者らを、劇場をも、さかり場をも持つてゐない哀れな田舎の人達を樂しませる爲に彼を造つたので、彼もまた神妙に彼等を樂しました。カフェで、人々が彼をそこにゐさせるために飲ませてやると、彼はたらふく呷りながら、笑つたり、ふざけたり、誰をも怒らせずにうまくみんなをだましたりした。と、人は彼のまはりで心から笑つてゐた。

彼がいかにもおどけてゐたので、娘達もまた、彼が醜くはあつたけれど、つい笑はされるので振りまわることが出来なかつた。彼はふざけながら娘たちを塀の蔭や、窪地の中や、牛小屋の中に連れこんで、つひにはみんなが腹を抱へて、彼を突き飛ばさずにはゐられないやうな可笑しな事を言つて揶つたり、抱きしめたりした。それから跳ねたり、首でもくくりたいやうな顔をしたので、娘たちは身體をよぢつて涙を流した。彼は時を見計つて、不意にうまくとんぼがへりをさせてやつたので、おほせいがやつて來たが、中には面白がつて挑みかゝる娘さへあつた。

六月の末近く、彼はルギーユ在の農家ル・アリウオ家に收穫で雇はれてゐた。まる三週間の間、彼はその滑稽で、晝も夜も、男や女の刈取人を樂しませた。晝の間、野に出てゐた時は、かぶつ

た古い麥藁帽にその赤いもちやん、の頭を隠して、そしてさりげなく黄色い麥の穂を拾つてはそれを長い、瘦せた腕で東にまわけてみたが、と、不意に立ち止ると、滑稽な身振をして、いつでも彼に目をつけてゐる農夫達をその野良ちうで笑はした。夜は、這ひ歩く何かの動物のやうに、女達の寝てゐる納屋の藁の中を這ひ歩いて、兩手で探つてはきやつきやと言はせたり騒ぎを起させたりした。そして女達の木靴で追ひ立てられると、變ちきりんな猿のやうに、四つん這ひになつて、その場所全體から起る刺れるやうな笑ひ聲の中を逃げた。

最後の日に、リボンをつけて風笛を吹いてゐるものもあれば、叫びと小唄と、楽しさと酒とで有頂天にはしやいでゐるものもある刈取人達で一ぱいな荷馬車が、白い、本街道を、帽子に薔薇の徽章をつけた、仕事着を清た若者に御された六頭の連錢茶毛の馬にのろ／＼と曳かれて進んで行つた時に、パギーユは、寝そべつてゐる女達の中で、まるで酔つぱらつた牛獸人みたいに踊つて、汚い顔をした子供達や野良の群でぼかんと口をあけて、彼を見てゐるきよとんとした百姓達やを引きとめてゐた。

が、彼等がル・アリグオ家の場庭の入口まで来た時に、不意に、彼は兩腕を高くあげてひらりと飛んだ。ところが不幸にも落ちる時に、長い荷馬車のへりにあたつて、その上でもんどり打つと、車輪の上に倒れて、そして道にはね返つた。

一しよにゐた者達は飛び出したが、彼は動かかなかつた。一方の目は閉ぢ、一方は明いて、そしておびえて青くなつてゐた。其の長い手足は埃の中に投げ出されてゐた。

が、彼等がその右の脚はさはるや否や、彼はきいきい叫びはじめた。そして彼等が彼を立たせようとすると、すぐまた倒れた。

「脚が一本掘けてるやうだぜ」と一人の男が言つた。

實際、脚が一本くちけてゐた。で、ル・アリグオは彼をテーブルの上に寝かしておいて、一人の男を馬でルーギーユへ醫者を迎へにやつた。醫者は一時間後に来た。

この農夫が、その男の病院でかゝる費用をみんな出してやらうと鷹揚に受合つた。

で、醫者はパギーユを自分の馬車で病院へ連れて行つて、野呂達の病室へ入れた。挫けた骨はそこでつがれた。

生命に別條のなかつたことと、寢床に仰向けに寝てさへみれば何にもしないでも、世話をして、いたはつて、癒して、そして食べさせてくれることを知るや否や、パギーユは限りなく喜んで、そして聲は立てずに止め度もなく笑ひ出した、たうとうその蟲歯までも現はして。

看護婦の一人が寢臺のそばに来る度毎に、彼は顔に満足の様子を見せて、目ばたきしたり、口を引き歪めたり、至つて長くてよく動く鼻を動かしたりした。病室で隣り合つた者達は、彼等も病氣であつたけれど、笑はずにはゐられなかつた。尼院長もまたしばしば枕邊へ来て、十五分間づゝ興じ樂しんだ。彼は彼女の爲めにゐるんなじやうだんや話を工夫したり、また旅役者ぐらゐの技倆は自分に持つてゐたので、彼女の氣に入るためには殊勝に身を振舞つて、時と場合でじやうだんの釣合はないことを知つてゐる人のあの生まじめな態度で宗教のことを話したりした。

或日、彼は思ひついて彼女に歌つて聞かせた。と彼女は喜んで、なほしげくと彼を見に来た。やがて彼女は、彼の聲を利用しようとして讚美歌集を持つて来た。と、やつと動くことが出来るやうになりはじめた彼が、床の上に起きあがつて、全能の神や聖母マリアや聖靈の讚美を、無理に出す金切聲で歌つてゐるのが見られた。彼のわきには深切な、肥つた看護婦が立つて指で拍子を取つてゐた。彼が歩かれるやうになつた時に、尼院長は彼に今しばらくの間留つて、禮拜堂で歌つたり、ミサを勤めたり、聖器監守人の代りをしたりしてくれるやうにと言ひ出した。彼は承知した。そしてまる一月の間、白い法衣を着けて、鼓ひきく、讚美歌や應答歌やを歌つてゐたが、その頭のふり方がいかにもよかつた爲に、眞の信徒の数が殖えたり、教區の教會を缺席してまで病院の晩拜式に出る人々があつたりした。

しかし、どんな事でもこの世では終らなければならぬやうに、彼がすっかり癒つてしまふと、彼等も手ばなさない譯には行かなかつた。で、尼院長は彼に二十五フランの金を與へてその骨折に報いた。

バギーユはその金をみんなポケットに入れたまゝ、街に出るや否や、さてどうしようかと考へた。村へ歸らうか？ が、それにしても、久しく有りつかなかつたのだから、先づ一ばいやつたあとでと、彼は或カフェへはひつた。年に二三回しか町へは出て來なかつたが、かつて一度、さうして出て來た時に大に飲んで、前後不覺に酔つぱらつたおぼえがあつた。

で先づ上等のブランデーを一ばい取つて、一と息にぐつと叩つて喉をしめしてから、どんな味

かを見るために二杯目を飲んだ。

が、強い、火のやうなブランデーが上顎と舌とに觸れて、彼が好きで、熱望してゐたものを感じ、口を撫で、刺し、焼くあの感じを、いつもより一層強く目覺ますや否や、彼は一本そつくら飲めると知つた。と、すぐに自分の散財を少くしようと思つて、その値段がいくらするかを訊いた。三フランだと言はれて、彼はそれを拂つてから、しづかに飲みはじめた。

けれども、他の快樂を取るのにしらふでみたいともまた思つてゐたので、それをばちびりくと飲んだ。そして、自分を迎へる爐邊を見たいといふ氣になるや否や、立ちあがつて、ふらふらとした足取で、腕の下に纏を抱へながら、じだらくな女達のゐる家を探しに出かけた。

彼はそれを見つけるまでにずぶん苦勞した。最初尋ねた荷馬車屋は、全く知らなかつた。郵便脚夫は、間違つた方向を教へた。パン屋は、彼を色きちがひだと言つて悪口をつきはじめた。やつと最後に、兵士が、深切にも彼をそこまで連れて行つて、『女王』を運ぶやうにとまで勧めてくれた。

それはまつびる間の十二時頃であつたけれど、バギーユは頼着せずにその歡樂の宮へはひつて行つた。と、一人の女中に迎へられたが、彼女はすぐまた彼を追ひ返さうとした。が彼はしかめ顔をして彼女を笑はせた上、その場所の特別な遊興費ときまつてゐる三フランの金を彼女に見せて、そしてやつと彼女のあとから暗い階段をのぼつて、二階へ行つた。

或部屋に案内されると、彼は『女王』を頼んでおいて、そして、纏からまた飲みながら待つて

みた。

ところが、程なく戸があいて一人の女がはひつてきた。背の高い、肥つた、赤ら顔の——でつかい女だつた。彼女はかういふ場合の鑑定人のやうな目をして、坐り込んでゐる酔つぱらひをおつと見ながら言つた。

「あんたは、こんなまつびる間に來て恥かしくありませんか？」

「恥かしいつて、何がだね、王女さん？」と彼はへどもどした。

「何がつて、婦人の邪魔をすることがですよ、御飯を食べる時間だつてないぢやありませんか。」

と、彼はからかひたくなつた。

「時間なんていふそんなものは、勇士にはねえんだ。」

「なら酔つぱらふ時間だつてない筈ぢやないか、づぶ六ぢいさん。」

バギーユはむつとした。

「何がづぶ六だ。おれは酔つてはゐねえぞ。」

「酔つてゐない？」

「うむ、酔つてゐねえ。」

「酔つてゐない？ 何だ、まつすぐには立てもしない癖に。」

彼女は怒つて彼を見ながら、ちやうど今頃仲間の者達は食事をしてゐる眞最中だと考へてみた。

彼は立ちあがつた。

「おれは……おれはボルカだつて踊れるんだ。」

そして、しゃんとしてゐるのを見せる爲に椅子へのぼると、爪先でくるつとまはつて、ひよいと寝臺の上へ飛んだ。と、そこへ彼の厚い、泥だらけの靴が二つの大きな痕をつけた。

「あら！ よごしたな、畜生！」と女は叫んだ。

そして彼に飛びかゝると、いきなり拳を固めて彼の腹部をなぐりつけた。と、いかにもそれがひどかつたので、バギーユは中心を失つて、倒れて、寝臺の裾の方にぶつつかつて、そして手水臺の上へまつさかさまにもんどり打つと、水差や水鉢を一しよに引きずりながら、喚き聲をあげて、下にころがり落ちた。

その物音がいかにも高く、彼の叫びがいかにも鋭かつたので、家ぢりの者がみんな駆け込んで來た、主人も、主婦も、女中も、そこに巢を食つてゐる女達一同も。

主人が彼を抱き起したが、獨りで立たせるや否や、バギーユはまた中心を失つて、そして彼の脚が、別の脚が、丈夫な方が、挫けたと叫び出した。

それは本當だつたので、醫者が呼ばれた。ところが、それがまた偶然にもル・アリヴオ家で彼を診たのと同じ人だつた。

「何だ！ またお前さんか？」と彼は言つた。

「左様で。」

『一體どうしたんだ？』

『人がおらの別の脚を挫いたんで。』

『誰がしたんだ、え？』

『へえ、あまつ子で。』

みんなは聴いてゐた。寢間着姿の女達は、食事半ばで来たのでまだ脂だらけの口をしながら、その家の主婦はぶり／＼しながら、主人は心配しながら。

『こいつはまづい事になるね、』と醫者は言つた。『其筋では君がたをいゝ目で見てゐないんだからな、こいつは黙つてゐさせることにしなければいけません。』

『と申しますと、どう致せばいゝんで？』と主人が訊いた。

『まあ一番いゝのは、あの男がさつき出て来た病院へ送り戻して、そして費用を持つてやるんだね。』

『いつそさうしませうや、』と主人は答へた。『こんな事でくだらん騒ぎなんぞするよりは。』

そこで半時間後に、バギーニは酔つて、唸りながら、一時間前に出て来た病室へまた歸つて行つた。

尼院長は彼が好きだつたので、悲しんで手をあげて祈ると共に、彼が歸つて来たのを喜んで、につこりした。

『おゝ、お前さん、今度はどうなすつたの？』

『別の脚が挫けたんで。』

『ではまた積薬の上に乗つかつてゐたんですの？』

と、バギーニは、ひどく困つたが、でも、ごまかして、ためらひながら言つた。

『いや……いや……いや……今度はずうぢやねえんで……いや……今度はずうぢやねえんで……』

……いや……いや……おらが過ちぢやねえんで……蒲團のせゐなんで。』

彼女は他の説明は何にも彼から聞くことが出来なかつたので、彼の逆戻りが彼女の二十五フラインの爲だつたとは遂に知らなかつた。

精文波岩
878

昭和八年二月十日發行

行調

定價二十錢

(永井製本)

譯者 前田 晁

發行者 岩波 茂雄

印刷者 白井 赫太郎

東京市神田區一ツ橋通町三番地
東京市神田區錦町三丁目十七番地

精興社印

發行所

東京市神田區一ツ橋通町三番地

岩波書店

電話 〇〇一八七〇
九段 〇〇三三番
小賣部 〇〇一八八〇番
櫻井口 東京二六二四番
專用

讀書子に寄す

岩波文庫發行に際して

岩波茂雄

其理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き文字に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進歩的な民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生れた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に際なく立たしめ民衆に依せしめるであらう。近時大量生産節約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽す可憐なる全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の編譯企圖に敢ての態度を讀みかざりしか。更に分賣を許さず讀者を驚愕して數十冊を強ふるが如き、果して其掲げる學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推挙するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責任の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計画を慎重審議の點點然實行することにした。吾人は能をかのレクラム文庫にとり、古今東西に反つて文藝哲學科學自然科學等種別の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を擇んで簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に必要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は預約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外服を顧みざるも内容に至つては嚴選最良の力を盡し從來の岩波出版物の特色を益々發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は精力を傾けしめあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果たしめんと期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の共望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀者子とのうらはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

國文學

- 萬葉集 上卷 佐佐木信綱編
- 萬葉集 下卷 佐佐木信綱編
- 萬葉集 上卷 佐佐木信綱編
- 萬葉集 下卷 佐佐木信綱編
- 古事記 記 田代友成訂
- 日本書紀 上卷 藤原美雄訂
- 日本書紀 中卷 藤原美雄訂
- 古語拾遺 加藤玄智訂
- 水鏡 和田英松訂
- 大鏡 和田英松訂
- 源氏物語 上卷 三枝四方正統訂
- 源氏物語 中卷 三枝四方正統訂
- 源氏物語 下卷 三枝四方正統訂
- 伊勢物語 尾代私置校訂

- 竹取物語 附録 藤原久基校訂
- 平家物語 上卷 山田孝雄校訂
- 平家物語 下卷 山田孝雄校訂
- 源氏物語 (一) 藤原久基校訂
- 源氏物語 (二) 藤原久基校訂
- 源氏物語 (三) 藤原久基校訂
- 源氏物語 (四) 藤原久基校訂
- 土佐日記 池田龜太郎校訂
- 紫式部日記 池田龜太郎校訂
- 更級日記 池田龜太郎校訂
- 枕草子 (春明抄) 上卷 池田龜太郎校訂
- 枕草子 (春明抄) 中卷 池田龜太郎校訂
- 倭漢朗詠集 山田孝雄校訂
- 古今和歌集 尾上八郎校訂
- 新古今和歌集 佐佐木信綱校訂
- 新古今和歌集 佐佐木信綱校訂
- 金枕和歌集 佐佐木信綱校訂

- 藤原定家 實業家 佐佐木信綱校訂
- 法華義疏 上卷 藤原久基校訂
- 法華義疏 下卷 藤原久基校訂
- 正法眼藏隨聞記 和比行校訂
- 日蓮上人抄 藤原久基校訂
- 徒然草 實業家校訂
- 方丈記 山田孝雄校訂
- 花傳書 阿部野矢校訂
- 申樂談 義野上校訂
- 入木道三 實業家校訂
- 奥の細道 伊藤野矢校訂
- 芭蕉七部集 伊藤野矢校訂
- 芭蕉連句集 小宮豊隆編
- 芭蕉俳句集 伊藤野矢校訂
- 芭蕉七部集 伊藤野矢校訂
- 風俗文選 伊藤野矢校訂

外国文学(小説・戯曲・詩)

杜 詩卷之一 櫻山又四郎譯註
杜 詩卷之二 櫻山又四郎譯註
杜 詩卷之三 櫻山又四郎譯註
杜 詩卷之四 櫻山又四郎譯註
陶淵明集 櫻山又四郎譯註
唐詩選 上巻 櫻山又四郎譯註
唐詩選 下巻 櫻山又四郎譯註
通俗古今奇觀 櫻山又四郎譯註
即興詩人 上巻 櫻山又四郎譯註
即興詩人 下巻 櫻山又四郎譯註
ブランドン ドイブセン 櫻山又四郎譯註
幽霊 小宮豊隆譯註
稲妻 小宮豊隆譯註
父令嬢ニリ エスリントベカ作
オネーギン ブーシュキン作

イワシニイワシキツチゴリゴリ作
モウチとが喧嘩をした話 久一郎譯
檢察官 米川正夫譯
現代のヒーロー 中村白雲譯
皇帝フォードル 中村白雲譯
ブウニンとパブリック 小沼 暉譯
罪と罰 第一巻 中村白雲譯
罪と罰 第二巻 中村白雲譯
罪と罰 第三巻 中村白雲譯
罪と罰 第四巻 中村白雲譯
兄弟 第一巻 米川正夫譯
兄弟 第二巻 米川正夫譯
兄弟 第三巻 米川正夫譯
兄弟 第四巻 米川正夫譯
貧しき人々 久一郎譯
永遠の良人 久一郎譯
戦争と平和 第一巻 米川正夫譯
戦争と平和 第二巻 米川正夫譯
戦争と平和 第三巻 米川正夫譯

戦争と平和 第三巻 米川正夫譯
戦争と平和 第四巻 米川正夫譯
戦争と平和 第五巻 米川正夫譯
結婚の幸福 米川正夫譯
光あるうちに光 米川正夫譯
クロイツェル・ソナタ 米川正夫譯
復活 上巻 中村白雲譯
復活 中巻 中村白雲譯
復活 下巻 中村白雲譯
力 中村白雲譯
生ける屍 米川正夫譯
幼年時代 米川正夫譯
少年時代 米川正夫譯
人は何で生きるか 中村白雲譯
トルストイ民話集 中村白雲譯
イワシの馬鹿 中村白雲譯

櫻の園 米川正夫譯
伯父ワニーニヤ 米川正夫譯
三人姉妹 米川正夫譯
サーニン 上巻 中村白雲譯
サーニン 下巻 中村白雲譯
賢者ナータン 大塚米吉譯
ヘルマンとドロテア 佐藤 暉譯
キルヘルム 佐藤 暉譯
マイスター 佐藤 暉譯
フアウスト 第一巻 佐藤 暉譯
フアウスト 第二巻 佐藤 暉譯
フアウスト 第三巻 佐藤 暉譯
若いエルの悩み 佐藤 暉譯
ブレンジニタイン 佐藤 暉譯
ダイヤルヘルム・ネー 佐藤 暉譯
全ダリム電話集 第一巻 金田鬼一譯
全ダリム電話集 第二巻 金田鬼一譯

全ダリム電話集 第三巻 金田鬼一譯
全ダリム電話集 第四巻 金田鬼一譯
全ダリム電話集 第五巻 金田鬼一譯
全ダリム電話集 第六巻 金田鬼一譯
全ダリム電話集 第七巻 金田鬼一譯
ゲエテの對話抄 佐藤 暉譯
春の日ざめ 野上 豊一譯
理 未 野上 豊一譯
トオマス・マン 佐藤 暉譯
トオマス・マン 佐藤 暉譯
祖 佐藤 暉譯
みれん 佐藤 暉譯
アナトール 小宮豊隆譯
青い鳥 小宮豊隆譯
ボリウクト 木村太郎譯
人間燈 中村白雲譯
マノン・レスコオ 阿部好雄譯

從兄ボンス 上巻 水野 亮譯
從兄ボンス 下巻 水野 亮譯
知られざる傑作 水野 亮譯
カルメン 水野 亮譯
コロロンバ 水野 亮譯
エトルリアの壺 水野 亮譯
ノア・ノア 水野 亮譯
日の出前 水野 亮譯
希臘の春 水野 亮譯
ソアーナの異教徒 水野 亮譯
水の 上 水野 亮譯
ピエルとジャン 水野 亮譯
生の誘惑 水野 亮譯
お菊さん 水野 亮譯
米鳥の漁夫 水野 亮譯
若き日の手紙 水野 亮譯
風車小屋だより 水野 亮譯

愛と死との戯れ 片山敬彦作
獅子座の流星群 片山敬彦作
法王廳の抜穴 石川 稔作
クオレ 愛の上巻 前田 眞作
クオレ 愛の下巻 前田 眞作
恐ろしき媒 水田實定作
作り上げた利害 水田實定作
子 守 唄 水田實定作
希臘羅馬神話 水田實定作
フォースタス博士 水田實定作
バインズ詩集 中村爲治作
エヴァンジェリン 中村爲治作
クリスマス・カロール 中村爲治作
ニニグ サウル 中村爲治作
ラム沙翁物語 野上彌生子作
プレイク抒情詩抄 野上彌生子作
小 公 子 野上彌生子作

聖女デヨウケン 野上彌生子作
人と超 人市川又彦作
鯨夫の家 市川又彦作
思想の邊り 相良三郎作
耕 文 字 佐藤 清作
ハルディ回廊集 森村豊作
幻想を追ふ女(他六篇) 森村豊作
ユリシイズ(一) 森村豊作
ユリシイズ(二) 森村豊作
ユリシイズ(三) 森村豊作
哲學・自然科学 文學 宗教・教育
オラソクテラスの譯出久 阿部次郎作
トクタリト 阿部次郎作
トブラプロタゴラス 阿部次郎作
純粋理性批判上巻 天野貞祐作
實踐理性批判 天野貞祐作
カンプロローメナ 天野貞祐作
イザノ哲學體系 小尾範治作

イザノ知性改善論 島中尚忠作
哲學とは何か 河東 鴻作
イマヌエル・カント 河東 鴻作
歴史と自然科学 道田英雄作
認識の對象 山内得立作
七大哲人 安田 隆作
科學の價值 安田 隆作
科學と方法 安田 隆作
科學者と詩人 安田 隆作
將來の哲學の 根本命題 安田 隆作
史的に見る 科學的宇宙觀の變遷 寺田實彦作
アルプスの氷河第一 寺田實彦作
アルプスの氷河第二 寺田實彦作
自然認識の限界について 寺田實彦作
自然に於ける美 寺田實彦作
藝術の一般的意義 寺田實彦作
ケーベル博士講義集 寺田實彦作
カントとゲーテ 寺田實彦作

カアール・昆蟲記 山田吉彦作
既刊 定價各々
第二分冊・第九分冊・第十分冊
第十二分冊・第十三分冊・第十四分冊
第十七分冊・第十八分冊
チャールズ・ダーウキン 小泉 芳作
種の起原 上巻 小泉 芳作
人及び動物の 小泉 芳作
表題について 小泉 芳作
雜種植物の研究 小泉 芳作
生命の不可思議上巻 小泉 芳作
生命の不可思議下巻 小泉 芳作
回想のセザンヌ 小泉 芳作
この人を見よ 小泉 芳作
ミル 自 傳 小泉 芳作
佛蘭西文學史 小泉 芳作
伊太利文學復興期の 小泉 芳作
文化 小泉 芳作
ペーター論集 小泉 芳作
カフカと東西文學 小泉 芳作

文學史の方法 藤田 鳴鶴作
人間の精神 立花 新地作
戀 愛 論 上巻 前田 眞作
戀 愛 論 下巻 前田 眞作
戀愛と結婚 上巻 前田 眞作
戀愛と結婚 下巻 前田 眞作
イ・エ・ス 林 達夫作
イ・エ・ス 林 達夫作
アウグスティンのフロンテス 山内得立作
アウグスティンのフロンテス 山内得立作
唯一者とその所有 山内得立作
唯一者とその所有 山内得立作
エミール(第一篇) 山内得立作
エミール(第二篇) 山内得立作
エミール(第三篇) 山内得立作
エミール(第四篇) 山内得立作
懺悔 録 上巻 石川 稔作
懺悔 録 下巻 石川 稔作

懺悔 録 中巻 石川 稔作
懺悔 録 下巻 石川 稔作
人 生 論 中村 爲治作
獨逸國民に告ぐ 大井 謙作
内村鑑三遺稿集 内村 鑑三作
文明論之概略 藤田 鳴鶴作
論 畫 四 種 坂 崎 坦 作
法律・社會・政治・經濟
アリストテレスの國家論 藤田 鳴鶴作
法の精神 上巻 藤田 鳴鶴作
法の精神 下巻 藤田 鳴鶴作
權利のための闘争 藤田 鳴鶴作
民 約 論 藤田 鳴鶴作
國 富 論 上巻 藤田 鳴鶴作
國 富 論 下巻 藤田 鳴鶴作
勞働者綱領 小泉 芳作
哲學の貧困 小泉 芳作

資本論初版鈔 長谷部文雄著
マルサス夫人問題を論ず 細川憲六著
エンゲル自然辯證法上巻 加古祐二譯
エンゲル自然辯證法下巻 加古祐二譯
住宅問題 加田哲二著
エンゲルマルサス問題 加田哲二著
カウフキキ基督教の成立 真多野清一著
國家の私利私欲 加田哲二著
フカイエルバツハ論 佐野文夫著
反デューリング論 上巻 長谷部文雄著
反デューリング論 下巻 長谷部文雄著
エンゲル思想より科學へ 澤野 泉著
マルクス・エンゲルス傳 長谷部文雄著
ローザ・ルクセン 松井圭子著
ブルグの手紙 松井圭子著
エンゲルスとドイツ 三木 啓著
エンゲルスとドイツ 三木 啓著
レニ 帝國主義 長谷部文雄著
レニ 唯物論と經驗批 佐野文夫著
レニ 唯物論と經驗批 佐野文夫著

レニ 唯物論と經驗批 佐野文夫著
レニ 何を爲すべきか 平田良徳著
經濟學及課程之原理 小島信三著
道徳の經濟的基礎 草間平作著
建築の七燈 高坂松川著
この後の者にも 西本正美著
地代論 山口正吾著
ペル婦人論 上巻 草間平作著
ペル婦人論 下巻 草間平作著
近代民主政治 一 山田武雄著
近代民主政治 二 山田武雄著
近代民主政治 三 山田武雄著
近代民主政治 四 山田武雄著
近代民主政治 五 山田武雄著
近代民主政治 六 山田武雄著
近代民主政治 七 山田武雄著
近代民主政治 八 山田武雄著
近代民主政治 九 山田武雄著
近代民主政治 十 山田武雄著

經濟要録 佐野文夫著
御註文に就て
□此の文庫は、普及を第一義として刊行する廉價版です。
□内容の厳選 古今東西のあらゆる古典及び、價値高き良書を網羅し、校訂、翻譯に於ても最善を期します。
□最低の廉價 出来る丈安く手に入れられる様に、小さい形の中に、澤山の内容を盛る形式を採りました。
□購求の自由 しかも讀者が全く自由に欲しい本を隨時求められる自由選擇の方法を採りました。
□印刷の鮮明、校正の正確、製本の堅牢等の實際的方面に於ても亦最善を期します。
□價値は菊半裁判、紙裝、平綴百題畫伯裝。
□活字は八ポイントを用ひました。
□約百頁を單位として星一つでそれを現はし、★一つ毎に二十銭の定値です。

□★一つを1に算へて此の文庫の番號を進めてゆきます。
□番號はただ發行順に従つて之を追ふものであります。
□★或は★★★は、それぞれ二百頁或は三百頁の本一冊なることを示し、百頁一つの分冊ではありませぬ。
□定價(及び送料)は左表の通りです。
★ 定價二十銭 送料二銭
★★ 四十銭 送料四銭
★★★ 六十銭 送料六銭
★★★★ 八十銭 送料八銭
★★★★★ 一圓 送料一圓
□御註文は前金で御願ひ致します。小さい本で極度の廉價なものですから必ず送料にお慮へ下さい。切手代用は一切増に願ひます。

最新刊書目

武 道 傳 來 記	西田萬吉校訂
論 畫 四 種	坂崎坦編
侏 儒 の 言 葉	芥川龍之介著
生ひ立ちの記 (兩學生)	島崎藤村著
註李太白詩選 (上巻)	幸田露伴校訂
聖女デョウン (ダルク)	野上豊一郎譯
ハルマンとドロテア	森村 豊譯
ユリシイズ (三)	森村 豊譯
風車小屋だより	小野安彦・村山 譯
ヘルマンとドロテア	下田 佐譯
幼 年 時 代	佐藤 道次譯
幼 年 時 代	トマス・トイ作
少年 時 代	トマス・トイ作
少年 時 代	米川正夫譯

コ-3269

光

最新刊書目

トルストイ 人は何で生きるか (第四篇) 中村白葉 譯 *

トルストイ イワンの馬鹿 (他八篇) 中村白葉 譯 *

永遠の良人 ドストイェフスキイ 作 原久一郎 譯 *

三人姉妹 チエーホフ 作 米川正夫 譯 *

内村鑑三隨筆集 内村鑑三 著 *

人生論 中村白葉 譯 *

エミイル (第四篇) 平林初之輔 譯 *

イ エ ス 林 達 夫 譯 *

アルプスの水河 (主に科學的) 矢島祐利 著 *

反デューリング論 (下巻) 長谷部文雄 譯 *

近刊書目

歐日日本書紀 (下巻) 島板壽美 編 *

西鶴諸國咄 和野萬吉 校訂 *

李太白詩選 (下巻) 幸田露伴 校訂 淺山又四郎 譯 *

ユリシイズ (四) 森田他五名 譯 *

人間機械論 杉・メトリイ 著 *

フアル昆蟲記 (第二十号) 山林達夫 譯 *

~~569~~

~~14~~

終

